
イロナキシ-Discolored death-

松ノ山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イロナキシーDiscolored death

【Nコード】

N1713Y

【作者名】

松ノ山

【あらすじ】

戦争によって広く荒廃した世界。

世界を再生するために生まれたアンドロイド技術は、次第に企業間の抗争のための武器となった。

単純に稼ぎを目的としたもの、破壊を楽しむもの、死に怯える者。人々は創られた平和の中に生きていた。

脆く、脆く、それでいて、壊れにくい日常。

そんな世界で、代えられない日常を送る少年と少女。

壊れてしまったものを、失ってしまったものを取り返すことは難しい。たとえそれを取り戻しても、気付くことは難しい。すれ違う想いは近づけない。

近未来ものです。

タイトル変更しました。

ちなみに変更前のタイトルは『ディスカラー・デッド』でした。

Discolor dead で変換すると、「突然変色しなさいッ」になります。何でだよッ！！ って叫びそうになったので変更しました。はい。

何かほかにいい案があれば、教えて欲しいです。

人狩りと蠅螂（前書き）

気分転換に始めました。

期待はせずに。きままに更新していきます。はい。

人狩りと蠍螂

世界は鈍色の空に覆われていた。大地に凝然として生える高層建築は、どれもこれも半壊していた。ビルの剥き出しにされた鉄筋が^{あばら}肋を連想させる。己を支える柱には亀裂が走り、崩潰^{ほうかい}寸前で維持されている。

蜘蛛の巣の如く巡らされたアスファルトの路^{みち}はいたるところで断裂し、その役割を放棄していた。錆びが生じ赤褐色に覆われた自動車が遺棄されて、地平まで続く行列を成している。

^{せきばく}寂寞とした街、かつては日本の大都市であった。既にその名は忘れられ、その周辺の土地も含めて『外部居住区^{デッドゾーン}関東地区』と呼称される。

現在に過去の隆盛した街並みは見られず、^{こつりよう}荒寥とした廃墟が鎮座していた。

それでも、そんな劣悪な環境に人は生活していた。

彼らは生活の場を追われた浮浪者であった。身に纏う衣類は粗悪なシロモノばかり。裸体を隠すだけの布地を服と呼ぶのなら、まさにそれであろう。

垢^{まみ}に塗れ、見るからに汚臭を放っているようなモノもあれば、擦り切れ引きずるほど解^{ほつ}れているモノもある。

彼らが心底、切望すると言えば新調の服と十分な食事だろう。最低限度以下の生活を強いられた彼らには、これまで救いの手が差し伸べられることがなかった。そしてこれからも。

代わりに与えられるのは、^{おびただ}夥しい鉛の銃弾や冷酷な刀身であった。

『人狩りだ!! 逃げろッ』

怒声と絶叫が混濁し、廃墟を徘徊していた人々は思い思いに安泰

の場所へと疾走する。

人々の背後からは複数、顔面に鉄製の防護面をした巨漢の人間が迫っていた。高さは二メートルになるだろうか。その手には既に突撃銃が構えられている。

死神の行進とも呼ばれ、この廃墟の人間の怨恨の対象の存在。いや、世界中から見てもその存在は嫌悪されていた。

彼らの目的は資源採掘の労働力の蒐集であり、そのためにその人道から外れた行為も正当化されてしまっていた。

突如、反対から乾いた射撃音が響いた。男達が拳銃の照準を防護面の人間に定めていた。

「くそっ！！ 女子供を優先して逃がすんだ！！ 男手をもっと回せッ」

矢継ぎ早に銃口が火を噴き、放たれた銃弾が標的に見事到達する。不可解にも撃たれた人物は何一つ動ぜず、被弾部を押さえることをせず、手にしたアサルトライフルの引き金を引いた。フルオート射撃の雨が男達の存在を掻き消し、壁や地面に赤黒い滲みを残す。

「わあああああああああああッ」

一気に瓦解する防衛前線を蹂躪するように銃弾が浴びせられる。撃たれても止まらない死の行進は続いていく。

半壊したビルの頂上で、そんな光景を眼下に見下ろす影像があった。

『どうすんだよ。もう始まっちゃったぞ』

『じゃ急いで！！ 依頼はデッドラインの殲滅及び人々の援護よ。なるべく迅速に行動して。あまり悠長にやっていると報酬が減らされ

るから』

通信越しの会話。少年と少女の声が飛び交う。

『了解。んじゃ、一掃してきますか』

『ちゃんと完遂してよね。前みたいに取りこぼすなんて事がないようにね』

『了解』

少年——そうのせ みつる三ノ瀬美鶴は眸を閉じ、大きく深呼吸をした。いや、実際には肉体はこの場にはなかった。あるのは金属の骨格をした、人に似た背丈の無機質な機械だった。

騎士——精神のみをそれに設けられた擬似脳に移し、操縦する武ア装機械人形。アンドロイド

美鶴はその操者の一人であつた。

プライムモーター原動機の駆動音が鳴り、美鶴の騎士が稼動を始める。

まるで蟪蛄を想起させる流麗な形姿。フォルム目を引くのが右腕の肱部分ひじから先、そこに巨大な折りたたみ刃が収まっている。それがこの美鶴専用騎、《かまきり鎌錐》の主兵装、大刀兼大鎌の武器——デスサイズである。

さすがに減給は痛い。美鶴は殺戮を繰り返す人影を視認する。この場所は相手からは死角になっている。手早く相手の数を把握する。

『ヘヴィアーミー重武装兵がいるから注意して、騎士の損傷は最小限に止めてよ』

「分かっているよ。てかいちいち話しかけんなよ、由佳里。集中が途切れるだろ」

『サポーターなによ、私は君の補助者だよ。逐一、リアルタイムに指示を出すから』

少女——羽城由佳里はしろ ゆかりの澄んだ声が脳裏に響く。騎士との精神接続状態時には、操者の体感世界は生身の肉体時と大差ない。

変わるとすれば、敵を捕捉した時のカーソルが視界に表示されることと、熱や冷気を感じないことだろう。不思議にも衝撃などの痛覚は感じる事が出来る。

「んじゃ、任務を始める」

『目標の駆逐及び、人々の援護だからね』

ここで救済といえないのが、齒がゆく思える。今ここで死神の手から救ったとしても、その後に幸せはないのだ。その場しのぎの行動。

だが、それも依頼された任務である以上、私情を挟まず遂行しなければならぬ。

美鶴は一気に跳躍した——自分の肉体を動かすように自然な動作で、鎌錐が宙に躍り出る。美鶴の人間としての肉体は、遙か数十キロ離れた日本の都市の老朽化し寂れたアパートの一室で眠っている。その一室には由佳里が付き添っている。

幼馴染であり、操者と補助者の関係。戦うもの、見守るものの関係である。

眼下に迫る人影に向け、右腕を後ろに引いた。刃が収納されたデスサイスは強力な打撃武器にもなる。風切り音かざきを伴って突き出す、美鶴はデッドラインの一人を地面に叩き潰した。地面が陥没し、視界いっぱい金属片が飛び散る。人間のようであったそれは一体の機械人形アンドロイドであった。

『西の凡庸騎士ね。発声機能も無い粗悪品ばっかで性能面では圧勝

ね。ただ銃器には気をつけてよ。相手はやっかいなシロモノを持ち込んでいるみたい。あっ、後ろッ』

由佳里は、リアルタイムで周辺の解析やルート検索などを行う。騎士頭部に備えられたセンサーより随時送信される情報がそれを可能にしている。

美鶴は上半身を捻り、右腕を振った。

鈍い衝撃を伴って、背後の騎士が弾き飛び、自動車のフロントガラスを突き破る。そのまま沈黙。

殲滅依頼は楽だ、難しいことは考えず破壊すればいい。

カーソルが自動探知して敵の位置を知らせる。大口徑機関銃を構える騎士がこちらに照準をあわせていた。すかさず跳躍し、主兵装を展開させる。

黒光りする乱れ刃の刃紋が露になる。大鎌——デスサイズ。完全展開時には一振りの大剣にも変貌する。

死神の鎌で死神を刈るのか、美鶴は可笑しく思った。

マズルフラッシュ
銃口炎が瞬き、ライフル弾が吐き出される。その上を跳んで、落下と同時に横薙ぎの一撃を放った。

敵の胴体を裁断し、火花を散らす。地面に転がった騎士の赤い双眸が、睨んだ錯覚を覚えて踏み潰す。

そうして周囲を見回せば、やけに大きな人影があった。シルエット
距離計が知らせたのは一五〇メートル。レンジファインダー

——あれか、厄介なシロモノは。

『カノン砲よ。あんなものを騎士に装備させるなんて……。完全に人の捕縛目的の利用じゃないわね』

美鶴も由佳里に同意見だった。さすがにあれは戦争に向かう戦車

さながらだ。

右肩に装備されたカノン砲の砲身から撃ち出されるのは、榴弾を始めたとした遠距離射撃用弾であろう。周辺に人がいることを考慮すれば、撃たせるわけにはいかない。

背部の加速機^{ブースター}を起動させる。同時に冷却装置^{ラジエーター}が急稼動を始める。

『あんまり、加速すると熱暴走^{オーバーヒート}するよ』

「下手打たないさ。一瞬で終わらせる」

『うん、分かった』

由佳里との会話を簡便に済ませ、美鶴は敵を見据える。前に踏み込むと同時に、背中に四枚の光翅が生える。そして世界の色が混濁する異様な速度での加速で跳んだ。

擦過しながら距離を詰める。

『注意して、来るよッ』

前方で閃光が走った。美鶴は悪態をついてデスサイス振り上げる。転瞬、その刀身を通過した榴弾が寸分違わず二つに裁断される。それに続く爆発。

「クソヤロ、撃ちやがったッ」

背後からの爆風に押し飛ばされ、体勢を崩しかけながら残り距離を跳ぶ。

残り十メートル。敵が再照準するのが分かった。力任せにデスサイスを振り下ろした。

視線の先で敵騎士の右肩部分が断裂され、その背後のビルのコンクリートが轟音と共に破碎した。デスサイスの一撃が斬撃を飛ばしてみせた。《鎌錐》主兵装、特有機構『引き剥がすもの^{デイスコネクター}』、射程距

離を有した剣閃である。

視線の先でカノン砲が完全に分離し、重厚な音を響かせ落下する。武器の無い騎士など、ただのマネキン人形に過ぎない。

加速を伴ってそのまま《鎌錐》の逆間接の脚部で敵を踏み倒す——つもりだった。下手を打った。

ものの見事にバランスを崩し、美鶴は相手ごと地面に突っ伏した。

「やっちゃまった……」

慌てて調べる。損傷軽微。何とかなるだろう。

『……何ともならないわよ』

由佳里が心を読んだかの如き応答をする。通信越しでもその表情が強張ったのが分かる。

『何華麗に転倒してんのよ!! あとで修理するの私なんだからね!!
君の寝顔に油性の髭を生やすよ』

どんな嫌がらせだよ。美鶴は呻いた。

由佳里が不機嫌になる訳は重々承知している。彼女はサポーターと同時に、整備士としても尽力してくれている。故に馬鹿な行動で傷つけられることに憤りを覚える性質らしい。

壊すなら格好良く、度派手にやるのを所望している。こちらとしては度派手に破壊されたくも、したくもないのだが。

「悪かった、次は気をつける、ホントにごめん」

『ペンキにするわよ』

「やめろ!! かぶれるだろッ」

人が仕事してる間に、人の身体に何するつもりだ。

そうこうする間に視界に新たにカーソルが表示され、敵の捕捉を伝える。

やれやれ、ザコばかりだが数がいる。

美鶴は気持ちを切り替え、デスサイスを構えた。もうもうと立ち昇る砂埃、漂う硝煙。その中に機影を濃く、浮かび上がらせていた。

——二〇二五年、世界は戦争によって荒廃し、かつての国家や政府は消滅した。世界の再生計画は企業連合体の分裂により途絶され、世界は今なおその傷跡を残したままにしている。

二〇三四年、自社の利潤を優先した巨大企業は、その発展のために世界中から労働力を掻き集め、終わらない抗争を激化させていた。
デッドゾーン
外部居住区、戦争の爪痕を色濃く残す地域。助けなど望めるはずのない毎日が延々と繰り返される。

その場所は今現在も、戦場に取り残されている。

『終わった。依頼主^{クライアント}に報告頼む』

『了解。お疲れ様。五時のタイムサービスの前に帰投してね』

「は？ 俺にお遣い頼むのかよ!？」

『いや、荷物持ちだけど。んじゃ一旦通信切るよ。じゃね』

その言葉で不通を知らせる表示が現れる。

——はあ、随分な扱いだな。

美鶴は憂鬱に曇った空を見上げた。足下にはバラされた騎士が機能を停止している。

見渡せば逃げ惑っていた人々がこちらを窺うようにしている。

子供が数人、手を大きく振りかざしていた。

『ありがとうございますッ』『助かりましたッ』そんな声がいたるところから上がるも、大人達がそれを制する。

『さっさと失せろッ』『俺達を救ってくれッ』『俺達は何をしたっていうんだッ』

彼らは悪くない。残念ながら自分には彼らを本当の意味で助けることなど出来はしない。自己嫌悪に身が振れそう^{よじ}だ。

「俺もまた、救われぬ者だよ」

美鶴は誰にも聞こえないように、由佳里に聞こえないように、そう呟いた。

二〇二五年、その日を人々は忘れることが出来ない。

その年、その時、世界は終わった。^{ブレイクダウン}『大崩壊』そう総称される世界戦争が起きた。

二〇三四年、世界は未だ争いが絶えない。

人々は、欺瞞で溢れる世界に生かされている。

夕方五時のタイムサービスと料理

外部居住区の廃墟を進めば、高さ五〇〇メートルを越えるコンクリートの隔離壁が出現する。

旧東京・旧埼玉・旧横浜・旧千葉の四県に跨る地域、首都圏だ。またが

大崩壊の後、世界中に再形成された可住地域。日本では旧北海道、

旧東京、旧愛知、旧大阪の地域を中心に北州圏、首都圏、中京圏、

近畿圏があり、厳格分轄がなされ境界線として隔離壁が建てられた。エリア1 エリア2 エリア3

その存在理由は内陸側からの侵入を防ぐことだった。

それぞれは巨大企業が統治しており、多くはその企業の総裁がエリアの統治者として君臨している。

美鶴はその壁の向こうで、高級官職に付く人間に対して憤りを感じ、壁を睨んだ。

彼らは人々の安寧の生活よりも自身の利益を優先した利己主義者だ。エリア内の人間は大崩壊前の生活を取り戻しつつあるが、外部エリアの人間に対しての救済策は講じてこなかった。

いや、確かあったはずだ。だが、結局は彼らの傲慢さが仇となり、摩擦を生じさせ途絶された。

隔離壁を出入りするには馬鹿高い関税が課せられている。どこのエリアでも同じである。

そのために自分のように騎士を用いて稼ぎを行う連中は、非認可通路を開拓または提供されることでその手の出費を押さえていた。

今回の依頼では依頼主が用意してくれた偽造証明書によって、我が物顔で出させてもらった。

警備の騎士の落ち込みようが目に見えかぶ。彼らは日頃の鬱憤を非合法者に対して向ける。入り口の一つであった門扉方式通路の周囲には、ボロボロの衣類で蹲うずくまったままの人や原型を止めない騎士が無造作にされていた。

さすがにあんなことにはなりたくないな、美鶴はそう零した。

何事もなく門での入圏審査を通過^{バス}し、美鶴は隔離壁の中に足を踏み入れた。いきなり出迎えてくれるのは侘しい景色。首都圏^{エリア2}の外周には低層階級の人々が生活をしている。

綺麗に敷設された舗装路。道路の脇に並ぶ民家はどれも同じに見える賃貸住宅。

フロントガラスの碎け散った車、錆び付いた金属片、弾痕を残す家の塀。

一〇年近く経った今なお、大崩壊の痕跡が残される地域。

それでも外部居住区の間人と比較されれば、天と地であろう。少なくとも彼らには、非情な仕打ちはないのだから。

美鶴は視線を外周区の奥、エリア中心に向ける。《鎌錐》のカメラアイを通して、その眼に映るのは天を目指すかの如く、生やされた摩天楼の群れ。欲望の棲家である。

美鶴は嘆息して、《鎌錐》の足裏で荒れた大地を蹴り上げた。

次々と変わる景色。奥に向かえば向かうほどにその街並みは時代を進む。

既に周囲には整った閑静な住宅街の街並み。我が麗しのボロアパ―トももうすぐだ、美鶴は道を急いだ。

『その騎士!! 止まりなさい』

ふいな警告に《鎌錐》を踏みとどまらせた。

——くそっ、職質かよ。

視線の先では、仏頂面でひどく丸っこい顔の刑事とそれに同伴する騎士がいた。

「よお、美鶴じゃねえか。今仕事帰りかあゝ精が出るな」

「お久しぶり。津野田さんは見回りなんですね」

「おうよ。てえめえとは違ってこっちは公務員だからな。そろそろ休みが欲しいぜ」

自身で肩を解し、首を鳴らす警察官がげんなりとした表情をみせる。

津野田昌親、首都圏内の治安維持などを目指す治安・法執行機関の捜査課に属す公務員。何かと縁があり親しい仲である。

仕事の関係で、外部の状況などを根掘り葉掘り尋ねてくるのには窮するが……。

『ただいま、五時十分前になりました。タイムサービスが始まりますよ』

突如、そんな言葉が耳元で響いた。

美鶴は視界の不通表示が消えていることを確認して、口を開いた。

「分かった!! もう行くからッ」

『逝ってらっしゃい』

「悪意が込められた気がすんのは気のせいかな？」

とりあえず由佳里が機嫌を損ねかけていることははっきりした。急いで戻ったほうがいいだろう。

「すみません。津野田さん。由佳里に急かされてるんですか？」

「由佳里ちゃんはいいい子だよなあゝ。別嬪さんだしな。待たせて悪いから行けッ」

「あざっす」

美鶴は津野田と付き添いの騎士の前を跳んで、過ぎ去る。
後に残された津野田の視線はその後ろ姿を追った。ふいに声がかかる。

『彼とは友人みたいです』

同伴した騎士から発せられていた。白黒のパトカー色に塗装された形姿。フォルム警察専用の騎士であった。

「ああ、あいつの事は小学生の頃から知ってる。悲しいほどに不幸な子供ガキさ」

沈黙する騎士に対して津野田は破顔させて、その硬質な背中を叩いた。

「シケてんと不幸になるからな、後で一杯やるか」

「それじゃ、津野田さんの奢りで」

「おめえもしたたかになったなあ〜」

津野田は一瞬だけ、その視線をもう見えない機影に向け、反対に歩き出した。

「ゴーロールインッ」

美鶴は急停止ブレイキをかけて止まった。

目の前には色が剥離し黒ずみ、階段は赤褐色に錆びついたオンボロアパート、《白夢荘》。

少なくとも見た目は白い夢を提供してはくれなさそうだ。

美鶴は階段に足をかけず、一気に二階へと跳躍する。《鎌錐》の重さで錆びた階段を踏もうものなら、数秒ともたずに階段が崩壊するだろう。

慣れた動作で二階通路に躍り出ると自室のドアへと走った。傍から見れば滑稽であるだろう。

騎士がアパート二階で全力疾走など滅多に見られる光景じゃない。見ることが出来た者は幸運の持ち主だ。いや、もう幸運を使い果たしたな、ざまーみろ。

左手でドアノブを捻る。ガチャリという金属音が鳴り扉が開けば、見慣れた玄関口と奥に続く八畳一間の我が茅屋^{ぼうおく}。

「遅いよッ」

叱責が飛ぶ。八畳の部屋の四分の一、二畳分を占める戦闘機の操縦席の如きカプセル容器の隣で、由佳里が腰に手を当て人差し指を向けていた。

——人に指を向けちゃいけないんだぞ。

これ以上、由佳里の機嫌を損ねることは憚^{はばか}られたので自重する。

「すぐに逆転送^{リバース}してくれ」

代わりにそう言って、美鶴はカプセル容器の隣に並んだ。転送装置であるその中には美鶴自身の人間としての肉体が納まっている。

天井から吊り下げられるようにして、幾重にも束ねられた高圧電力ケーブルが延ばされ、この容器と接続されている。由佳里はその中からプラグイン方式ケーブルを見つけ出し、《鎌錐》の首筋の接続部に差し込んだ。そして片手にノートパソコンを持ち、肉体と騎士との精神認証をさせる。

アヴィアター

操者と騎士の間での精神移動は安全面からケーブルを介して直接接続されなければならない。非常時、たとえば大破した場合でも緊急機能における精神^{リバイバル}回帰によって元の肉体に戻ることは可能とされる。

ただし、その場合は酷い船酔いのような症状、吐き気、頭痛、平衡感覚障害などが生じる。最悪の場合には精神異常、人格の剥離、記憶障害などを引き起こす可能性がある。

つまり騎士の破壊は相手に対して、相応の傷害を与えることになる。それでも美鶴にはそれを躊躇する理由にはならない。

「認証完了。逆^{リバース}転送開始、三、二、一」

カウントダウンと共に美鶴の視界は暗転する。徐々に不鮮明な景色しか映らなくなる。

何も見えない、何も聞こえない世界。一瞬だけ虚無になったかのような錯覚を覚える。

すぐに光と音は戻ってきた。

「お疲れさま」

由佳里が容器を開封する。プシューという気の抜ける音が鳴る。

視界を覆う金属製のバイザーを外し、美鶴は眩しそうに目を開き、二度三度しばいた。

やはり自分自身の肉体の方がいい。

美鶴は大きく伸びをした。身体が小気味な音を立てて鳴る。

「よしッ、ただいま!!」

「接続時間よしッ、タイムサービスが始まるよ!! 行くよ」

「ッ!! うわッ、そうだった。しかも荷物持ちとか何だよ、俺は

下僕かッ」

「違うの？」

——おいッ……。

頭痛がしてこめかみを押さえる。嘆息して転送装置から出る。
そして改めて目の前の少女を見た。

羽城由佳里。

彼女は街中を歩けば人目を引くほど、美麗な容貌の女の子だ。

容姿端麗、その言葉が合致している。

細い眉、大きな眸、^{ひしみ}短めに整えられたクセのない明るい暖かな色の髪で、身体のラインは女性らしい際立った曲線をしている。

今日はデニムパンツにベージュの^{ジャンプスーツ}トレンチコートといった出で立ちだった。いつもは黒の純色の作業服か学生服を着ているために私服姿はなかなか拝見できない。

他に挙げるとすれば時折胸の大きさを自慢している、同性異性に関わらずだ。

美鶴は重量感ある溜め息を吐き、眉を暗くした。対して自分はどうだ。

目にかかる栗色の髪、小顔、身長一六五センチ。

他人に言わせれば、随分と端正な容姿らしい。そして……とても可愛いらしいと。

ちょっと待て、おかしくないか。自分は男だぞ。可愛いなんて言葉が合致しないでもらいたい。

美鶴は不幸そうに天を仰いで嘆息した。

「なんか間違ってるよ……」

これは余談であるが、美鶴には中学校時代の卒業アルバムで『弟にしたい男子』のNo. 1に輝いた黒歴史がある。それも卒業生だけではなく、学年全体選挙であった。

そこで後輩達からも票数を一身に集め、ぶっちぎりの頂点に立った。

その内訳は全体五六三票の実に四九六票、九割の投票率であった。卒業して二年経った今も学校の伝説として語り継がれている。

「もう、溜め息ばかりだと幸せが逃げるよ」

由佳里が笑って何かを差し出した。

彼女の手にはコンビニでよく見かける棒付きキャンデー。商名は『ペロッキー』。

何とも愛らしい名前である。

美鶴は感謝を口にして受け取ると、包装紙を取り除いて露わになった茶色い飴玉を口に含んだ。

『マッズいなコレッ!!』

途端に吐き出して悶絶した。

慌てて包装紙を拾って確認すると、カエルに近似した可愛いキャラクターの足下に並ぶ死の呪文。

『納豆チョコレートバナラクリームカスタード味』

「何で最初に納豆をチョイスしたんだよ!!」

これを開発した製菓会社の社員は異星人か、味覚障害者に間違いない。

「奇抜過ぎんだろ。時代を先駆けしてもこれは有り得ない」

しかめつつ由佳里を一瞥する。何故この味を寄越したのだ。

視線の先では彼女は平然とキャンデーを咀嚼していた。もしや味覚障害なのかと心配して、捨てられた包装紙を恐る恐る覗いた。

『チョコバナラ味』

「由佳里、お前腹黒いな……」

「何のことだか分からないなあ。ほら、行くよ」

白い歯を覗かせて由佳里は玄関口へと向かう。後姿に揺れる髪を目で追いながら、美鶴もその後を追った。

外に出れば、騎士では感じられなかった冷気が肌を舐める。

今は曆上、秋なのだが既に冬の冷気を纏っている。

美鶴は翠のパーカーにロングカーゴ姿である。美鶴は右手をポケットに突っ込み、階段を下る。

一步ごとに軋む音が響く。毎度毎度、下に抜けないか心配になる。

「そーいや、オヤっさんは？」

先を歩く由佳里に問いを発した。

「竹ちゃんは委員会があるから、七時過ぎに帰るって」

「ああ、そうなん。分かった」

由佳里に竹ちゃんと呼ばれる人物は、美鶴の整備士である齡五〇を越えるおっさんだ。

たけやま ぶんぞう
名は竹山文蔵。

顔の造形がいかつい上に、体躯ががっしりしている。

騎士取扱組合に参加しており、騎士の整備士としてもそこそく名が知られている。

週三のペースで委員会に出向してる。

美鶴の住むアパート《白夢荘》の大家でもある。茶羽織を常に着ていた。

「ほくら、急いでよ」

「はいはい」

美鶴は駆け足になった由佳里を見失わぬように走り出す。

雲の切れ間から太陽が覗いた。

茜色に染まりだした世界は、幻想的というよりも血に濡れて見えた。

隔離壁に囲まれた日常。人々は外の過酷さを忘れかけている。
創られた平和はいつまでも続きはしない。

過去と現在と野菜炒め（前書き）

美鶴がアヴィアターになった時の年齢を変更。

過去と現在と野菜炒め

「大収穫♪ だいぶ安く買えたね。おまけもいっぱい付いたし」

由佳里が嬉々としながら、軽快な足取りで通りを進む。白い吐息が淡く消えていく。

すっかり日の落ちた首都圏^{エリア2}。

遠くを見れば航空誘導灯が隔離壁^{あか}を朱く縁取っている。

「色気でおじさん口説いただけだろッ」

宣言どおり戦利品を両手に持たされた美鶴は悪態をついた。

「いいじゃん。君も安く買えたんだからさ」

「お前のせいで俺は筋骨隆々な禿頭のおじさん達から敵視されてたんだぞッ」

無言の顔が由佳里に近づくなと示していたのだ。

由佳里が首を傾げ、口元に人差し指を当てた。

「ええ、別に好意を抱いてくれる人もいたじゃん」

「あんな兵^{つわもの}は好意の対象外だ!! 俺を冥府魔道^{いざな}に誘うなよ!!」

美鶴は呻いて星の見えない夜空を見上げた。

——あのひよろ長おじさんはゲイバーに入り浸っていてももらいたい。いっそ日の光を見るなッ!!

げんなりする美鶴とは対照的に、由佳里は心地よい笑い声をたてる。

その笑顔に目を奪われそうになり、美鶴は慌てて余所に視線を向けた。

由佳里には笑顔が似合っている。それを自分は失わせたりはしないだろうか。

そんな疑念が浮かんだのを美鶴は緩く頭を振って忘れようとした。たわいのない談笑を続けて二人はアパートに辿り着いた。

「さてさて、今晚はどうしようかな」

軋む階段を駆け上がって、由佳里が合鍵でアパートの色褪せた朱色のドアを開ける。

「お、ありがとう」

由佳里がドアを押さえてくれているうちに、その横を通って美鶴は部屋に入る。

冷え切った部屋の空気に身を震わしつつそのまま、日に焼けた八畳部屋の片隅に鎮座された卓袱台ちゃぶだいの上に二つのビニール袋を載せる。そうして背骨を反らせばポキッ、ポキッと軽快な音が鳴る。

「んじゃ、由佳里の分はこっちな。気をつけて帰れよ」

振り返って見れば無人の玄関へと続く通路。

疑問符が浮かんだ美鶴の背後からふいに声が上がった。

「今日の晩御飯は何だろな」。楽しみだなあ」

「……………作んねえぞ」

「晩御飯、何か作ってよお。わたしの食材使っていいから」

視線を卓袱台に戻せば、行儀良く正座する由佳里がそこにいた。コートを脱いで、長袖のカットソー姿になっていた。

胸を寄せてフェロモンを放出している。

美鶴はそれを極力見ないように努めて、玄関口を指差した。

「ここはお前の家じゃねえ。マンションにか・え・れッ」
サポーター

「補助者を不当に扱っていいのかなあ？ 《鎌錐》にバニーガールの格好させるよ」

騎士にバニーガールとは何とも背德的過ぎはしないだろうか。

そんな格好で街中に出れば、確実に不審者または欲求不満な変態だ。

美鶴はパーカーの袖から覗く左手で拳を握り締め、齒軋りして、言葉を紡いだ。

「……ご要望は何でございましょうかッ」

「野菜炒めをお願いします」

由佳里は深々とお辞儀をして申し上げた。

美鶴は吐息を漏らして、意外に簡単などが来たことに拍子抜けしながらも了承した。

別に自分自身、料理好きを自称しているだけあって人に腕を振舞うことは好きだ。

ただ由佳里に対しては素直になりたくはないという意地があったりなかったり。

美鶴は水色のエプロンを付け、自分自身の買い物袋からもやし一袋を持ち出す。炊飯器に電源を入れ、米を炊く。

「あれ、自分の使っちゃうの？」

「感謝しろよ」

由佳里は微笑を浮かべて頷いた。そんな動作に扇情的さを感じてしまうのは末期症状か。

「コタツないの、転送装置邪魔だな。狭いなあ。」

「狭くて悪かったな……」

――確か冷蔵庫にキャベツと人参があったな。

冷蔵庫の一番下段を開けて、新聞紙に包まった塊と明るいオレングジの人参を取り出す。

「あとは肉と、ニンニクってどこか」

使い込まれたであろう年季ある台所で料理の準備を整えると、ドアが何者かによって開けられた。

「うー寒い。帰ったぞい。なんだ、美鶴もおるのか？」

ここは俺の部屋だ、と叫びたいのを堪える。

どうやら文蔵が帰って来たらしかった。

時計を見れば一八時四五分。

美鶴の視界の隅で、角ばった白髪交じり頭にエラの張った顔貌の老人が姿を現し、由佳里と同じようにして席に着く。そうして懷より日本酒、一斗瓶を取り出した。

「おい、何かつまみはないのか？」

「俺は未成年だッ！！ 自分の部屋から持って来いよ」

文蔵はこの大家であり、騎士の整備士であり、美鶴のお隣さんであった。

三人も入るだけで非常に狭苦しくなった部屋。

既に部屋の四分の一近くを転送装置に占拠されているので、始めからほとんど人が寄せ集まれる空間はないのだ。

美鶴は後ろ髪を掻き爪って、料理に意識を集中する。

もやしを茹で、キャベツは雑把に切り、人参は短冊切りにしている。

野菜炒めだけは寂しいので味噌汁もメニューに加える。

気付けば鼻歌を口ずさみながら中華鍋を操っていた。出来た野菜炒めを菜箸で三つの皿によそる。

味噌汁もお碗わんに分けて、文蔵のために冷蔵庫より沢庵たくあんと壺漬けを取り出す。

「はい、どうぞ」

湯気の立ち上る料理を卓袱台に載せて、美鶴も席に着いた。

そうして浮かぶ疑問。何が悲しくって、三人集まって部屋の隅で卓袱台を囲ってなきやいけないんだろうか。

「家政婦さながらだな。儂にも一人ほしいな」

文蔵が顎に手を当てて独り言ちる。

「お持ち帰りしちやえば？」

由佳里がそれに答えた。文蔵はいい考えだと言いたげに手を叩く。

「そうだな。うむ、そうするか」

「断固拒否させてくれッ。てか早く喰えよ」

華やぐ場に久しぶりに賑やかな食事だなと美鶴は思った。

「やっぱり、君の腕は確かだね。私じゃこうはいかないよ」

由佳里が機械的に箸を動かして、野菜炒めを口に運ぶ。

「喋りながら喰うなよ……」

「そうだ、おい美鶴。リモコンはどこだ。ニュースを見なければ」
「ああ、ここ。卓袱台の下」

美鶴は取ったリモコンの電源ボタンを押して、テレビの電源をつける。

人の声が漏れ出すと共に映像が映し出される。キャスターが険しい表情で報道していた。

『伊集院総裁いじゅうそうざいと設楽国家主席しつらくとの会談が来月行われることが決まりました。そこで日本エリアの外部居住区の難民への救済策及び外部環境の改善策が話し合われることが焦点となっています。この会談で一つの復興の兆しが見えるのか、人々の期待が募っています。それでこの会談の——』

「うむ。クロツカと西施せいしの両総裁が会談を行うのか。だが内容あるものになるだろうか。儂には形式ばったものには見えんな。市民の疑惑を静めるための布石にしか映らん」

文蔵が一杯やりながら、テレビの画面を凝視する。眉はひそめられ、いかがわしげな表情を浮かべている。

美鶴は興味の薄い視線をニュースに向けて、味噌汁みそ汁を啜すすった。

クロヅカ——首都圏《エリア2》において最大規模を誇る企業。家電から騎士開発など多岐に渡った企業運営がなされている。

質実剛健という風土をもっており、作られる騎士は無骨で重厚なものが主流。大崩壊前からの古参である。

また傘下には重工業、軽工業、建設、航空、コンピュータ関係の数多のグループ企業を抱えている。この旧日本地域においてトップに位置する企業と聞かれれば、クロヅカの名が真っ先に挙がるだろう。

対して西施技研産業、一般には単に西施と呼ばれるが、こちらは近畿圏《エリア4》において頂点に君臨する企業だ。大崩壊後に勢力を拡大した新興企業で、エネルギー関係、軍事機器、生体工業系の産業においてトップシェアを誇る。騎士の製造も行っており、ビジュアル面の重視されたものが目立つ。

この両企業の代表がそれぞれのエリアを統治しているため、今回の会談での成果は注目されることは必須だろう。ただ、これをよく思わない連中も多くいることだろう。

美鶴は今日、散々破壊した死神の行進の騎士を思い返した。あれは中京圏^{エリア3}でよく見られる型式であった。企業間でしのぎが削られる現在では、資源確保のための労働力が最も必要とされている。非人道的なことまでして各企業が欲するのがマグネシウム合金、

《パンドラ》だ。

従来の合金よりも軽く、丈夫で衝撃吸収にも優れている。

最近の工業製品にはほとんど原料として使用されており、マグネシウム資源の確保がここ最近激しく争われている。

もちろん騎士の素材にも使われている。

「食べないのなら君の分も貰っちゃうよ♪」

『次のニュースです。騎士犯罪の増加に伴い、操者検定組合総連合会アヴィアターは操者採用試験の見直しをする方針を固めました。これに伴い各世界エリアでの現操者の資格所持者は再試験を受ける見通しとなっています』

——メンドくさッ。犯罪増加してんのかよ。ツたく、傍迷惑な話だ。アンドロイド技術は当初、崩壊した世界の復興のために開発された。隔離壁の建造や各エリアの再建はそれらのおかげだ。その後医療現場、身体の不自由な人々のためにも開発が進んだ。残念なことに、企業間の競争が表面化し、企業同士の抗争、利益確保として汎用性と機動性が向上し、武装されたアンドロイド——騎士が生まれた。

美鶴は頬を引きつらせつつも、画面から目を離さなかった。

幸いなことに操者アヴィアターになれるのは、誰しもがという訳ではない。適正試験を受け、筆記試験を受け、実技試験という過程プロセスを経て資格を得られる。

大抵の人は適正試験段階で落とされる。理由は接続酔いと呼ばれる症状だ。

一種の船酔いに似た吐き気や頭痛などを催おもすもので、疑似脳への精神転送時に起こる。

それと適正試験を受けられるのは満一八歳の青年だ。性別は問わず、健康体である者ならば受けることが出来る。

美鶴は現在一七歳。美鶴の場合、アヴィアターとなったのは例外中の例外、七歳の時であった。

その時、彼の世界は黒く染まった。何もかもが歪んでしまった。全てを壊され、全てを失った。

「はぁ、ほんとメンドい……………ッておい由佳里。なに人の分まで喰ってんだよッ」

「ほいふいふあったら（おいしかったから）」

「理由になってねえ!!」

美鶴は卓袱台を叩いて声を張った。由佳里は今のが解読出来たことに驚愕したらしかった。

「あいかわらず仲がいいな二人とも。儂の入る余地はないな」

文蔵はかわらず一人、猪口ちよこを片手に漬物をつまみに酒を楽しんでいる。

——入る気ねえーじゃねえか。

美鶴は頬を掻いて、残された野菜炒めを献上した。

騎士と姫と赤頭巾（前書き）

かっこいい文章って憧れます。自分には無理ですけど。はい。

騎士と姫と赤頭巾

「ごちそうさまでした♪」

「ごちそうさん」

「……ごちそうさま」

三人揃ってお辞儀をした。卓袱台の上に置かれた食器はどれも空になっていた。

料理を作った美鶴としては、清々しい気持ちになる。

真っ先に立ち上がったのは由佳里で、いそいそと食器を運び始めた。

「由佳里、俺が洗うぞ」

「いいって、いいって、君にはご馳走してもらったからね。これぐらいしなきゃ」

由佳里は逃げるようにして台所に向かった。

美鶴は浮かせた腰をまた落として、胡坐あぐらをかいた。

横を見れば文蔵が何かものいいたげな表情をしている。

「何だよ、オヤっさん」

「いやなに、由佳里とはあいかわらずだなと思ってな。取り戻すつもりはないのか？ あやつがお前さんを『君』としか呼ばなくなつて二年近くだろう。そろそろほとぼりは冷めただろ」

文蔵が肘の上に頬を載せて、由佳里に聞こえぬ声で言った。

「オヤっさんが人の心配するなんて珍しいな。明日はノアの大洪水でも起こるかな」

「バーロォー、儂も人だ。心配する感情は持ち合わせとる」

文蔵は眉間に皺を刻んで身を乗り出してきた。酒の酔いでも回りだしただろうか。

「分かってるさ。別に名前を呼ばれなくても困らねえしな。この俺がやらかした罪への罰だと思っておくさ」

文蔵を押し止めて、美鶴は壁に体重を預けてもたれかかった。

由佳里が昔は名前で呼んでくれたのは事実だ。それがあつた日を境に失われた日常と化した。

暗澹^{あんたん}たる雰囲気^{あふんき}が立ち込めた気がして、美鶴は話題を振った。

「そういやさあ、この転送装置って縮小化できねえの？ だいぶさ……邪魔なんだよね。部屋^{へや}の四分の一も持ってかれてんだよ」

「無理だな。各組合でもそのことが議題に上がつておるが、技術開発が進んでおらん。今のところは騎士との安全な接続のためには必要なものだ」

文蔵は苦虫を噛み殺した顔をして、日本酒を一杯煽った。

やはりまだ難しいようだ。

現在の転送装置の大きさの理由は、精神転送の安全強化だと知らされている。また騎士のエネルギー補給も理由に挙がるだろうか。

騎士に搭載されているバッテリーは、大抵のものはニッケル水素蓄電池が利用されている。

そこに蓄積された電力が騎士を稼働させる動力になっている。

現在、世界中で化石燃料は供給量が著しく低下しているため、街を走る自動車も皆、バッテリー搭載型が主流である。

中には安全面を度外視してリチウムイオン蓄電池の利用をする者達もいるのだが。

「ところで、お前さんの身体の調子はどうか？」

「可も無く不可も無くってトコ。自分を使うことなんて滅多にないしな」

美鶴はふうふう、と息を吐き出して天井を見上げた。染みが点在する茶色い天井と電灯が視界に映った。木目が人の目玉に見えなくもない。

にしてもボロい部屋である。もう少し家賃は安くならないだろうか。

美鶴の心境を察したように文蔵が「そうだった」と顔を上げた。片方の眉が吊り上がる。

「美鶴、今月分の家賃が払い込まれていないぞ」

「今回の報酬払いで、てかッあと三千円安くしろ!!」

「無理だな。贅沢言うな。八畳で転送装置付きのアパートなど、どこ探しても滅多に見つからんだろうに」

その通りであるので、美鶴は反論に窮して黙り込む。

騎士のリスクには転送時の無防備さが挙げられる。つまり、本体の居場所がバレればそこを攻撃される危険性が考えられるということだ。

そのために最適な拠点を見つけることは、砂漠の中から一カラットのダイヤモンドを探し出す並の難しさだとも言われる。

もしバレた場合、サポーターアヴィアターを守るのが補助者の重要な役割の一つでもある。

ただし美鶴が一室を借りるこのアパート周辺は、騎士組合がアヴィアター操者の安全保障を謳っており、周辺住民も保護意識が強い。こんな地域は非常に珍しかった。

「洗い終わったよ。んじゃ、私はそろそろ帰るよ」

食器洗いを済ませた由佳里がそう声を掛けた。時計を見れば二〇時〇五分。

外は真っ暗で一人で帰らせるには、少々心配になってしまう。美鶴は立ち上がった。

「途中まで送ってく。こっからマンションまでちょい遠いだろ」
「おお、紳士だね」

由佳里が大袈裟に驚いてみせたのを無視して、文蔵に一言声を掛けておく。

「オヤっさん、出るときは鍵を閉めといてくれよ」

「わかつとる。ニュースでも言ってたが、最近騎士犯罪が多いからな。気をつけておけよ」

片手を挙げて返事をしており、玄関に向かった。コートを纏い、厚底ブーツを履いた由佳里が待っている。

美鶴は黒のハイカットスニーカーを履くと、由佳里より先に外に出た。

心地よいよりも刺さる痛さのような冷気が顔に当たる。瞬時に首を竦め、全身に震えが走った。

「もう秋なんだっけ？ 一年は早いな」

「何感傷に浸ってるの。君の頭じゃせいぜい『おお寒いな。早く春が来ないかな』ってのが限界でしょ」

「俺はそこまで単純じゃない!!」

「分かってるよ。ほら、騎士^{ナイト}様。お姫様のお手を引いてください」

人をおちよくった末に伸ばされる右手。

美鶴は照れて熱くなる顔を反対に背け、左手で由佳里の手をとった。

少女の掌てのひらの暖かさ、柔らかさを直に感じて内心ドギマギしてしまふ。

そうして二人は肩を並べて歩いた。美鶴はこの時間が他に変えがたい幸福だと信じた。

「明日も学校か、メンドいなあ。学校なんて無くなっちゃえばいいのに」

「怖い発言すんなよ。確かに億劫おっくうだけどな」

等間隔で立てられた電柱の間を街路灯に伸ばされた影が進む。

脇道を歩いて出た大通りには自動車が増えればかりに行きかかってきた。この果てしない流れの終わりはあるのだろうかと思議に感じってしまう。

「由佳里のマンションはこの通りの反対だよな」

「そうそう。向こう側ね」

美鶴と由佳里は横断歩道で信号待ちをする。美鶴は目の前を通り過ぎる車の数を数えたが、多すぎたので断念した。

視界で信号が青に切り替わる。美鶴は由佳里の手を離さず、歩を進めた。

ふと眸ひとみに反対に向かってくる少女が映った。真っ赤なコートにミニスカート姿。

見た目から想像するにこの時間を一人歩いているのは不思議に思われた。

美鶴は事情ありかな、と思いながら擦れ違おうとした。
ふいに生じる衝撃。

何故か背筋がぞわりとした。一気に体温が下がる錯覚を覚える。
と、少女が勢い良く頭を下げた。

「すみません。あたしの不注意でしたッ。本当にごめんなさい」

おもて
面を上げた少女の顔貌は息を呑むほどに整っていた。暗闇で光を
発するブロンドの髪、透き通った白の肌。

——なるほど、これは……逸材だ。

など美鶴は一人で首肯した。

「あの、何か……」

「ああ、いや何でもない。気をつけて帰れよ。俺は寛大だから別に
気に留めねえよ」

「あ、ありがとうございます」

ふた
二たび、少女は頭を下げてそそくさと横断歩道を渡りきる。
美鶴はその後ろ姿を目で追ってしまった。不覚にも。

「いたいッいたいッ、痛いです!! ホントにッ!! もげるもげ
るッ!!」

突然、耳殻を力ずくで引っ張られる。振り向けば膨れっ面の由佳
里がいた。まなじり 毗が鋭く細められている。

「ほら、赤になっちゃうよ!! まったく女の子に見とれちゃって
さ。無意識に手も離すしさ」

口を尖らせる由佳里に引きずられて、美鶴は歩かされた。

美鶴は金輪際、由佳里の前では他の子に色目を使わぬようにしようと思決意した。

『キシシッ、脆弱になったな顎。^{アギト}すっかり牙を抜かれちゃったな』

真っ赤なコートに身を包んだ少女はふと身を翻し、背後の離れて小さくなっていく二人の影を凝視した。

夜の街、白すぎる肌を晒し、漆黒の眸を闇夜に光らせた少女。

精巧すぎるその面貌は恐怖を覚えさせるほどだった。まるでフランス人形とでも例えようか。

観衆のいない夜の舞台で少女は一人、口端を吊り上げた満面の笑みを浮かべ仰々しくお辞儀した。

鳴らない拍手、演じられない劇、気付けば少女の姿は闇に溶け込んでしまった。

ただ一言、

『お前じゃ誰も守れない。自分自身でさえな』

発せられた警告は夜の闇に捉えられ、誰の鼓膜も揺らさなかった。

代われない日常と一杯の牛乳（前書き）

化石燃料って偉大です。

ないと物語に迫力がなくなりそうなので、とりあえず一般家庭にも普及している設定で。

代われない日常と一杯の牛乳

湯船に浸かり、その半無重力間、暖かさに身を投げ出した。

美鶴は立ち昇る湯煙を目で追って、息で吹き消した。

由佳里を送って帰ってくる頃にはすっかり身体が冷えていた。まだ暦の上では秋は始まったばかりであるだろうに。

顔を半分沈めて、泡を水面に作る。ブクブクブクブク……。

「……ぷっはッ」

美鶴は苦しくなって慌てて酸素を求めた。浴槽の淵に頭を預け、上を見上げる。

美鶴にはもはや生きた肉親は存在しない。父親と母親ともに大崩壊の時に亡くした。

このアパートには中学生時代から一人暮らしを始めている。両親の形見と言えるものは残されておらず、今ではほとんど親の顔を思い出せなくなっている。

自分は本当にこのままでいいのか、解決法があったのではないか、答えの見つからない自問自答を繰り返す。次第に息苦しさを覚えて湯船から身を乗り出した。

刹那、目の前が暗転し、直立出来なくなる。立ち眩んだと思ったときには手を壁について座り込んでいた。

「長湯しすぎたかな……」

美鶴は顔を上げて鏡に映る自身を見た。

右肩関節から先にある皮膚を持たない腕、ひどく金属質な見た目。光沢を放つそれはパンドラ製の義腕である。肉体部と擬似神経で接続され、見た目を除けば自然な動きをしてみせる。

美鶴は人工皮膚でその表面を覆うことを考えたこともあったが、人工皮膚に嫌悪感を抱いて遠慮した。

視線をずらせばこれとは別に目を引く傷跡が存在する。

丁度首の後ろ辺りになるだろうか。まるで張り付いた何かを無理やり引き剥がしたような、横長の蚯蚓みみずば腫れのようになっている。

これらはほぼ同時期に美鶴自身の身体に出来たものだ。振り返りたくない過去。忘れられない過去。

美鶴は鏡に息を吐いて白く濁らすと、踵を返して風呂場から出た。タオルを腰に巻いた状態で部屋の冷蔵庫へと向かう。

開けた中から一リットルの牛乳、商名『骨太スーパ』を取り出してコップに注ぎ、腰に手を置いて一気に飲み干す。

自分の見た目に、とりわけ可愛いといわれることにコンプレックスを抱いているため、無性に身長が欲しかった。残念ながら今年の成長率は去年と比較して+0.2センチ。

ほぼ大差がない。美鶴としては身長一七〇は最低でも欲しいところだった。

あと僅か五センチ。……切望すれば人間いつか叶えられるだろう。全身を長袖ジャージに包み、美鶴は五臓六腑に染み渡る牛乳の後味を口内に残して、日に焼けた畳の上に布団を敷き始めた。

転送装置の隣に吊るされたように安置された騎士《鎌錐》の前に畳んだ布団を広げる。

毛布と枕をその上に放る。

「やっぱり狭い」

あとは電動歯ブラシを片手に洗面台へ直行。小刻みな振動で歯を磨き上げる。

口に含んだ水は驚くほど冷たかった。

電灯の紐を二度三度下に引っ張って、段階的に電気を暗くした。明かりを完全に消した部屋。美鶴は布団に潜り込み、明日の学校を休みたいなと思った。

「ふああああ……」

朝の日差しが締め切ったカーテンの隙間から帯状の光を射し込ませる。窓の外では雀がけたたましく朝の挨拶を交わしている。時計を見れば六時四五分。

——学校かあ、めんどいなあ。嫌だな。

布団の中で転がった美鶴は、半眼の顔で洗面台に向かう。取り付けられた鏡を覗き込み、嘆いて顔を洗った。

「一日じゃ顔立ちは変わらねえよな」

何度見直しても変化しない自身の顔を諦めて、美鶴は朝食の準備を始める。

簡単にスクランブルエッグとパンの朝食辺りで構わないだろう。フライパンを火に掛け、卵を溶きだすとドアが開けられた。

「おはようさん。美鶴、依頼完了通知と序列上進通知も来とったぞ」

大家の文蔵が部屋に上がり込んで来た。文蔵は毎朝、美鶴の部屋で食事を共にしている。

理由は簡単。料理が出来ず、美鶴の腕がそこそこであるからだ。

「あっそうなん。それで今、俺の順位は幾つになったんだ？」

美鶴はさして興味のないように訊ねた。

視線は手元のフライパンに向けられたままである。

「前回より三上がって、六千四百二番だ。一つ言っておく。今月だけでも一〇件も依頼をこなしておるぞ。六千番台でこの数は驚異的と言えん。あまり熱心にやっていると死ぬぞ！」

文蔵は手に持っていた封筒と新聞を卓袱台の上に叩きつけた。

「分かってる。分かってるさ。それでもこれは俺の使命でもあるんだ」

半ば自分自身に言い聞かせるようにして美鶴は言った。

ランカー制度。^{アヴィアター}操者と騎士の二つを一つの評価対象、ランカーとした序列制度。

国際ランカー管理機構が規定、管理する評価方法だ。各操者には^{ライセンス}許可証が配布されている。企業間の抗争を目的に生まれた騎士を管理し、公正な存在にするために造られた制度だ。

その評価基準は世界共通であり、その数字自体がそのランカーの実力とも言われる。

嘆かわしいことに、この制度が出来た当初、高順位ランカーを指してアヴィアター同士の抗争が勃発した。

序列が高ければ高いほど、高額報酬の依頼が舞い込むためだ。比例的にその危険性も高まるのだが。

その頃脅威を誇った集団が現れた。

所属メンバーが皆、百番内という化物じみたランカー。

『ボレアース』 『ニーズヘッグ』 『ヨルムガンド』
『創世の蛇』 『嘲笑する虐殺者』 『終焉の大蛇』

この集団が当時その名を世に知らしめていた。

企業一つを潰す為に、その社員全てを虐殺したことや、対兵器武器を対人用として平気で使用したりもしていた。その非情な行動のために、世界は彼らの操り人形にされている、とまで人々に言われた。

メンバーの多くがライセンスを剥奪されたが、その活動は継続された。

今でも定かではないが、彼らの背後には世界トップクラスの大企業が資金援助や騎士整備などを行っていたと考えられている。

過去に警察や有志ランカーによる大規模な撲滅運動が起こり、現在それら組織は解散、というよりも壊滅されたと考えられている。ただし、現在においても操者と騎士の市場は世界にとってなくてはならないものとなっている。

警察組織では対処不可な依頼を遂行してくれるためだ。

上げれば枚挙に遑^{いとま}がないが、他企業への妨害、破壊工作や特定ランカーの抹消依頼などもある。

それら違法性の高い依頼に対する禁止法令は毎年のように出されるが、なかなか取り締まりきれないのが現状であった。

「そういや、まだあの名前は残ってんのか？」

美鶴は出来たスクランブルエッグを二皿に分けながら、文蔵に視線を向けた。

「序列六五番、《銀狼》の名は今なお健在。その上の序列に変動はないが、奴の下では入れ替わりが激しい。きつと抜きにかかったランカーを倒すなりしとるんだろ。血生臭い話だ」

重く溜息をついた文蔵が胡坐を搔いて、新聞を広げる。

一面を飾っているのは、昨日のニュースで見た統治者二名の会談の話だった。

ランカー制度の序列公開法によって、操者の名は公にされないが、騎士の名は一般に公開されている。企業は各組合に掛け合い、必要に応じたランカーを求め、組合は各受付人へと仕事を斡旋する。

美鶴の受付、依頼の窓口役となっているのは他でもない文蔵であった。

そして先ほど文蔵の口から出た《銀狼》の名が、美鶴にとって最大の怨敵である騎士銘だ。

「はい、どうぞ。あ、コーヒーでいいか」

「おう。悪いな」

「いつものことだからな。慣れたよ」

美鶴は卓袱台にスクランブルエッグの盛られた平皿と八枚切りの食パン一袋にマグカップ、中身はブラックコーヒーとカフェオレを運んで、文蔵の向かいに座った。

そして文蔵の目の前で砂糖をカフェオレの中に四杯入れる。ちなみに小さじ山盛りである。

「あいかわらずの甘党だな。そろそろ無糖に挑戦してみればいいだろうに」

「苦い、不味い、勿体無い。いただきます」

「まだまだ子供^{ガキ}だな。美鶴も……いただきます」

二人で囲む変わらない日常。

美鶴はカフェオレを一口飲んで一息つく。

この日々はいつまでも、いつまでも、変わることはないのだろうかと不安は絶えない。

壊れてしまった過去を持つゆえに、日常の脆さが酷く怖かった。

同級生と貧乳（前書き）

同級生と貧乳

爽快な朝の冷氣の中、美鶴はただひたすらに自転車のペダルをこいでいた。

出勤中の背広姿の男や友達と肩を並べて歩く学生達を追い抜いていく。

目指すは西徳大学付属高等学校だ。

首都圏《エリア2》内では、内部分割がなされ、簡単に言えば行政区、居住区、工業区などに分けられ、それぞれが区画整理されている。海岸から順に工業区、行政区、居住区となり、どこも先に来るものから区画番号が小さくなる。

大崩壊の直後は何の区分もなかった。生き残った人々のうち、技術力を有した人間達が企業として再興を図っていた。

隔離壁が造られ、簡単な区画整理がなされた結果、現在に至っている。

美鶴の通う西徳付属は居住区と行政区の丁度境目、居住区第二区画に位置している。

美鶴は自動車の通りのない、ひとけ人気の少ない道を自転車に跨って走る。

朝から、それも学校に辿り着く前に憂鬱な気分にならないためだ。理由は美鶴の中学校時代を知れば、言わずもがなである。

残念ながら本日は運が悪かったようだ。今日の牡羊座の運勢は最下位であろう。

「あつ、三ノ瀬君だ。せいのせおっはよー!!」「やっぱ、可愛いよね」「弟に欲しいよね」

彼女らは考えを改めてはくれないだろうか。

美鶴は遭遇せずに学校に到達する計画が頓挫したのを悟った。
既に周囲を女子学生に囲まれている。逃避不可能な防衛網が形成
されていた。

「ほら、荷物持ってあげるよ」「ほんと可愛いね。弟になってくれない？」

黄色い声が周囲を飛び交っている。

本当に勘弁してもらいたい。美鶴は頭痛がするといったげに頭を押さえた。

「キヤーキヤーうるっせー！！ 俺に近づくな！！ 半径五〇メートル以内に入るな！！」

「照れない、照れない」「一緒に学校まで行こうよ」「朝から三ノ瀬君に会うなんてツイてるよ」

全く動じない女子学生に捕まった美鶴は、泣く泣く学校まで女子の集団の中心を歩いた。

今日一日は災難が続くだろうという予感がしていた。

『女の子に囲まれて、いい身分だね。君は』

辿り着いた校門で背筋を凍らすような声色が響いた。
美鶴はぎこちなく首を横に回して、天を仰ぎ見た。

——まじで、最悪な一日になったな。神様、助けてください。

視線の先で由佳里がジト目で華やぐ集団を見ていた。

人々の視線を集める容姿に西徳付属のブレザー制服とネクタイ、赤チェックのスカート姿。

男子だけでなく女子でさえ、憧れるほどの外見である。

あの冷たい眼差しは自分に向けられたものだな、美鶴は女子の集団の中で身を小さくした。

「ゆかりっち、おはよー!!」「ヤキモチ焼いちゃ駄目だよー」「ほら、美鶴君も挨拶してあげなきゃ」

火に油を注がないでくれ、心の中で必死に懇願し続けた。

「良かった。俺はまだ生きている……」

何とか生きて教室に辿り着くと、美鶴は窓側、前から三番目の自分の机に突っ伏した。

もうアパートに帰りたい。学校に来るだけで、七限まで授業を受けた倦怠感が襲ってきた。

美鶴は高校二年である。由佳里とは隣りクラスであり、こういう時には心底その事実に感謝していた。

「美鶴、死ぬなよ」「羨ましいが、あそこまでだと生き地獄だな」「ドンマイ。可愛いのは事実だ」

席の周りから浴びせられるのは、散々な物言いであった。クラス男子は羨望というよりも、憐れむ視線を向けてくる。

「やめてくれ。そんな可哀想な目で見ないでくれ……」

美鶴は力なく言って、机に伏せていた。

この学校全体において、操者と補助者の存在は肯定されていると言えれば良いだろうか。

どの生徒も一方的な嫌悪感を抱かず、その人となりから判断してくれる分別を皆、兼ね備えている。

美鶴自身が操者であることも、由佳里が美鶴の補助者であることも周知の事実である。

また美鶴の右腕が義腕であることも、首の傷の存在も皆知っている。

ただ、最近になってこの学校の雰囲気がいり向上したのも事実であった。

今までどこかよそよそしかったクラスメイトや他クラスの生徒が、進んで挨拶してくれるようになったのは最近のことだった。

その立役者を思い返して、美鶴は頭が痛くなった。

この学校最大級の異端児である存在。

「たのもー!!」

教室中に反響する澁刺^{はっらっ}した声。

何か道場破りらしき人物が来たようだ。

横目で廊下側を一瞥すれば、シュシュで纏められたツインテールを持った少女が立っていた。

顔の造形レベル、中の上。美鶴はそう評価している。

「プリティーでラブリーな美鶴先輩はいらっしゃるでしょーかッ!」

いないだろう。そんな可愛さが強調された男子なんて、この世に存在しているわけがない。

美鶴はうつ伏せたまま、その声を無視した。

パコ——ンッ!! 突然、後頭部をティッシュ箱が強打した。
全然これっぽっちも痛くはなかった。

「美少女が会いに来てあげたんだぞ!! 面を上げんか!!」

「うっせーな!! 何が美少女だッ!! まずその前にキャラを固定しろよ!!」

「弟キャラが固定してる先輩に言われたくないですよ」

「……黙れ貧乳」

美鶴は目の前でティッシュ箱を抱えたふたつ結いの少女を見据えた。

ブレザーで隠された残念な胸に、学年が一つ下である証の翠チェック柄のスカート。

学校内では密かに人気を集めているらしい。

相良 さがら 瑠璃 るり。

この学校に通う由佳里以外の補助者の一人だ。

補助者採用試験は国家試験並みの難易度を誇っており、不合格者が毎年溢れかえっている。

試験受験者資格は一般的に十五歳以上とされている。

そうして合格した人々は誰もが優れた頭脳の持ち主である。と美鶴は考えていた。

実際由佳里の学力は優れていて毎度の如く、学年トップかその近辺に名が上がる。

操者と補助者は近寄りがたい存在、次元の違う存在、相容れぬ存在だと認識している人は多い。

——それなのに、こんな奴が現れるとは。

補助者であるにもかかわらず、テストの順位は後ろから数えた方が早いといった始末の少女。

明るすぎるにもほどがあるだろうと思わずにいられない、破天荒な性格。

ここまで人々の認識をぶち壊す存在がいれば、さすがに学校の雰囲気は変わるだろう。

「ひどい!! 差別ですかッ!? 由佳里先輩のもので目が肥えているからって、うちを貧乳呼ばわりするなんて……」

「事実だろ!! てか別に目は肥えてねえーよ!! 俺を変態扱いすんな」

「後輩を貧乳呼ばわりした時点で、変態ですよ？」

こいつをぶっとばして構わないだろうか。美鶴は膝の上で拳を握りしめた。

「冗談はさておいて。先輩、重要な話があります。至急な用事です」

急に態度を改め、自身の制服を整え始める瑠璃の行動に、美鶴も背筋が自然と伸びていた。

瑠璃も補助者である以上、どこかの操者をサポートしている。実際には会ったことはないが、彼女の操者は随分と高序列のランカーらしい。

これまでに幾度となく、その仕事関係で得た有益な情報を教えられた経験がある。

こういう時の瑠璃は眼つきが一変する。

相手の心のうちを見透かすような、遠い目をするのだ。

「何だよ。ここでいいのか？」

「ええ、構いません。公衆の面前でなければ意味がありません」

「はいッ？」

何を言おうとしているのか皆目見当がつかない。仕事の話なら皆の前で話すべきではないだろう。

「先輩、どうか。うちを愛してください!!」

「病院に行って来い!!」

思わず立ち上がって叫んでしまった。美鶴はバツが悪そうに椅子に腰を下ろした。

「先輩は世界の中心で愛を叫ばなければ駄目なんですよ」

「言外に俺を自己中だと言いたいのかッ！」

「はい、あつても由佳里先輩中心とも——」

「ないな」

『何がないのかな』

美鶴はギョツとして振り向いた。いつの間にいたのか由佳里が目の前に立ち尽くしていた。

身体の前で腕を組まれていた。彼女は隣りクラスであるはずだろ
う何故ここに。

「瑠璃ちゃんの声が聞こえたから顔を覗かせに来たら、君が楽しそうにしてたんだよね。さて何がないのかな」

由佳里と瑠璃はそこそ親しき仲であると美鶴は認識している。

美鶴は視線を逸らして「何でもないな」と小さく言った。

瑠璃は何故、教えてくれなかったのだろうか。

見れば必死に笑いを堪えていた。こいつは嵌めたのだと理解するのに時間はかからなかった。

『キーンコーンカーンコーン』

助け舟を出すようにチャイムが鳴り響いた。

「……………」

後ろ髪を引かれる様子で由佳里は自分のクラスへと戻っていった。目の前の後輩もあれぐらい聞き分けがよければいいのだが。

「早くクラスに戻れよ。ホームルーム始まっちゃったぞ」

「うち、美鶴先輩と授業が受けたいです」

「俺は受けたくないです」

思わず敬語になるが、気にしてられない。

こんな漫才みたいなやり取りをしている間に担任がやって来てしまった。

まだうら若い女性教師だ。

美鶴はこの教師が女子生徒に混じって「美鶴君って可愛いよね」と言っているのを知っている。

「はい、朝のホームルームを始めますがー、美鶴君。まず彼女を送り届けてあげて」

女教師がそう指示を飛ばした。

何を言い出すのだと見れば、クラス中が「行ってらっしゃい」と言いたげに手を振っていた。

「美鶴先輩、うちへのアプローチのチャンスですよ」

「黙れ、チビスケ」

「……先輩も十分、チビスケですね」

「お前よりは高いわッ!!」

美鶴は席を立て、瑠璃の背中を押して教室の外に押し出した。
瑠璃がすかさず左腕に抱きつく。

「離れろよ……。いや、ホントに離れてくれ。俺の寿命が縮む」
「ドンマイです」

瑠璃がしがみ付いたまま、美鶴は由佳里のいるクラスの前を通り過ぎる。

横目でちらりと見て後悔した。
由佳里が無表情で固まっていた。

「終わった……」

美鶴は早足で階段まで急いだ。
階段へと辿り着くと瑠璃はパッと手を放して、美鶴を解放した。

「そう言えば、また序列を上げたらいいですね。小埜崎おのざきさんも目を丸くしてましたよ」

「どうやって六千番台のことまで調べんだよ。暇人なのか？」

小埜崎叶望おのざきかのんが瑠璃のサポートしている操者の名前だ。

年は二十歳らしい。美鶴自身、実際にお目にかかったことがないため信憑性はない。

「うちらは先輩達のことを密かに応援してますから」
「ガッツリ応援されてる気が……」

美鶴は気疲れに目頭を押さえ、溜息をついた。

瑠璃はそんな様子を楽しむように笑みを浮かべて、口元に手を当てた。

笑みを殺して、張り詰めた表情に変わる。

「その昔、ナポレオンの皇后ジョセフィーヌは衣装に情熱を注ぎ、軍資金から服のための多くの資金を使いました。その結果フランス軍はジェノバを失いました。事実かは知りませんが」

「いきなりだな。何が言いたいんだよ……」

美鶴は齒軋りして顔を窓側に向けた。言おうとしていることは予想できた。

見えた景色は雲ひとつない晴天であった。

「小笠崎さんも心配してましたが、過ぎた情熱は自身を滅ぼしますよ？　つまり、熱心に序列上げはするなという警告です」

分かっている。そんなことは過去の事実が示している。
奇しくも文蔵と同じ事を言われ、美鶴は憤りを感じた。

序列を上げることに夢中になったランカーの存在は、気付かぬうちに煙のように消えていった。

序列が上がれば上がるほど、その確率は高まっていった。

それでも美鶴は止まっていられなかった。もはやこれは情熱ではなく悲願とも言えるのではないだろうか。

銀狼と戦うために美鶴は序列を上げているのだ。

「十分注意するさ。絶対、由佳里は巻き込ませない」

「そうですか。そういえば、由佳里先輩と美鶴先輩って付き合っていないんですか？」

「へ？」

藪から棒にきた質問に美鶴は、素っ頓狂な声を出した。

「いやだって、幼馴染で同じ年で同じ学校で操者と補助者の関係なら、出来レースじゃないですかッ」

美鶴は一変して興味深々な目を煌かせて詰め寄ってくる瑠璃に辟^{へき}易^{えき}した。

「付き合ってねえーよ。その予定もねえーよ。分かったら早く教室に戻れよ!! もう授業が始まるから!!」

現在時刻、一限授業の二分前。完全にホームルームをさぼってしまった。

信じてなさそうな表情を浮かべる瑠璃から逃げるようにして、美鶴は教室まで急いだ。

昔、本気で由佳里に恋焦がれた時期があった。

小学生の頃だったろうか。

今現在もきつと自分は由佳里に引かれているのだと思う。

けれど、その気持ちを肯定する考えはない。

もし由佳里から告白してきたとしても、きつと拒絶してしまうのだろう。

「おかえり〜」 「やっと帰ってきた!!」 「おっそいよ!!」 「あ
いかわらずだね」

教室に戻った美鶴を出迎えたのは、クラスメイトの野次ばかり。

自分の席に直行して、ドカリと椅子に腰を下ろした。始めの授業は数学か……。

「よッ！ 二股ヤロー！！」

「誰だ！ 今叫んだ奴はッ！？」

幸い、クラスは平和そのもの。明るすぎるこの環境が心地よかった。

先の不安に怯えるよりは、今の平和を堪能していた方が利口者かと思直した。

同級生と貧乳（後書き）

こんな後輩がいたら、毎日が飽きないと思います。

死神と機械仕掛けの破壊者

「うわッ……」

美鶴はアパートの部屋のドアを開けた瞬間、堪らずそう呟いた。部屋の中に充満する潤滑油の匂い。部屋に上がり奥を覗けば、鎌錐の前に座り込んで何か作業中の広くない背中。

西徳付属の制服であった。こちらに気付いていないのだろうか。様子を伺っていれば「瑠璃ちゃんとデレデレしちゃってさ、かまきり螳螂から飛蝗ばったにしちゃうぞ」と独り言まで言い始めた。

飛蝗は精神的にも肉体的にも辛いだろう。少なくとも頭と地面がスレスレだ。

「何、人の部屋でぶつくさ言ってるだよ、由佳里」

美鶴はブレザーを脱いで、ハンガーに掛けた。持っていた学生鞆は部屋の隅に立てかけた。

不機嫌そうな由佳里は「何も言ってるないよ」と答え、美鶴の方を見ようとはしない。

「はぁ、お茶でも飲むか？」

美鶴は困り果てた様子で頭を掻いた。部屋の唯一の窓を見れば、既に全開にされていた。

残念なことに風通しが悪いためか部屋中に匂いは籠っている。

「別にいい。冷蔵庫の牛乳をホットミルクにしたから」

「人の身長成長ドリンクを飲んだのか、勝手に！！」

「あー、ごめん。でも諦めも肝心だよ？ てか牛乳で身長伸びるっ

け？」

微笑を浮かべながら由佳里が身体を半分、後ろに向けた。

美鶴は内心ホッと胸を撫で下ろした。そこまで気分を害していた訳ではなさそうだった。

「諦めねえーよッ！！　まだまだ俺は成長するんだ！！」

「……………可哀想に」

力んで言ったものの、由佳里の憐れむ視線が突き刺さり、消沈する。

由佳里と美鶴の身長は二センチ、美鶴の方が高い。まだ何とか差がある。

ちなみに去年は四センチの差。由佳里に成長期が来たようだった。それよりも由佳里が何をやっていたのかと見れば、鎌錐の脚部の整備中であつた。

取り出されたショックアブソーバーや、カーボンナノチューブの人工筋肉などが青ビニールの上に転がっている。

思い返せばこの前の任務で誤って相手と衝突したのだった。その時の破損がないか、不具合が生じていないかのメンテナンスをしているようだった。

「毎度毎度、悪いな。俺は整備の腕はからつきしだからな」

「別にいいよ。私は君の補助者^{サポーター}だし。まあ、一人で無理な時は竹ちゃんがいるから」

由佳里は別に気にしていないと言いたげに、首を軽く左右に振った。

美鶴は傍に腰を下ろして、リモコンの電源ボタンを押した。流れ出したニュースは今なお、二社の総裁の会談の話で持ちきり

だった。他にあるとすれば増加傾向の騎士犯罪への対策、首都圏の某企業の工場で放火があったなど。

他に面白い内容の番組がないか探そうと、チャンネルを回す。

「君は、外部居住区がなくなると思う？」

唐突に由佳里が問いかけてきた。横を見れば、作業の手を止めて由佳里が視線を寄越していた。憂いを帯びた濡れた眸が向けられる。その問いに対する答えは簡単に出せる。

「無理だろ。現状では不可能だ」

適当に回された番組では、ブサイクなネズミが痩せ細ったネコとの逃走劇を繰り広げていた。初めて目にするアニメだ。

「でも騎士があるわけだし、希望は無きにしも非ずじゃ——」

「壁の向こうにいるのが、難民と企業に雇われたランカー共なら可能だろ。けど、まだ残ってるだろ。一〇年近く経ったけれど、まだ動いてるだろ」

ディヴィディングライン

隔離壁にはかつて防衛壁と呼ばれていた時代がある。

理由は日本国土の中から侵入されることを防いでいたためだ。

ブレイクダウン

二〇二五年の大崩壊が生んだ負の遺産。完全自律型兵器——プレデターの存在を。

人類は戦争において戦う役目を機械に託した。そして歯止めの利かなくなった機械兵の破壊活動によって、全てが崩壊した。

企業連合体が世界再生の足掛かりとして、アンドロイドを用いて各国の都市周囲を障壁で囲い、可住地域を形成して久しい。

現在ではその障壁は企業間の抗争のために、本来の防衛という意味を変え、明確な境界線、縄張りの証となっている。

「でも、騎士の機動性もあれば、日本中のランカーが共同でやれば殲滅可能でしょ」

「そう都合良くランカーは動かないだろ。企業と個人契約を交わしている奴らなら特にな。どの企業も自分達の利益にならなそうなことは極力、抱え込んだランカーを動かしてはしないだろ。今回の会談で二つのエリアを代表する企業のトップが、不利益を承知でやってんなら事情は変わるかも知れねえーけど、いたるところから圧力がかかっていると思うぞ。だから無理だ」

美鶴は無然とした態度で最後まで言うど、テレビに視線を戻した。丁度画面にはネズミがネコに食べられそうなシーンが映された。いや、情け容赦なく食べられた。

いくら下手なアニメーションでも、この時間帯にこれはどうなのだろうか。

「君はこのままでいいと思ってるの？」

由佳里が質問を重ねた。今日の彼女はいったいどうしたのだろうか。

美鶴は首を傾げつつ、顔だけを由佳里に向けた。眸に映った彼女の表情はやはり、どこことなく不安げに見えた。俯きがちになるその表情には翳^{かげ}りが伺えた。

「よくないさ。けど俺には何も出来はしない。由佳里、お前も当然」

正直に答えた。実際、どうすることも出来はしない。

高序列のランカーにでもなれば、ある程度政界への影響力も持てるようになる。同時に重い責任や幾分かの制限、金欲が生じる。

今まで外部居住区への対応策に対して、操者が政府に訴えたこと

はない。

多くの者が金欲しさのために、純情なランカーを気取っているか、ライセンス剥奪や抹消という圧力でも掛けられているのだろう。世知辛い世の中だ。

由佳里は肩を落として、整備を再開させる。

「てか、由佳里。制服で大丈夫なのか？　いつも作業服ジャンプスーツだろ」
「忘れちった」

てハッと舌を出しておどけた由佳里の姿に美鶴は思わず笑った。
由佳里も柔らかな笑みを零した。固まった部屋の空気が一瞬で解ほぐれたようだった。

この世の中が不安ではないのかと言われれば、不安すぎて夜もオチオチ寝ていられないほどだ。

それでも人々は、何ともない日常を創って生きている。

美鶴は左手を天井に向けて伸ばして、空を掴んだ。この手の中には何もなければ、この手で隣りに座って強がる少女を守り抜けるのなら、それが今の最善だと信じよう。

『ヴーヴーヴー』ふいにエルガー作曲の《威風堂々》が鳴り響いた。
由佳里が慌てて胸ポケットからスマートフォンを取り出して耳に当てた。手は汚れていないのだろうか、と心配になってしまうのは杞憂か。

「——うん、分かった。彼に伝えておくよ、じゃあね」

数分の通信越しの会話を終えた由佳里は携帯を仕舞うと、片手をすくめた。

「三日後に研究所に来てくれだってさー」

「あ、そうなん？ うん了解。オヤっさんにも伝えとく」

美鶴は大きく伸びをした。網戸の窓から風が入り込み始めていた。急速に油の匂いを奪い、共に室内温度を低下させていく。

「てか、ほんとコタツが欲しいな……」

呟く美鶴に由佳里も「同感だね」と相槌を打って笑った。

笑えば笑うほど見えない闇があっても、泣いて明日が見えないよりはいい。

知れば知るほど遠くなる答えだとしても、逃げて出口を見失うよりはいい。

言葉の数だけ幸せがあるならば、おんなじ数だけ不幸があるのだろう。

それゆえに人は己の幸福を願い、望み、叶えようとする。

「不安だったら俺を頼れよな。由佳里一人ぐらいだったら守ってやるから」

美鶴は照れたように顔を背けて言い切った。少し火照った頬が流れ込む冷気に撫でられ、心地よく感じる。

「……ありがとう」

由佳里ははにかんで頷いた。

研究者と童顔な戦士（前書き）

全然、戦闘シーンがないけれども……。
そのうち入ります。はい。

研究者と童顔な戦士

「随分と突然な連絡だったな。いつもだったら一週間ぐらい前に知らせてただろ？」

シルバーメタリックのミニバンの後部座席で美鶴は大人しく外の流れる景色を眺めていた。

どこまで行っても変わり映えない都市の景色が続く。活気溢れるよりも随分と息苦しさを感じてしまう。この時間帯だと通勤ラッシュが終わったためだろう、車の通りが少なく、快調にバンは路を進んでいる。

「そうだね。まあ、お父さんはどこかぬけたところがあるから」

美鶴の隣りでは由佳里が座席にもたれていた。肩が密着していることに美鶴がずっとドキドキしていることを知る由もないだろう。

「誠^{まこと}さんも仕事で忙しかったのだろう。親不孝な発言は控えてやったほうがよいぞ」

運転席で文蔵がバックミラー越しに二人の様子を一瞥した。

三人は今現在、首都圏工業区第三区画へと向かっていた。

理由は、操^{アツイアター}者としての美鶴の定期身体調査と新型の騎士機構の試験運用といったところ。定期といっても診断施設の都合上、若干不定期であった。

沿岸部に位置する工業区第三区画には、名の知られた首都圏第四位の企業、柴川重工が研究所を構えている。

その開発主任は由佳里の実の父親、羽城誠である。

彼は世界中の他企業が喉から手が出るほどの秀才であろう。美鶴

が把握する限り、一年のほとんどを研究室に籠って実験や開発をしているのではないだろうか。

世間には知られず今現在、彼は柴川重工の研究所で開発主任の座についている。

そんな父親をもったために由佳里自身も、機械などの工業関係に強くなった。

「まあ、時期的にそろそろ診察通知が来ると分かってたけどな」

美鶴はあいかわらずのパーカー姿で、袖の先から覗く義腕を左手で撫でた。

ひんやりとした冷気が伝わる。

右肩関節の接合部には断熱材が入られているため、冷たさは感じず、冬季の凍傷や火傷を防いでいる。

「開発の現場はどこまで進んだ研究をしてるのかな」

美鶴の隣りで、由佳里は目を輝かせていた。道中、時折鼻歌を歌っていた。

その服装は上下共に黒の作業服姿。ジャンプスーツ黒とのコントラストで由佳里の肌の白さが一層際立って見える。美鶴はその横顔を盗み見た。長い睫毛、まつげ薄紅の艶やかな唇、思わず見とれてしまい慌てて視線を外した。

由佳里にとって、騎士の整備は半ば趣味とも言えるわけであって、そうした機械関係のことには人一倍関心があった。

美鶴は美人で籠って機械を弄るその将来を想像して、可哀想だなと思った。

ちなみに柴川重工は騎士の開発は行っていないというのが、一般向けだ。

だが実際には美鶴達に対して、武器や部品などを提供してくれている。《鎌錐》は柴川重工によるワンオフ品の騎士であった。

操者や補助者は騎士があれば仕事が出来るわけでなく、破損部の修理のための備品提供がなければ、思うような仕事は難しい。

そのために大抵の者は契約を交わし、騎士を開発している企業より支援を受けていた。企業としても、自社の護衛や宣伝などにランカーを使うことで利益を得ている。

柴川重工は表向きは、自動車や輸送船、原材料の生産を行っているが、公にせず騎士の研究もしている。

「この前訊ねたときには、精神回歸システムリバイバルの安全強化について研究していたのう。ある程度のメドは立ったのかもしれない」

文蔵が顎さすを擦りながら言った。

「楽しみだね」

「いや別に……」

意気揚々とする由佳里に対して美鶴は興味の薄い返事をした。バンの車内から見える外の景色は、超高層ビルが道路の両脇に隙間なく建ち並んでいる。行政区の近代化の進められた街並み。

隔離壁の向こう側とは別世界だ。同じ日本国内だとは思えない。次第に周囲の建造物の背が低くなっていく。工業区が近づいているのだろう。

世界各国の政府が倒れて、新たな指導者として立ち上がったのは大企業の人間達だった。彼らには資金もあり、技術力もあった。

彼らの力なら一〇年以内に日本再建のメドエゴイストが立てられたであろう。それが叶わぬ夢と化したのは単に彼らが利己主義者であったためだろう。再生よりも利益を重視した結果が、今現在の企業間の抗争、競争だ。

美鶴は座席に深く座り直し、腕を組んだ。窓の外に見覚えのある建物が左手に姿を現していた。

工業区の方に来れば、車の通りはめっきり減るため、見渡しても他に走行中の車両は見受けられない。バンの小刻みな振動に次第に目蓋が重くなる。美鶴は暫しの眠りについた。

その寝顔を覗き込んだ由佳里は、ほくそ笑んだ。

「久しぶりに寝顔を拝見。やっぱり童顔っていうか、女の子顔っていうか。うん、弟顔だよな」

そんな様子を傍観していた文蔵は口元を緩め、優しげな視線を送った。

「よおし着くぞ」

美鶴は目を瞬き^{しばた}、首を回した。いつの間にか眠っていたらしい。

文蔵が方向指示灯^{ウインカー}を点滅させ、ハンドルを左に切る。

入り口には警備員がおり、文蔵は軽い挨拶と共に身分証を提示する。こうした審査はどこの企業でも採用されている。簡便な方法であり、もし犯罪者が騎士で堂々と侵入してきた場合どうするのか、美鶴は多少不安にもなる。確か数日前にどこかの企業の工場が放火にあったな、とニュースで見たのを思い出す。

だっ広い駐車場にミニバンが停車すると、ドアをスライドさせて美鶴はアスファルトで舗装された地面に足を下ろした。身体を左右に捻り、座りっぱなしで固まった筋肉をほぐす。

「そんじゃ、行くかの。誠さんは騎士機器研究棟のほうにいるだろう」

「ほら、置いてくよー」

先を歩き出す文蔵の後を追って、由佳里も軽やかな足取りで研究所へと向かう。

美鶴も慌ててその背中を追った。

柴川重工の研究所の敷地内には計二〇の実験棟や研究棟が建ち並んでいる。それぞれは大小様々な規模ではあるが、羽城誠のいる騎士機器研究棟は国立病院と見紛うような佇まいだ。

よくもまあこんなデカイ施設を造って世間に騎士の開発をしていることがバレないものだ、美鶴は感心してしまう。

自動ドアの入り口を入ればすぐに受付が目の前に現れる。といってもこれまで幾度となく訪れているために、既に顔パスだ。「お久しぶり」と快く挨拶までされた。

白が基調の施設内を道なりに進んでいく。道すがら白衣に身を包んだ施設の人々とすれ違う。その誰もが顔見知りの人々だ。

「あッ、美鶴君だ。可愛いわー、息子に欲しいわね」

「不憫な子よね。そうだ私の養子にでもしようかしら」

「あなた子供が三人もいるじゃない」

「そうだったわ。美鶴君欲しさについ忘れちゃった」

そこで笑い声上がる。どうか勘弁してもらいたい。

美鶴は努めてそれら声を無視した。あんな悪魔の言葉に耳を傾けてはいけない。

「奥さま方のアイドルだね。おめでとー」

パチパチと拍手して由佳里が言うのを耳を塞いでガードした。

誠は騎士機器研究棟の地下三階に設けられた特別研究・開発棟と呼ばれる、高校体育館並の広さを持つ施設にいる。

自動で開閉したドアを潜り抜ける。相変わらずの白い部屋。分解された機械や資料が乱雑された作業台。照明が乱反射して美鶴は眩しそうに一瞬目を細めた。研究室では慌ただしく動く研究者達がいる。

さて、誠はどこにいるだろうか。

「やあ、やつと来たね」

白衣を纏った天然パーマ、メタボ体型の男が、颯爽とこちらに歩み寄ってきた。

彼が由佳里の実の父親である羽城誠だ、と言いたかったが思いとどまる。さて、どちらさまだろうか。

美鶴はこめかみに手を当てて記憶を探ったが、該当した人物はいなかった。

失礼を承知でその顔貌を凝視する。キメ細かな白い顔、おたふく風邪を疑うような頬もあいまってまるで大福に見える。残念ながら美味しくはなさそうだ。

「すみません。どちらさまでですか？」

結局美鶴は訊ねた。由佳里が隣りで笑いを堪え、文蔵も苦笑していた。

「僕だよ。誠さんですよー」

首を少し傾げ、餅みたいな頬を両側から指で刺した可愛い子ポーズをとるメタボ。

「……………」

暫しの沈黙の後、美鶴は口を開いた。

「何で、肥満体型の機械人形なんだよ……無駄^{アンドロイド}だろ」

童顔と過去形と過去完了形

「僕の愛しのベビーフェイスッ！！ 会いたかったよ〜」

肥満体型アンドロイドが両腕を伸ばして美鶴に迫り、唇が妖艶ようえんに突き出される。

「いきなり気持ち悪いなッ！！ せめて童顔って言うてくれ！！」

てか自分の娘にいう台詞だろッ

「私ベビーフェイスじゃないよ」

「そっちじゃねー！！」

美鶴は心労に目頭を揉んで、嘆息した。ドツと疲れた。

「全く美鶴君はいつも無愛想だね。あ、少し待っててね。人間モ―ドに切り替えるから」

キビキビとした足取りで研究室の奥に消えるアンドロイド。本物の人間である体型なら、あそこまでの動きは再現出来ないな。

一分もせずに今度は長躯の男がやってきた。不清潔に伸ばされた

茶髪、身長一八二センチの男。黒縁眼鏡の奥に人懐こい眸が覗いた。

本物の羽城誠だ。

「いやー、ごめんごめん。アンドロイドで作業していたほうが眠くはかどならなくて、仕事が捗はかどるんだよね。肥満だったのは、ほら僕身長があつて痩せてる体型だからああいうのに憧れちゃって。どうすることも出来ないよね、僕の身長が高いことは」

「厭味いやみか？」

美鶴は不機嫌そうに誠を見上げた。羨ましいほどの身長だ。五センチ譲ってもらいたい。

「お父さん、長時間の精神転送は危険だよ」

由佳里が腕を前に組み、頬を膨らませてる。心配よりも怒り気味の様子だった。とりあえず怒っているのは分かるが、全く怖くもない。美鶴は逆に可愛らしさを感じてしまった。

「うう、ごめんね由佳里。気をつけるから機嫌を直して」

娘に弱い誠が力なくうな垂れた。

「許す」

由佳里が即答。早いなッ、と美鶴は心で突っ込みを入れた。

「誠さん、んじゃ美鶴をよろしく頼むぞ。儂と由佳里は少し見学でもしたいんじゃないか」

「いいですよ、竹山さん。最近、技術革新がありまして、騎士の安全性が一步前進する技術を発見しました。それと《鎌錐》のデスサイスをより軽量化して、性能を変えないものの試作品も造りましたよ。おーい、ペロッキー、二人に研究結果の説明してあげて」

ペロッキーと呼ばれた中肉中背の冴えない男性研究員が小走りで行ってきた。その口端から棒付きキャンディーの白い柄が覗いている。あれは商名『ペロッキー』だ。

「二人に試作品の精神回帰システムとデスサイスを見せてあげてね。あとこの二人の要望には出来る限り答えてあげてよ。この僕の一人

娘と恩人なんだから」

「あ、はいッ！！ 分かりましたッ」

ビシッと敬礼するペロッキー。一つ気になることがあったために、美鶴は質問した。

「えーっと、ペロッキーさん？」

「はい、何でありますか？」

ビシッと敬礼。足も綺麗に揃えられている。

「えっと、今舐めている味は何ですか？ パツと見、茶色く見えたんですが……」

「これでありませうかッ、この味は『納豆チョコレートバナラクリー
ムカスタード味』であります」

「そうですかわかりました……」

——宇宙人がここにいたぞ。前代未聞の大発見だ。

「うんじゃ、美鶴君。向こうに行こっか」

誠の指示に美鶴は素直に従って、研究施設の奥へと進む。熱く意見交換を交わす研究員の傍を通り過ぎ、陳列した名の知らない機材の間を縫っていく。そして誠の背中を追って、一つの小部屋に入った。まるで病室のような部屋。一つ違うのは白いベッドの代わりに転送装置が鎮座していたこと。

「それじゃあ、ベッドの上に腰かけてね」

「転送装置なッ」

美鶴が大人しくそこに座ると頭に脳波計を付けられた。広げられたA4サイズの端末に波線が表示され始める。

操者には定期的に脳神経の破損や障害がないかの診断が義務付けられている。

擬似脳への精神転送はある程度の安全が確立されてきているものの、長時間、長期間においての転送で不測の事態が起きないとは断言出来ないためだ。

また、転送には限界転送時間が定められている。人によって多少前後するが、一日六時間以内と決められている。

この診察自体はひどく簡単なもので三〇分程度で終わる。

「美鶴君が操者アヴィアターになってもう一〇年経つんだよね。そして由佳里が君の補助者サポーターになって二年か」

誠が物思いに耽ふけったように翳かげりを浮かべた表情で、端末のディスプレイを眺める。

「そうだな。もう二年にもなるんだな」

美鶴も誠の纏った雰囲気に移ったように感慨深げな顔をした。膝の間で手を交差させる。

「僕は今でも君に感謝してるよ。君のおかげで僕は平和な日常を手に来た。君が僕に対しての憎悪を報復という形にしないでくれたことには万謝してるし、これからも命一杯の技術提供もしていくつもりだよ」

「……あんたは相変わらずだよな。研究に没頭して、熱狂して好き放題やって、後から相手を心配する性分だ」

「返す言葉がないね……」

佯しそうに笑う誠。が、すぐに表情を一変させた。

「そう言えば、君の義腕を人工皮膚で覆い隠す考えはないの？ 今の技術ならカーボンナノチューブの擬似神経が通ったものもあるし

――」
「ない」

にべもなく美鶴は却下する。誠は「君も相変わらずだ」といって肩を竦めてみせた。

この義腕の設計者は誠だ。美鶴自身がこれを望んで頼み込んだ。

美鶴はこの義腕を見るたびに嫌でも過去を思い出している。首の傷は撫でる度にまるで焼けるような痛みを錯覚させる。

誠を含めたごく少数の人間しか知らない過去。由佳里はその過去を知らない。そしてこれまで一度もそのことを訊ねられた覚えはない。クラスメイトに至っても同じだ。

皆、知リたそうな顔をしていたが、さすがに右腕が丸々機械だ。

その内容に怖れを抱くのも無理はないだろう。

美鶴は太腿の上に肘を載せ、頭を置いた。

――いつかは話したほうがいいんだろうな。けど、話せば由佳里は俺をどう思うかな。

美鶴は暫し、まどろみかけた。それを誠が妨害する形でふいに訊ねた。

「――由佳里には告白したのかい？」

「ごふおッ」

美鶴はたまらず喉を詰まらせた。咽て空咳を繰り返す。

この男は唐突に何を言い出すのだろう。本人は臆面もなく、興味

津々といった様子だ。

そういえばつい最近にも似たやり取りをした覚えが、ああそうか瑠璃も同じようなことを訊ねてきたな。

「そろそろ進展があってもいい頃合じゃないかい。君が由佳里に気があるのは知ってるし、由佳里も君に好意を抱いてるだろう。何より二人はお似合いだ」

娘のいない所でよくもそんなことが言えたものだ。いや、いた場合は非常にまずいだろう。

美鶴は首を横に素早く振りながら、同時に顔の前で手を左右させた。

「……告白するつもりはねえーよ」

「それはアレかい。自分の見た目にコンプレックスを抱いていて、由佳里と並ぶと姉と弟みたいな図になっちゃうことが嫌なのかい」

「茶々いれんなよッ」

「ごめん、ごめん。でも君は恐いんだろ？ 想いを告げてフラれることよりも、由佳里に知られて怯えられることが。告白する前から最悪場合のことを考えてしまって、疎んでしまうんだろ？ 言葉に出来ないんだろ？ 君が歩んできた道は茨の道だし、これからも似たようなもんかも知れない。だけど、怖れてばっかじゃ、いつか足を掬われるよ。立つべき足場さえ失うかもしれないよ」

誠は一息もつけずに最後まで言い切ると、自嘲気味に嗤^{わら}った。美鶴は滅多にない誠の雄弁に面食らった。核心を衝かれて、言葉を見失った。息苦しささえ覚えた。

「だけど……まだ俺は、由佳里に許されてねえよ。あの日から変らないままだ」

美鶴は呟いた。視線の先で誠は悲しそうな顔をしたが、今度は何も言っていないかった。

美鶴は視界を手で覆い隠し、目を閉じた。

「それじゃあ、同調率の検査を始めようか」

美鶴は転送装置に深く収まり、身体力を抜いた。この検査では実際にアンドロイドを操りはず、用意された疑似脳との同調のみを目的とする。

「転送開始、三、二、一」

次第に目蓋が重くのしかかってくる。美鶴は不快な無重力感を感じた。

操者はアンドロイドと視覚、聴覚、痛覚などを同調シンクロさせることで、アンドロイドをまるで自分の身体のように感じている。

アンドロイドを通じた世界の鮮明さの度合いは、その同調率の高低で変わる。高ければ高いほど、より正確に世界を認識することが可能だ。同調率の高さもランカーの強さを左右する。

大概の操者は70から80%台だと言われ、90%の壁を越えることは非常に困難だと考えられている。いや、通常の間人間にはその領域は不可能と言われていた。

だが人間は悲しきことに知能を持った生命体だった。

大崩壊直後、世界企業はアンドロイドを生み、世界の再生を目指した。大崩壊の直後は、日本の国土を徘徊するプレデターを抑えこみ、人間の可住区画の確保することが最優先され、アンドロイドが

盛んに開発された。そして世界は完全自律型兵器プレデターに対抗しうる、より強い戦士を求め始めた。

替えの利く凡庸アンドロイドを常に強力に扱える存在のために、人類未踏の領域が目指されたのだ。

結果、壁を越えるための技術が生まれた。神の領域に足を踏み入れるための禁断の果実。

だが、その頃企業間の関係に軋轢が生じ、研究プロジェクトは凍結された。多くの研究関係者は各企業に買収されたか、殺害された。

「本当にごめん」

誠はほとんど泣きそうに顔を歪めていた。情報端末に表示された数値は微動だにせず、止まったままにあった。

『同調率96%』

驚異的な数字がそこに表示されていた。

誠は電子カルテを開き、美鶴の診断表を開いた。診断当初から並ぶ90台の数列の最後尾に新たに96を足した。

童顔な戦士と燃える人（前書き）

化石燃料はやはり偉大でした。

童顔な戦士と燃える人

「それじゃあ、また不定期になるけど。だいたい一ヶ月後をメドに診察ね」

文蔵と由佳里と再び合流したところで誠が美鶴に伝えた。

「りょーかい。んで、今度来た時は鎌錐も持ち込めばいいんだな」
「そうそう。常備兵装の交換とかをやりたいからね」

『ヴーヴーヴーヴーヴー』

駐車場に戻ろうと誠に背を向けたところで、マナーモードにされた携帯の着信音が鳴った。文蔵が舌打ちをして、懷からスライド式携帯を取り出して耳に当てた。途端その表情が酷く強張った。眉間に皺が刻まれ、歯軋りする。

「バーロオ！！ 警察は何やつとるんだ！！ 各組合への連絡を済ませてあるのか？ 僕は動けん。ああ、定期健診で出とる。うむ、んじゃな」

鼻息を荒くして文蔵は通話を終えた。携帯をしまおうと深く息を吐いた。

「オヤっさん、どうしたんだよ？ 何か事件が起こったのか？」

文蔵の通話中の態度を見る限り、あまり芳しくない事態が起こったようだ。それでも文蔵は「お前さんらには関係ないことだ」といって黙秘を決め込んで話そうとしない。

こちらを心配させないための配慮なのだろうが、逆に知りたくなる。それでも文蔵の頑固さを知っているが故に、聞き出す努力をすぐに放棄した。

「んじゃ、帰るとするか。誠さん、仕事頑張ってください」

そう言って文蔵は踵を返した。出口に向かい始めた文蔵を追って、美鶴も由佳里も歩き出す。

「お父さん、またね」

由佳里が振り返って、誠に手を振った。誠が手を振り返してそれに答えつつ、美鶴に意味ありげな視線を向けた。当然美鶴は無視した。

「へー、そうなんか……」

生返事を幾度繰り返しただろうか。

彼女の社会科見学の感想発表会は、まだ終わりが見えそうになかった。

帰路のミニバンで美鶴は嫌になるほど由佳里から、見学した研究施設の内容を熱く語られていた。

「凄かったな、私もああゆう研究とかやりたいなあ。あとね、操者の安全強化のためにバイオフィードバックを応用した技術も試作段階だけ出てくるんだって。精神^{リバイバル}回帰システムの安全性の向上も目指せるみたいだよ。それにね——」

「分かったから!! すんごいのはよく分かったから、その感動を

自分の胸の内に仕舞っておいてくれッ」

美鶴は耳を塞いで、顔を窓側に逸らした。行政区に近づいているのだろう。道は大通りになり、既に道路の車両数は数えられないほどに増えている。あの中には企業関係の人間も数多くいるだろう。彼らはやはり今回の二人の総裁の会談を快く思っていないのだろうか。

「なあ、オヤっさ——」

美鶴は目の前の運転席に納まった文蔵に訊ねようと、口を開いた。

「な、なんだありゃ!？」

文蔵が酷く驚いた声を上げた。美鶴は何事かと座席の脇から顔を覗かせた。

美鶴の眸に焰が映る。

突然、目の前を走行する自動車が大きくハンドルを切った。舗装路に黒くスリップ痕が刻まれる。自動車はそのままガードレールに突っ込んだ。耳を劈く金属音と衝突音が響き、ドンツという衝撃波がこちらのバンの窓を叩く。

何事か、と考える前に文蔵が急停止ブレーキをかけた。身体が慣性力で前方に引っ張られる。隣では由佳里が短く悲鳴を上げた。

「くそつたれ、騎士かッ!」

文蔵が悪態をついた。

美鶴の眸は道路の下真ん中で、黒い外套マントに身を包んで立ち尽くす、上背のある禿頭の男を映した。

一目では判別できぬほど人に近似された精巧な容貌。その顔造り

は人そのもの。医療用に開発された頃の名残だ。

騎士である証は、二の腕から先の両腕に装備された火焰放射器のみ。その先から大蛇の舌の如き焰が噴き出していた。

「アレは《紅燕》^{べにつばめ}だ。最近犯罪に使用されて、警察の騎士管理棟に保管されていたシロモロだったが、今日然るべき研究機関に配送される予定だったらしい――」

「そこを奪われたと……」

つまりはそういうことなのだろう。美鶴は合点がいった。

ここでいう然るべき機関とは、クロヅカなどの研究開発部のことだろう。

「オヤっさんが受けた連絡はこのことだったのか？」

「おうよ。注意してくれとの連絡だったが、まさか遭遇するとは……」

文蔵は窓から身を乗り出し、後方を確認しながらバンをバックさせる。

唸りを上げて、バンがバック走する。後方を走る自動車が警笛を鳴らすも、意に返さず後進を続ける。視線の先で紅燕の姿が徐々に小さくなっていく。

「儂らは丸腰だ。生身の人間が騎士とやり合って勝てる見込みはゼロだ」

十分な距離を取るとバンが道端に急停車した。

文蔵が携帯を取り出し、電話帳を開く。警察や組合の仲間に連絡をとるつもりだろう。

数百メートル前方では今なお、紅燕が火焰^{かえん}を吐き出し続けている。

このままでは死人が出るだろう。ガードレールに衝突した車両の運転手は無事逃げ出せただろうか。

あまりお人好しな人間を演じる気はないのだが、このまま傍観者でいるのは気が進まない。

美鶴は意を決して、バンのドアをスライドさせた。空気の冷たさが肌を撫で、エンジン音が大きく聞こえる。

「君、何やるつもり!？」

由佳里が驚きに目を瞠ったが気にしない。

「おい美鶴、止めておけ! あとで厄介だぞッ」

文蔵も止めに入ってきたが従う気は毛頭ない。美鶴は背中から止める声が追いつがってきたが、振り払うように駆け出す。バンから六〇メートルは離れただろうか、急にカーゴパンツのポケットで振動が起こる。取り出したスマートフォンが文蔵の名を示していた。走りながら耳に当てる。

「何だよ、やめる気は毛頭ねえぞ」

通話越しに文蔵が息を吐き出したのが分かる。と、文蔵が話し始めた内容に美鶴の足が止まった。

「仕方あるまい。そう言うと思って調べてやったぞ。紅燕の兵装は腕に仕込まれた火焰放射器のみだ。そして火焰放射器はクセの強い武器。それゆえに使いこなすのは難しく、隙が出来やすい。が、射程距離は数十メートルある。簡単には近寄れんだろう。それに火焰放射器は焰を吐き出しているのではなく、点火された可燃燃料が噴き出されている。その火焰温度は八〇〇度をゆうに越える。上手く

周辺の車両を使って距離を詰めろとしか言えん」

文蔵が通話越しに指示した。短時間で調べてくれたのだろうか、正直ありがたかった。少なくとも紅燕の武装が火焰放射器だけであることが知れた。腕さえ破壊できれば、勝ちだ。

「オヤっさん、ありがと」

「使うのは腕だけだぞ。馬鹿なことはするな」
「了解」

美鶴が通話を終えようとするのを、少女の声が止めた。

「気をつけてよ」

心配そうな由佳里の声が通話越しに聞こえた。文蔵が由佳里に携帯を渡したようだった。

「ああ安心しろよ、俺を誰だと思ってる」

「弟キャラの高校生男子」

思わずズッコケそうになった。おかしすぎる。今この状況で言われる言葉じゃない。

「おい、由佳里……」

「冗談」

由佳里が笑ったのが分かった。心地よい音。不思議にもその笑い声で気持ちが軽くなった。

ありがとう、と声に出さず感謝して通話を終えた。携帯を仕舞い、美鶴は前方の騎士を見据えて走り出す。足の裏から伝わるアスファ

ルトの硬さを蹴って、疾駆する。

紅燕に近づくほどに夕立の時に似た、焼けたアスファルトの匂いが強くなる。周囲の運転手のいない乗り捨てられた車両の陰に駆け込んだ。ここまでで紅燕との距離は五〇メートルほど。現在、紅燕はこちらに背を向け、歩道の人々に対して火焰を放出していた。

一般人がビンなどを投げつけ、紅燕に対抗していた。だが、危険すぎる。既に数名が足などに酷い火傷を負っているらしく、悲痛の叫びがここまで聞こえる。

「さっさとやらなきゃ、まずいか」

美鶴は車の陰から飛び出し、別の車両を目指して猛ダッシュをした。紅燕が盛大に焰を吐き出したおかげか、周辺には乗り捨てられた車両が点在している。その間を縫うようにして、着実に距離を詰める。

「竹ちゃん、彼は大丈夫なのかな？ 騎士に生身の人間が挑んだって敵いっこないよね」

由佳里が不安げな声で文蔵に訊ねた。その手足が震えているのは錯覚ではないだろう。

「ああ、無謀だな。だが、美鶴の場合は、言うなれば一部騎士の状態であろうか」

「一部って、あの右腕のこと？」

由佳里は後部座席から身を乗り出して、運転席に座る文蔵の横顔を食い入るように見た。

「由佳里は知らされていないんだったな。美鶴の右腕はパンドラ製の義腕であり、あれが武器になる」

「でも、合金のパンドラは軽くって、打撃には不向きでしょ。殴るにしても威力は望めないよ」

由佳里は理解しがたい様子で首を傾げた。

パンドラを次世代合金として企業がこぞって扱おうとした要因は、その硬度に対する軽量さである。同じ体積で既存金属よりもパンドラの方が半分以下の質量であり、遥かに堅硬だった。

「そうだ。美鶴の右腕は殴るためのものじゃない。アレは切断するためのものだ。それゆえに軽量化が目指された。折り紙つきだぞアレは。稀代の天才、羽城誠が設計したものだからな」

「えッ、お父さんが設計したのッ!？」

由佳里は驚きに言葉を失った。

熱いの秋

「さて、どうすっかな」

美鶴は車体の陰で逡巡^{しゅんじゅん}していた。紅燕との距離は残り二五メートルほど、目と鼻の先だ。よく此処まで近寄れたものだ、自分自身を賞賛してしまう。

火焰放射器の射程は目測で五〇メートルにも及んでいるようだ。他の銃器類に比べれば短い、実際は驚異的だ。もうまともに距離を詰めることなど出来ないだろう。

自分は馬鹿なことをしている。焼死した死体になるだけだと、憫^{びん}笑^{しょう}する自分がいる。

「はは、ここに来て膝が笑ってる」

美鶴は足の震えを手で抑えつけた。

視線の先では吐き出された火焰が道路の上を跳ねていた。火焰が舐めた場所には消えずに焰の道が残される。燃える可燃燃料が線を描いているのだ。

僅かでも火焰に撫でられれば、数秒でヴェリー・ウェルダンにされるだろう。いや、ただの炭にされることも考え得る。

どうにか懷に潜り込めれば勝機はあるが、不可能ではないだろうか。

紅燕の周囲は紅蓮に囲まれている。美鶴に押し寄せる熱風が髪を焦がし、肌を炙^{あぶ}り、喉を焼いていく。

長期化は身体が持たない。周囲に酸素が不足気味になっている。美鶴は視線の先に紅燕をしかと見据えた。紅燕はちょうどこちらに背を向けている。

「ッ！？　くッ、やばいな」

ある異変を美鶴の眸は捉えた。

前方を走り、ガードレールに突っ込んだ車両に人影が見て取れた。気を失っているのか、動く気配がない。救急車が必要だろうが、紅燕のせいで近づくことは出来ないだろう。それに車両周辺が焔に囲まれていた。

人命がかかっているのなら、尚更時間はない。美鶴は足の震えを堪えて疾駆した。

「ソニックブレード
主兵装展開ッ」

美鶴は裾を捲り、右腕を地面に水平にして広げた。二の腕から先の義手の上側が金属音を伴って展開する。同時に間に収納されていた二枚の鋼の刀身が連結し、一振りの刀を成す。刃渡り五〇センチの小刀。それが手首の先から手を覆うように生える。

美鶴が誠に頼み込み設けてもらった武器。自分の手で皆を、由佳里を守るようにと得た力だ。

小刀は高速振動刃であり、連結した高周波振動発生機によって、一秒間に五千回の振動をしている。金属板でさえ易々寸断してみせる。

一つ問題なのは使用中は劈く悲鳴のような金属音が発せられることだ。これが五月蠅い、耳が痛い、頭に響く。

「うおおおおおおおッ」

美鶴は車体の陰から飛び出し、紅燕との残り距離二五メートルを走り出す。

気付かれる前にあの厄介な腕を切り落とせば勝ちだ。

ふいに紅燕が振り向き、両腕を前に突き出した。美鶴は咄嗟に近

くの車両の陰に飛び込んだ。
間一髪で、火焰をかわした。振り返れば背後で焰の壁が出来ていた。

「あつぶなッ！！ 殺す気かッ」

堪らず美鶴は悪態をついた。残念ながら紅燕に存在を知られた。状況を打開する策など持ち合わせていない。美鶴は右腕の武器を意味もなく見つめた。

パチ、パチ、と何かが爆ぜる音が突如、鼓膜を揺らし始める。一気に周囲の気温が上がるのを感じた。美鶴の全身に戦慄が走った。美鶴が身を隠した車体のフレームがひしゃげ、色が黒ずみ、フロントガラスが溶解し始めていた。車体が紅燕に集中放火されていた。

「やばいッ！！ 爆発するッ」

美鶴は足が縛れ、体勢を崩しながら、車体から離れる。その瞬間を狙われれば、回避不可能だろうが、今は目先の危険を回避するのに必死だった。

車体の陰から飛び出した途端、背後で轟く爆音が鳴り、熱波が美鶴の身体を吹き飛ばした。

外熱により、燃料が引火したのだ。

美鶴は四肢が投げ出され、ガードレールに叩きつけられる。全身にかかったGによって、肺の空気が一気に押し出された。

「があッ」

痛みに美鶴は呻吟した。疼痛が身体中から発せられ、骨が軋んでいた。意識が朦朧とし、視界が涙で滲んだ。絶体絶命とでも言えればいいだろうか。聞こえるのは業火の燃え盛る音と右腕から発せられ

る金属音、周辺の人々のヒステリックな叫び声。

こんなところで死ねないが、身体が言うことを聞かない。

「ぐうッ、やっぱ……」

幻聴だろうか、サイレンの音が聞こえた気がした。

『美鶴ッ！！ 生きてるか！？ 死んでも返事しろッ！！』

拡声器を通して、ふいに洞間声どうまへいこえが響いた。聞き覚えのある声だった。

幻聴でも幻視でもなく、回転灯を点灯させた一台のパトカーが反対車線からボラードに突っ込み、中央線を越えて紅燕に猛進した。唸りを上げ、紅燕を轢断れきだんしようとするかの如き速度を出している。

その運転席に津野田の姿があるのを美鶴は見つけた。紅燕の視線は完全に乱入してきた白黒パトカーに釘付けにされていた。またとない機会が訪れた。

美鶴は身体の悲鳴を無視して立ち上がった。朦朧とする意識は下唇を血が滲むほどに噛み、覚醒させる。

「うおおおおおおおおおッ」

これが最大の好機であり、最後のチャンスだろう。

猛然と迫るパトカーに対して、紅燕は斜め右に飛びのいてそれかわした。津野田はそれで諦めずハンドルを切り、車体を一八〇度回転させた。そのまま紅燕の火焰放射に臆せず、正面から突っ込んでいく。寸前で紅燕が斜め左に跳躍して避けた。そして美鶴は距離を詰めきった。丁度目の前に紅燕が転がり込む形になる。

「くそッ、ただの人間のガキがこんな近くまでッ！！」

紅燕の操者が舌打ちし、その視界に美鶴の姿を捉える。間近で見た紅燕は驚くほど人の形に近似なりされていた。が、両腕とは別に、双眸に浮かんでいる幾何学模様が、人ではなくアンドロイドなのだと理解させた。

「そろそろ幕引きにしとけよッ」

美鶴は体勢を立て直される前に、逆袈裟に紅燕の右腕を切り上げた。ソニックブレイドによって造作なく寸断された腕が重力に従って、地面に落下。重厚な金属音をたてる。

「くそッ、くそッ、こいつは人間か！？　なんで紅燕の腕が切断されんだよッ」

相手操者が狼狽した様子を見せた。同時に紅燕も恐怖に怯えた表情をする。ほんとによく造られている。美鶴は矢継ぎ早に袈裟切りを左腕に対して放った。火花を散らして、腕が分離する。腕ごと切断されたピンシリンダーから燃料が漏れ出るのが見えた。

美鶴は反射的に顔を腕で隠した。目の前で燃料が引火、暴発して小さな火の玉が突如誕生し、美鶴は熱風で後ろに倒れこむ。

「あっちーなッ、おいッ」

毛先が焼けてチリチリと縮こまり、熱風が肌を炙あぶった。

紅燕は左腕部がグロテスクにひしゃげ、地面に仰向けに倒れていた。両腕を失ったために上手く立ち上がれないのだろう。必死の形相で道路の上でもがいていた。

「くそッ、何だよ。簡単な依頼だと思ったのによッ！！　こんなガ

キに邪魔されるなんてなッ」

「逃がさねえよッ」

美鶴は紅燕の鳩尾みぞおちに右腕の振動刃を突き立てた。アンドロイドの身体を貫通した刃がその下のアスファルトまでも削る絶叫が響いた。刃を引き抜き、美鶴は武装を収納させた。紅燕はもはや行動不能だろう。憎憎しげな双眸がこちらを睨むが意に返さず、放置する。

「津野田さん、車両に気絶している人が取り残されてるんで、手伝ってくださいッ」

「んだと？ おい、早く案内しろッ」

美鶴と津野田は人命の救助へと走った。

「おい、何言ってるんだ？ 美佐子、おいッ。は？ 殺されるってお前——」

その瞬間を例えるならば、身体が次第に溶けていくというべきだろうか。痛みはなく、指先から消えていく。紅燕の操者、くにさだまさはる国定信治は戦慄した。何が起こったのか理解するのに、数秒かかった。

——おれの身体が死んだのか。本体が殺されたッ。

国定の怒声も悲鳴も、もはや両腕を失くしたアンドロイドは再現しなかった。無表情に沈黙したままだった。

熱いの秋（後書き）

偉大な化石燃料をふんだんに使いました。

ここまで読んでくれた方々に感謝します。はい。

放火と刃物と死んだ蛇（前書き）

はい、登場人物が増えます。

放火と刃物と死んだ蛇

箱には災禍が詰まっていた。地上最初の女性パンドラは好奇心に負け、箱を開けてしまう。飛び出した悪に驚きパンドラは蓋を閉じた。そして希望だけが底に残された。

有名なパンドラの箱の話だ。

この世界でマグネシウム合金パンドラは、その希望を夢見て造られたのだろう。

だがきつと、人々は災禍の絶望に恐怖し、希望がある故に争うのだ。

「おいッ、何がどうなってるんだ？」

津野田は理解出来ないといった表情を浮かべていた。

既に周囲には複数のパトカーが止まっている。気絶していた女性は無事、救急車で近辺の病院に移送された。

「どうも操者本体が死んだようすな。完全にこいつはマネキン人形になっておる」

文蔵が眉間に皺を刻み、顎に手を当てて唸った。

現場に文蔵と由佳里が合流していた。美鶴は疲労でアスファルトの上に座り込んでいた。

「騎士って奴は人間側が死んだらおしめえなのか？ 精神が移されてるなら、人間の肉体が使いもんにならなくても、機械側が無事なら人間は死なねえんじゃないのか？」

文蔵は津野田が不可解だと感じた訳を知って、手を叩いた。

「肉体の死は精神の死に直結しています。アンドロイド技術は機械側の擬似脳と人間側の脳を同調させるものです。簡単に言えば、機械と人間との間で無線の情報のやり取りをしているといえればいいでしょうな。そのため人間本体が死ねば情報が送られず、アンドロイド側も動かなくなるんです」

文蔵が簡単に講釈して、津野田は憑き物が落ちたような納得した表情で頷いた。

美鶴は興味がなさそうに空を見上げていた。さきほどの文蔵の話に付け足すとすれば、アンドロイドを操る人間側に必要な処置はないことだ。非侵襲性の技術が発展し、脳にニューロチップを植えつけられない方法が広まった。あの転送装置と両目を覆い隠すバイザーのおかげで、人間はアンドロイドを意のままに操ることが出来る。

「おっと、すまねえ。仕事の電話だ」

津野田が美鶴たちのもとから少し離れた場所へ移動し、携帯を耳に当てた。

「はあ？ 火事なあ？ 居住区第六区画？ おう、分かったすぐ向かう」

離れたにも関わらず、津野田の声はこちらまで聞こえた。そこまでがなるのならば、離れた意味がないだろう。

暫くして津野田がまいったと言いたげな表情で、舞い戻ってきた。

「いや、すまねえ。近くで火事が起こったようで、ちと現場に向かわなきゃならんことになった。おい、美鶴ッ。文蔵さんと由佳里ち

やんに迷惑をかけんなよッ」

「かけねえよ。むしろ感謝されてるよ。……おい、オヤっさんも由佳里も何でそんな目なんだよ。ホントのことだろうッ」

美鶴に盛大にジト目が注がれていた。実際、感謝されてしかるべきだろうに。大家の朝飯を作り、幼馴染の夕飯を作り、操者としてお金を稼いでいるのだ。そんな視線を向けないでほしい。

「そんじゃ、俺は現場に向かうんで失礼する」

「んじやな、頑張れよ公務員」

美鶴は津野田が乗り込んだパトカーの威勢よく去っていく後姿を見送った。日はあと一時間もしないうちに落ちるだろう。空気がだいぶ冷たくなってきていた。

「そんなところで座り込んでたら風引くよ」

由佳里が手を伸ばしてきた。美鶴は左手でそれに応じ、節々の痛みを堪えながら立ち上がった。

「ひっでーなこりゃ。この家に住む二人がホトケか……」

居住区第六区画の二階建て住宅に津野田は到着していた。目の前には二階部分がほぼ全焼した建築が存在していた。火は消し止められたばかりのようで、所々燻っていた。

津野田は顔の前で手を合わせ、眸を閉じた。次に開かれた眸には確かな憎悪の炎が燃えていた。

張り巡らされた『Keep Out』の立ち入り禁止テープをくぐり抜け、住宅の玄関へと向かう。

「津野田警部、こちらです。一番被害があったのは二階の部屋で、ほぼ全焼。ガソリンでも撒かれて放火されたようです」

現場検証が続く二階の一室。鼻の粘膜を刺すオゾンの臭気が立ち込め、壁は焼け落ちていた。鑑識かんしきからの説明を受け、津野田は部屋を改めて見渡した。

まず目に付くのは部屋の真ん中に鎮座された転送装置だ。焼け焦げて見るも無惨な状態になっている。

「被害者は二人とも鋭い刃物のような物で殺害されてから、火を放たれたようです。しかも正確に心臓を一突き。昔流行りましたよね」
「ああ、五年以上も昔の蛇共を嫌でも思い出しちまうな。口封じのために用無しを消す。奴らの常套手段だ」

津野田は苦々しく顔を歪め、現場から離れた。

「俺の思い過ごしであってくれ……」

懇願するように津野田は言葉を紡いだ。

被害者であったのは、同棲していた国定信治と野村美沙子の二名。国定信治は過去にランカーライセンスを剥奪され、操者の資格を失っていた。最終序列は二六八九番、当時使用していた騎士は紅燕であつた。

紅燕を奪取したのは照合不明の騎士であるとの話だった。つまりランカーに登録されず、尚且つ企業が造ったシロモノでない可能性が高い。

わざわざ国定信治が愛用した騎士を用意してまで、何が目的なのだろうか。

今回紅燕が事件を起こした道路は、行政区や工業区を繋ぐパイプ

ラインでもある。

簡単に考えれば、再来週に迫る総裁同士の会談への警告だろうが、現場に丁度美鶴達が居合わせた事が消えない不安要素となり、頭を離れなかった。

「はあー、全く使えなかったわー。アイツホントに二千番台の人間？ 弱すぎて話しにならないわ。なに生身の人間に負けてんだか。弱すぎだろッ」

呵々^{かか}と笑う声が夜の街に響いた。スクランブル交差点を横断しながら、一人の少年が腹を揺すっていた。全身、白いとしか言いようのない出で立ち。

真っ白い髪に、青白い肌、不健康そうな見た目とは裏腹に少年は快活な笑いを続けた。表情は直視するには恐れ多いほど、酷く歪んだ満面の笑みが張り付いていた。

「骨^{オステオ}、変に笑っていると周囲の視線を集めるぞ」

真っ白な少年のすぐ隣りを長躯の男が歩んでいた。金髪の髪をもち、サングラスをかけ、裾の長い黒い外套^{マント}を着ている。その容貌のために居るだけで周囲の視線を集めている。

「わあーてるって。そう五月蠅く言いなさんなよ涙^{ウル}。でも思い出すと笑いがとまんねえからッ」

収まらない笑いに心底困り果てているといった様子で、少年——骨^{オステオ}は膝を叩いた。涙は呆れ果てたように肩をすくめて首を振った。

「俺達の仕事は別にあるんだ。あまり私情を持ち込むと報酬が減額

されるぞ」

「別に報酬なんてもらう気ねえーくせに。それに依頼主もオレ達に報酬を素直に払うかね？ 尻込みして逃げ出しそうじゃねえ？」

興味の薄い双眸をウルに向けて、オステオはクルクルとその場で旋回する。周囲の人々が不快な視線を向けてくるのも気に留めない。

「知らないが、どうだろうな。さて、血と連絡をとって合流する
ブラド
しようか。期限は再来週の会談までだからな」

ウルとオステオは人込みの中へと紛れ込んでいった。

放火と刃物と死んだ蛇（後書き）

自分の文章ってどうなんでしょうか。
批評してもらえると有り難いです。

騎士同士の戦闘シーンはあと少しで入る予定です。
戦闘を文字で書くって、難しいです。

居眠り男子と落書きと美人な女性

騎士が人に対して火焰放射器を使用した事件は、操者と補助者がアヴィーターサポーターが焼死した遺体となり発見され、幕を下ろした。世間では何かの陰謀だとかナントカ。想像力豊かな政治家や住民達は、それぞれ思いの空想を描いた。

事件から四日が経ち、ニュースで事件が取り扱われ無くなって、代わりに来週に迫った総裁同士の公式会談についての憶測が飛び交い始めた。形式だけのハリボテ、これまでの在り方を根本から覆す歴史の分岐点、牽制行動など千差万別といえるほどに推測が及んだ。どれかが真実かもしれないし、全て嘘かもしれない。ただ、美鶴にとって会談の結果を変えることなど不可能であり、素直にその結果を受け止めるしかなかった。

美鶴は一人、放課後の教室で意味も無く、窓の外に広がる景色を眺めた。日が沈みかけ、薄暗くなった校庭には部活動に励む西徳付属高校の生徒の姿が点在して見える。もちろん美鶴は帰宅部に所属していた。

「来週かー。どうなっかな……。総裁同士の会談かー、てか何で近畿圏では国家主席の肩書きなんだろうーな、不思議だ。それよりも何で瑠璃も残ってるかが不可解だ」

美鶴は目の前の席に馬乗りで座り、後ろを振り返っている後輩に呆れた。とっくに下校の時間を過ぎているのだ。由佳里も既にマンションへ帰宅しているにもかかわらず、この後輩は何故この教室にいるのだ。

「うち今日は仕事があるんで、小埜崎おのさきさんが迎えに来るのを待ってるんですよ。あ、そうだ。先輩はまだ実際に小埜崎さんに会ったこ

とないですよ。ね？ 人生初体験ですよ。ね？」

「会ったことはないな」

素直に答えてやる。

「それじゃあ、決まりで。……ところで先輩は何で残ってるんですか？ 顔に油性のラクガキを残して何がしたいんですか？」

「……………聞きたいか？」

「遠慮します。どうせ居眠りしていて放置されたんでしょう？ 顔に痕が残ってますよ。落書きの犯人は由佳里先輩ですね。絵心があります」

瑠璃の言うとおり美鶴は七限の授業を睡眠学習し、帰りのホームルームも夢の中でやり過ごしていた。幸いに本日は掃除免除がなされた模様で、美鶴は誰もいない教室に一人残される羽目になっていた。どうして由佳里は起こすという努力をせず、起こさず落書きをするなどという努力をしたのだろうか。

携帯に送られていたメールには「まいったかッ（笑）」と打たれていた。

——落書きしたなら、ついでに起こせよッ！！ てか何で俺は起きなかったんだッ！！

美鶴は机に突っ伏して呻き声を上げた。そんな美鶴の頬を瑠璃が面白げに連打する。

「いってーよ。やめてくれ」

「誰にいつも会いたいんですか？ ああ、うちにですか。でもごめんなさい。うち先輩を独り占めしたいのは山々ですけど、さすがに由佳里先輩がいるんで憚はばかられるっていいですか……」

「——お願いだから話を聞き入れてくれよ。日本語が通じてくれよ

ッ。あいたいじゃなくて、イタイだよッ」

美鶴の様子に堪えきれないといった様子で、瑠璃はころころと笑い声を上げた。

その様子に美鶴は呆れ、黒板の横にかけられた時計に目をやる。

現在時刻、一七時二三分。

かれこれ一〇〇分以上眠っていたようだ。美鶴は立ち上がり、欠伸を噛み殺した。

ピロン、と電子音が鳴る。視線を下げれば、瑠璃が携帯のカメラ機能を使用したところだった。

「ほら、記念の一枚ですよ。コレはもう芸術ですね」

瑠璃が携帯の画面をこちらに向け、撮った画像を見せてくる。そこに映る老人を見て、美鶴は絶句した。

鼻の下に伸びる鋭角的な口髭に、頬に刻まれた無数の皺、目尻の線。一瞬我が目を疑ってしまい、美鶴は慌てて自分の顔に手を当てたが、いたって健康な十代の肌だった。

「ここまで本格的に落書きされるなんて……。怒りよりも驚きが勝りすぎて、何もいえねえ」

「うちだったら、ほっぺに渦巻き模様を描いて、瞼に黒目を入れるのが限界ですよ。あっと、小埜崎が着いたみたいです。ほら、美鶴先輩も行きましょう」

ぐいぐいと瑠璃が美鶴の腕を引っ張り、廊下へと連れ出す。ひと気の無い廊下は静寂に包まれ、生徒が創る喧騒は皆無だった。

「瑠璃、ちょっと手を放してくれ。顔を洗わせてくれないか？」

「何故ですか？ 小埜崎さんもきっと今のままの方が喜びますよ」

「そういう問題じゃねえだろッ!! 初対面でいきなりこの顔とか、正直きつ過ぎだろッ」

美鶴は瑠璃の手を振りほどいて、水道の方へと向かった。蛇口から吐き出される水の冷たさで、鳥肌が立った。果たして油性のラクガキを落とすことは、この場において可能なことだろうか。美鶴は不安を拭いきれなかった。

「遅いよ瑠璃ッ!! ちゃっちゃと仕事終わらせて、明日までのレポートを仕上げなきゃならないのよ、あたしはッ」

「すみませんでしたッ。姉貴ッ!!」

「……今日はどんな設定？」

「五つのグループを従え、族の総頭に君臨する小埜崎さんに従順な部下です」

「相変わらずね、瑠璃は……」

「いえいえ、それほどでも」

「瑠璃、てめえーは褒められてねえーぞッ!!」

傍観者でいようとした美鶴は思わずツツコミを入れた。何故か「おおッ」という驚嘆の声が上がった。

美鶴と瑠璃は、小埜崎 叶望^{かのん}が待っている学校の東門へとやってきていた。そこに一台の黄色に塗装されたスポーツカーと女性が二人を待っていた。ちなみに努力の甲斐あり、美鶴の顔の落書きはほぼ落としきった。帰ったら風邪を引かぬように温かなミルクを飲もう。うん、そうしよう。

「ところで君は？」

黒のスーツで身を包んだ女性が首を傾げた。見ればすごい美人であつた。すらりとした体躯、肩にかかる漆黒の髪は艶やかで、明るい色のフレームをした眼鏡を掛けている。細く描かれた眉に、キメ細かな肌は透き通る白さだ。

美鶴は驚愕に言葉を失つた。瑠璃のことだから年齢をさば読みしていたものだろうと考えていたが、なるほど二十歳と聞いても納得がいった。

「小埜崎さん、こちらに御座おわしますのが、かの有名な美鶴先輩です」

どこがどう有名になっているのか疑問であつたが、美鶴は瑠璃にそう紹介されていた。

小埜崎は急に目を輝かせ、美鶴に歩み寄ってきた。

「なるほどー、君が美鶴君かあ。文蔵さんのアパートに住んでる子だよ。うんうん、いいよ。いい素材だよ君はッ」

「ん？ えっと、オヤっさんと顔見知り何ですか？」

「そうだね。あの人には随分とお世話になったからね。ところで美鶴君」

「——はい？」

「女装してみない？」

美鶴はまばたきを数度繰り返し、脳内で先ほどの言葉を反芻はんすうした。さて、この人は突然何を言い出したのだろう。女装？ ただの変態かッ。

「そんな悪癖は持ち合わせてないですッ」

美鶴は後ろに後ずさり、首を全力で横に振った。

「もしもーし。小埜崎さん、そろそろ仕事に向かいましょうよ。美鶴先輩の女装画像はうちに任せてください。納得のいく仕上がりにしてみせますから期待してください。それじゃあ先輩、また明日」

瑠璃が小埜崎の背中をぐいぐい押して、スポーツカーの方へと去っていく。去り際に怪しい話をしていたことに、美鶴は冷や汗を掻いた。今後の学校生活では細心の注意を払おう。

美鶴も帰宅しようと駐輪場に足を向けた。ふと視界の隅に人影が映りこむ。

「そうそう、美鶴君。ちょうど良かったよ。君にも言うておこうかな」

ふいにUターンしてきた小埜崎が腕を組み、片手を頬に当てて告げた。

「この前の依頼の時にね、依頼人さんクライアントから聞いたんだけど、どうも蛇が出たらしいよ。不確かな情報だけど、警察側にも動きがあるみたい。このこと、文蔵さんにも話しておいてね」

手を振って小埜崎はスポーツカーに乗り込み、颯爽と唸りを上げて走り去っていった。

美鶴は暫く呆然とその場に立ち尽くしていたが、吹き付けた秋の風に身を震わせ、足早に駐輪場を目指した。

自転車を見つけたところで、ふいに思い立ってスマートフォンを取り出し、電話帳に載る相手にかけた。

数回コールが鳴り、相手が出た。

「なんだ、美鶴からかけてくんなんてめっずらしいなッ。どうした？ 事故でも起こしたか」

「いや、津野田さんにちよつと聞きたいことが、主に仕事の話で」
「何だよ。俺にも守秘義務があるからな。滅多なことは話せねえぞ」

通話越しに津野田が髪を掻き乱す音が紛れた。

「蛇が入り込んだってのは本当ですか？」

沈黙が訪れた。風が吹き抜け、落ち葉を彼方へと運び去る。

美鶴は根気強く、相手の反応を待った。しばらくして呻いた津野田が話を始めた。

「はあ、確定事項じゃねえが、出現したらしい。クロヅカを筆頭に、複数の企業に脅迫めいた手紙が送られたんだ。内容は首都圏^{エリア2}の全人命を人質にしている、今回の会談を取り消させろというものだ。その最後に、殻を破って顔を覗かす蛇が描かれていたらしい」

「それじゃあ、創世の蛇ですか……」

「まだ分かんが、俺たちは嚴重な警戒態勢を布^しかされてる。気を付けろ美鶴。最悪の場合、向こうが接触してくる可能性がある。お前のことは公に出来てないからな、警察が護衛することは難しい」

「俺は一人で大丈夫です。とりあえず、こっちも注意は怠らないようにします」

美鶴は通話を終えて、携帯を閉じた。

そして自転車に跨り、夜の街に飛び出した。

「くそッ」

胸焼けのような不快感が消えずに燻っていた。

居眠り男子と落書きと美人な女性（後書き）

ここまで読んでくれた方々に。

つまらない、読みづらいなど不満があっても、最後までお付き合いしてもらえたら嬉しいです。つまり完結するまで、読んでもらいたいです。

帰ろうにも帰れなくて遭遇

重い足取りで美鶴は自転車を転がしていた。足取りが重いのは、蛇の存在を知らされたからだけでなく、それにあいまって自転車が跳ねたからだだった。つまりパンク。

「今日は厄日なのか？　日頃の行いは悪くなかった筈だ、うん」

美鶴は独り言しながら、街路灯が照らす薄暗い通りを一人で歩いていた。身を凍らすような冷気が風と共に頬を叩く。人通りの少ない路地は酷く閑散としている。

すっかり日は落ちて、空には三日月が浮かんでいるも、辺りは暗闇に飲み込まれたかのようだ。あとしばらく歩けば、白夢荘のボロく寂れた姿が見えてくるだろう。文蔵にはすでに、パンクしたために遅れるという主旨のメールを送ってある。

今日の夕飯はどうするかと美鶴は考えを巡らせた。

「夜の道を一人で歩くのはやっぱり怖いもんだよな」

見慣れた道も夜ではその様相を一変させるものだ。美鶴は形容しがたい恐怖を覚えつつ、夜の居住区を進んだ。

野良猫がすぐ目の前を横切り、ビクッと全身に電流が走る。バクバクと心臓の鼓動が早まった。

「驚かせんなよッ。全く」

美鶴はほっと胸を撫で下ろした。

「何でばれたんだ？　完全に闇に同化していたと思ったのにな」

すぐ近くの電柱の陰から声が上がった。ぎよっとして闇に目を凝らせば、確かに人の輪郭が見て取れた。美鶴は自転車を押す手を止め、数メートル離れた場所で停止した。

明らかに待ち伏せていたらしき人影。自然と警戒心が募る。

「誰だよ、あんた」

「久しぶり、美鶴クン。元気にしてたか？」

街路灯の下に身を晒し、姿を露わにした長躯の男。サングラスを掛けたその表情には笑みが浮かんでいた。長めの金髪、高い鼻が異国人のような印象を与える。

「つくづく厄日だな今日は。……神鳴の外見は、相変わらず、一目を引く形だな。どうして、何でここにいるんだ、涙」

美鶴は目の前の男のことを知っていた。いや、男は人間じゃない、騎士だ。

あのサングラスの下には幾何学模様の浮かんだ双眸がこちらを睨んでいることだろう。

かつて世界から淘汰された筈の存在。神の領域に辿り着いてしまった存在。

『創世の蛇』のメンバー、元ランカー序列四六番の高順位ランカーだ。

「ああ、あと数日後に首都圏が消えるからね。その前に挨拶でもしておこうかと。探すのに手間取ったんだ、感謝しろよ」

「エリア2が消える？」

「言葉通りにね。瓦礫の山、廃墟の群れ、灰色の世界、真っ赤な鮮血がこの一帯を満たすんだ」

大仰に腕を広げ、男は声高に笑った。まるで滅びが確実だと言いたげだ。男の声色には揺るぎない確信が濃く出ていた。

「……やらせない、絶対にさせない」

美鶴は制服の裾を捲くり、右腕を広げた。この場で神鳴を破壊すれば、阻止出来るという淡い期待があった。

「俺を倒しても、既にエリア2には血も骨も来てるんだ、無駄だぞ。それに生身の人間が神鳴に敵うはずがない。紅燕の事件では人間に騎士が負けたが、実際は起こらん奇跡だよ」

「お前ッ、見てたのかッ!？」

「ああ見てたよ。なんてったって、紅燕をあの手者に用意したのは俺たちだからな。地味に面倒だったな、あれは。……美鶴君、君はそんな義手までこしらえて俺達と戦うつもりなのか。その行為は単なる自殺行為だぞ?」

神鳴が頬を掻き、困り果てたように口を噤んだ。美鶴は自分の非力を、浅はかさを思い知った。右腕に収納された刃を展開する前に、こちらの息の根は止められるだろう。

「くそッ!!」

美鶴は腕を下ろし、拳を握り締め、神鳴を睨みつけた。それぐらいしか、出来る事が残されていなかった。

「賢明だ。人の勇氣は最も侮蔑すべき感情だ。憤怒、虚栄、強情、興味、愉快の集合体さ。勇氣ある行動は尊敬も崇拜もされない。愚かな行為として処理されるだけさ。そうだ、ところで博士もここに

いるんだろ？ 君のことだ。殺せなかったんだろ？」

「……………」

「黙秘権の行使は、合理的とは限らないよ。君は俺達から多くを奪いすぎたからな。抹殺命令は下されているんだよ。実行するかは別としてね。さてと、それじゃあ御暇おいとまするよ。……そうそう最後に、君に贈り物をしておいたよ。受け取るか、破棄するかは君の好きだ」

人ではありえない身のこなしで、住宅を飛び越えて男は姿を消した。残された美鶴はアパートまで急いだ。ウルが告げた贈り物の正体が気になった。アパートに何か被害がなければいいのだが、杞憂だと思っても不安が募った。

視界に映った白夢荘は平穩無事な日常の中に存在した。見飽きた黒ずんだ壁や錆び付いた赤褐色の階段が出迎えてくれた。

階段を駆け上がり、自室へと向かわず、文蔵の部屋のドアを何度もノックする。「なんじゃあ、どちらさまだ？」と訊ねるくぐもった声が聞こえた。

「美鶴だよ、オヤっさんッ。ちょっと話があるんだッ」

「美鶴かッ、良かった。心配したぞ、お前さんが帰ってこない間にいろいろと大変なことになったんだ」

扉が外側に開けられ、中から頬や鼻先を赤らめた文蔵が顔を覗かせた。

「ほれ、早く中に入れ」

美鶴は指示されたとおりに、部屋に上がりこんだ。転送装置がな

いだけでここまで広さが変わるものなのかと驚愕する。日に焼けた畳の上に置かれたテーブルの上には、広げられたツマミの数々、空のビール缶数本。

「来週に迫った総裁の会談を巡って、各勢力に脅迫文が送られたとニュースになつとる。騎士取扱組合でも緊急連絡があつたのだが、これから一週間は細心の注意を怠らずにとのことだ。そしてな、蛇の生き残りがエリア2に現れたらしい」

「小埜崎さんからその話は聞かされたよ。警察側でも蛇を搜索する動きが出てるらしい。津野田さんから直接聞いた」

「小埜崎叶望に出会つたのか。確か美鶴の後輩が補助者になつとつたな。にしても警察も動くとは……」

文蔵は顎に手を当て、さすつた。

「でだ、美鶴。おぬしに厄介な依頼の相談が来た。依頼主は《血塗れた少女》と名乗つたらしい。そやつがおぬしを指名してきたんだと。肝心の依頼内容は——決闘だそうだ」

帰ろうにも帰れなくて遭遇（後書き）

はい、何だかんだで14話まで来ました。

涙と血と寂れた街並み

考えを改める気はないのか。

明らかに危険な行動だ、やめておけ。数日間、そんな台詞が繰り返された。

休日の昼過ぎ、ニュースでは連日のように脅迫文に対する両総裁の対応を取り扱っていた。

エリア2の企業政府は、厳戒態勢をとり、会談に臨むことを表明。反対する組織にはクロヅカ直々に実力行使に出るとした。会談はあさってに、クロヅカの本社ビルで行われることとなっている。多くのランカーがその護衛任務のために雇われた。さすがに6千番台のランカーなどには声はかからなかった。

ただし、そんな緊迫する情勢とは別の理由で、美鶴達の日常も切迫した様子を見せていた。

「今回の依頼はちとまずいかもしれん。前払い金が既に払い込まれ、指定地は外部居住区だ。依頼内容はそこにいる騎士との戦闘」

文造は危険な匂いがすると警告し、依頼の破棄を迫ってきた。

普段であれば文蔵もここまで頑なに、否定をしてこないのだが。いや、否定は当然か。

「死亡フラグが立ったか？」

「ああ立ったぞ。消されるパターンだ。どこの馬の骨か知らんが、おぬしを危険と見なした人間が抹消しようと考えてる可能性がある」
「六千番台のランカーを消すとかどんだけ小心者だよ」

美鶴は笑った。表面上に取り繕った笑いだ。どうも文造の目は誤

魔化せなかったようだ。

「茶化すな、美鶴。おぬしは先日、奴らの一人と遭遇したのдар？ 組合側でもその行方を追っているが、未だ手掛かりは見つかっておらん。現状では無闇な行動は慎んだ方がよいぞ。万が一、奴らの手の者ならばどんな手を使うか分からん。ただでさえ会談の脅迫騒ぎで、危険が高まっとるんだ」

「ああ、分かった」

「それじゃあ、依頼は破棄するんでいいな——」

「オヤっさんは由佳里を守ってくれ。由佳里、俺を転送してくれ」

「——なッ、正気か！？ 美鶴ッ」

文造は立ち上がり、肩を震わせた。口角泡を飛ばし、拳を作る。それに対して美鶴は真っ向から向き直った。

「正気だ。ちょっとばかり俺の罪を清算するだけだ」

美鶴は踵を返して、転送装置の中に乗り込む。心配そうな由佳里が覗き込んできた。

「本当にいいの？」

由佳里が問いた^{ウル}だした。それに対して美鶴は首を縦に振った。

涙が贈り物だ^{ウル}といったものがこの依頼であるならば、その決闘の相手が創世^{ボレテース}の蛇のメンバーである可能性が高い。

「ああ、頼む。万が一、蛇が出てくるなら滅多にない機会だ。すぐに終わらせて、ここに戻ってくるさ」

「……やはりおぬしは阿呆だ。ちッ、由佳里もお前さんの身体も任せておけ。出来る限りの努力はしとこう」

文造が部屋を出て行き、隣りのドアが開けられる音が聞こえた。

「じゃ、精神転送を開始するよ。負けないでね」

「ああ、期待しとけ」

美鶴はバイザーをかけ、座席に後頭部を密着させた。ゆっくり深呼吸をする。

「同調開始、認証完了、精神転送開始ッ。トランス三、二、一」

——必ず勝って、守ってみせるさ。

「——零ッ」

開けた視界に飛び込む部屋の様子。鎌錐の身長のおかげで幾分視線が高くなる。

見上げるようにしている由佳里が手を振った。

「行ってらっしゃい」

「ああ、行ってきます」

美鶴は玄関へと向かい外へ出た。当然のように転送時には気温を感じられない。視覚。聴覚や多少の痛覚はあるも、外熱を感じることは出来ない。それでもこの身体を本当の肉体のように感じてしまう錯覚。アンドロイド技術に今更ながらに驚嘆する。
昼過ぎの陽気な気候だ。

「気張ってけッ、美鶴!!!」

不意を突く声に左を向けば、一体のロボットが凝然と立っていた。

身長二メートルはあるだろう。遠隔操作して動かすアンドロイドだ。無骨なロボットの陰から文造が顔を覗かせていた。その手には携帯ゲーム機が握られていた。昔、人気を博したシロモノだ。その画面にはロボットが見ている映像が表示されているだろう。

文蔵が自身の手で作り上げたロボットだ。騎士の整備士としての活動を行う傍ら、そうしたアンドロイドの開発もしている。美鶴の目の前にあるアンドロイドは文蔵と誠が共同制作したものだった。

——名前はなんだったけな。

「遠隔操作型ロボット、アレキサンダーを出してやったぞ。騎士には到底及ばぬが、無いよりはましだろ。さっさと終わらせて戻ってこい」

文蔵がエールを送り、美鶴は鎌錐の左手親指を立てた。

アパートの二階から飛び降りると、上から声が飛んできた。

「今晚はキムチ鍋にしょッ！！ 依頼を終わらせて、買出しに行くからね！！」

由佳里が大きく手を振りかざしていた。

由佳里の意見に文蔵も賛成するようにガッツポーズをとる。

買出しといっても、ほとんどこっちは荷物持ちにされんだよ。でも久しぶりに鍋か、いいな。

美鶴は外部居住区を目指して、跳躍した。

外部居住区と隔離壁の中を繋ぐ非認可通路には様々なものがあるが、代表的なものは地下通路だろう。

ただし、居住区に巡らされた下水道設備には、暗視補正カメラが設置され、騎士や違法入国者を監視している。実際、過去に何度も

逮捕者が出ている。どれもこれも監視カメラに見つかり、警備の人間に捕まったためだ。

ただし、完璧なものは存在しない。蜘蛛の巣のように巡らされた下水道の全範囲をカバー出来ることはない。必ず穴が存在している。その場所さえ把握出来れば、監視カメラに捉えられずに外にでも、中にでも自由に通行できる。それ相応の時間や手間がかかり、億劫ではあるのだが。

「やっと出たな。さてと場所はどこだったかな」

『現在地から北に一キロ地点だよ』

由佳里の声が頭に響いた。

それに従い美鶴は鎌錐を跳躍させる。鎌錐の逆間接脚はとりわけ機動性に優れている。軽く五〇メートルは一度に跳ぶことが可能だ。半壊したビルの間を抜けていく。大崩壊によって朽ちた都市の風景は、殺風景な灰色に染まっていた。当時にプレデターが際限なく破壊活動を行ったためだ。その痕跡は見渡す限りに存在した。

『止まってッ、センサーが反応した。左手のビル一階。人じゃないみたい』

捕捉カーソルが表示されていないことから、危険はないものらしい。

美鶴は常に関きっぱなしの自動ドアをくぐり抜け、一階エントランスホールに踏み込んだ。

十年近く経って、堆積した落ち葉を踏みつけ、進んだ。中の様子は当時の悲惨さを訴えていた。弾痕が無数に残る壁には未だ黒くシミが残っている。大理石の床には何かの足跡状に穴が作られ、その周囲に亀裂が走っている。受付カウンターは見事に粉碎されていた。当時にプレデターの侵入を受けたらしく、手当たり次第に破壊され

ていた。

想像するに、この会社員は皆殺しにあっただろう。そう思うほどの凄惨さが存在した。

突如、鎌錐のカメラアイが崩れた壁の陰に動く物体を捉えた。

錆び付いた胴体からは歪な駆動音が聞こえる。相手もこちらに気づいたらしく、動きを活発化させた。脚部を損傷、損失しているらしく不協和音が続く。

「犬型のプレデターか。久しぶりに見たな」

『プレデターの原動力って、電力だよな。よくまだ動いているよね』

通信越しでも、由佳里が驚愕しているのが分かった。

「奴らは送電線から直接充電出来るからな。それが奴らの恐ろしさだ。燃料は戦地で蒐集し、破壊を続けた。今では外部居住区への電力供給は止められているにも、まだ動けるのがわんさかいる」

『全然見ないけどね』

「地下鉄とかデパ地下とかに入り込めば、嫌でも遭えるさ。電力消費を抑えるために地下に潜って、雨風を防いでるんだ」

美鶴は言いながら、犬型プレデターの胴体を踏み潰した。スパークが散り、痙攣したように身を震わせた後、プレデターは機能を停止させた。

ランカーには課せられた義務が複数ある。

その一つが外部居住区でプレデターに遭遇した場合には、見過ごさず破壊するということだ。

何とかプレデターを一掃したいも、企業間の軋轢で思うように作業が難航した結果、この形にされている。

「よし、行くぞ。由佳里、サポートは頼んだ」

『任せてよ——ちゃっちゃんと終わらせて戻ってこいッ』

由佳里の澄んだ声が途中からザラついた野太い声に変わる。

『竹ちゃんとの二重態勢で挑むよ』

それは心強い限りだ、美鶴は目的地に急いだ。

血塗れた少女と蟻螂のワルツ（前書き）

難しい難しい、戦闘シーン。

読むのが耐え難くても、すみませんとしか言えません。はい。

血塗れた少女と蟻螂のワルツ

目的地に指定されたのは、開けたスクランブル交差点。玉突きになった車が乗り捨てられ、根元から折れた信号機や割れた舗装路からは植物が伸びていた。窓ガラスの無くなったビルが見下ろす廃墟と化した大都市。

美鶴は手が汗ばみ、背中に脂汗が滲むような感覚を覚えていた。鎌錐にはそんな機能はないのだが、そう思うほどの事態に陥った。

先ほどから美鶴の視界にはセンサーが探知した存在に対してカーソルが表示されていた。その数、およそ四〇。

ここまでは予想外だった。視界の大半を赤いカーソルに埋め尽くされている。

『そんな、こんな数の騎士が一度に……気をつけてよッ』

美鶴は答えず、右腕の主兵装デスサイズを展開させる。プライムモーター 原動機の駆動音が大きくなり、鎌錐が戦闘態勢をとったことを知らせる。

「ッ!？」

突如、廃ビルの三階から人影が宙に躍り出た。飛び立とうとするかのように、腕を羽ばたかせて墜ちる。舗装路に落下すると共に地面が揺れ、金属音が響く。同時に視界のカーソルが一つ消失した。

あれはデッドラインの騎士だ。企業の騎士が何故ここに。美鶴は素早く周囲を見渡した。そして、この異様な数の敵の正体を理解した。

捕捉したものは皆、既に破壊された騎士だ。

車両に叩きつけられたもの、四肢を無くしたものの、胴体が二つに折れたもの。どれも辛うじて機能出来ている騎士ばかりだった。つ

い先ほどここで戦闘があったらしく、どれも大破していた。刻一刻とカーソルの数は自然消滅していく。

「何があったんだ？」

『前方、ビルの三階に反応ありッ』

由佳里の指示に美鶴は身構えた。つい先ほどに騎士が躍り出た場所だ。

その場所に真っ赤なコートの少女が慥然と立っていた。空の蒼と対比し、周囲の灰色から浮き出る色。

二週間前に美鶴とぶつかった少女だった。忘れようにも忘れられないだろう。容姿端麗、眉目秀麗を陳腐な言葉にさせる容貌。

ただしその手には全長三メートルほどのある大振りの斧槍。^{ハルバード}いや、あの斧頭の大きさは三日月斧に似ていた。^{バルディッシュ}その姿はまるで鬼神を思わせる偉容を放っている。視界に現れたカーソルが少女が人間ではないことを示した。

つまり彼女^{アレ}は騎士だ。

「キシシ、やっと来たか。時間になってもおめえが来ねえから、暇つぶしに近くの騎士どもを一掃してたんだ。相変わらず、おせーよ顎^{アギト}ッ」

『アギト？ てかあの子、君が一目惚れした子じゃんッ——何？』

美鶴が惚れただとッ!？」

「ちよっと待てッ。惚れちゃいねえぞ!! オヤっさんも反応すんなよッ。出来れば指示をくれよッ」

美鶴は急に脱力した。今が依頼の遂行中で、敵が目の前にいることを忘れかける。

にしても一体でこの数を殲滅したのか。待ち合わせは一〇分弱の遅れではあったが、その時間でこいつらを破壊するなど可能だろう

か。ここに来るまでに剣戟けんげきの音も発砲音も聞こえはしなかったのだ。つまりわずか一〇分もかけずにこれらを一掃したのだろう。

あの見た目であっても、油断は禁物であろう。

「何、駄弁ってんだよ。もう戦いを始めて構わないのか？」

「待った、一つ聞きたいことがある。中の精神しんは男か？」

美鶴は不吉な笑みを浮かべた少女に聞いた。別本物が可憐な少女であることを期待したわけではない。決して。

「オレを忘れたか、アギトッ。オレは血ブラドだよ。性別は男だろッ」

発声器の調整で少女の声色であったが、少女はその顔立ちからは想像出来ない、粗暴な言葉使いで答えた。手の中で軽々とハルバードを回し、円を描く。ここまで風切り音が聞こえてきた。

そうか、男なのか。美鶴は少なからず落胆した。ブラドと名乗った操者とは面識があった。

確か無精髭を生やした二〇代後半だったはず。今は三〇代前半あたりか。

個人の趣味であろうと思うが、些か心配に思う。少女の騎士か、危険な臭いがする。

『ちよっと君、あの子——じゃなくて彼の正体が分かったよ』

興奮気味に由佳里が通信をしてきた。奴の正体とは何だろうか。気になった。

「なんだよ、その正体って」
『重度のロリコンッ！！ 病院に通わなくちゃいけない程度の重症だよ』

聞いて損した。美鶴は溜息をついたあと、言葉を紡いだ。

「今此処でいう台詞か？ そんな情報あったって意味ねえーじゃん！！ どう活用しろと!？」

『よっ、ロリコンって言えば頭に血が昇って判断ミスするかも?』
「ありえないな。しかも語尾に疑問符つけたよな、さっきッ」

由佳里の近くで文蔵が盛大に溜息をつく音が通信に紛れる。美鶴も呆れてしまった。

なんとも気の抜けた状態で、敵の騎士を見据える。

「よし、準備は出来たか。おっと、一つ名乗っておこう。オレの騎士であるこの子は、戦猿いざりって名だ。イザリンと呼べッ」

「『『断固拒否ッ!!』』」

美鶴はデスサイズを構え、跳躍した。踏みつけたアスファルトが碎ける。一気に目の前のビル三階まで跳び、袈裟切りを繰り出した。それに伴い『引き剥デイスコネクターがすもの』、射程距離を持つ斬撃を放つ。

少女が立っていたコンクリの床が粉碎し、あたりに石片や粉塵を撒き散らした。

始めから全力でいかなければ、きっと負けるだろう。相手があの血塗れのブラドもっもっなら尚一層のことだ。

視線の先で濛々もっもっと立ちこむ白煙を水平に分断して、ハルバードが横薙ぎされた。咄嗟に美鶴はデスサイズで刃を受け止める。右半身に衝撃が走り、鎌錐の機体が左方向に吹き飛ばされる。凄まじいりよく膂力だ。美鶴は空中で態勢を建て直し、壁が崩れ吹き曝しになった廃墟ビル二階に飛び込む。並べられていた机を押しつけ、鎌錐が静止する。

「あの見た目でこんな莫迦力かよ」

既に人目を引く朱い外套コート姿は見当たらない。視界に表示されたカーソルはどれも停止したまま身動きをしていない。

『下方より飛翔体接近ッ、構えて』

由佳里が敵の動きを探り、指示を飛ばす。美鶴はそれに従い、デスサイスを構えつつバックステップをとった。途端、寸前まで鎌錐が立っていた床が突き破られる。コンクリの破片が吹き飛び、穴から大破した騎士が飛び出す。

「なッ、こいつらデッドラインの騎士!?!」

『後方より高速接近中ッ!! そっちが戦猿いざりだよッ』

こいつらは単なる囃か。にしても動きが早すぎる。敵はこいつらを投げ飛ばして、ほぼ同時にビルを跳び上がってきていた。それに騎士を打ち上げて、コンクリの床を抜くとは。

改めてその怪力に舌を巻いた。

美鶴は上半身を捻り、右腕を大きく佩いた。デスサイス紙一重で戦猿は跳躍してかわし、天井を蹴り飛ばして跳ね返る。手にはハルバードが握られ、槍の穂先が向けられていた。

「脆弱になったなッ、アギトッ!!」

「俺は三ノ瀬 美鶴だ。それは俺の名前じゃないッ!! その名で俺を呼ぶんじゃないよ」

美鶴は後ろに跳んだ。目の前でハルバードが床を陥没させ、崩壊させた。

ふいに訪れる浮遊感。

「まずッ……飛ぶぞ由佳里ッ」
『了解ッ』

ブースター
加速機を起動、背中に四枚の光翅が生え、世界が引き伸ばされた映像になる。落下する瓦礫の中から抜け出し、道路を挟んで反対のビルの前まで飛ぶ。錆びて赤褐色に染まった車両の上に着地し、ぐしゃりと車を押し潰した。

「くそ、捕捉できねえッ。由佳里ッ、奴の居場所は分かるか？」

戦猿の動きの俊敏さに鎌錐の捕捉機能が完全に遅れをとっていた。カーソルが表示されたときにはすぐ目の前に迫られている。このままだと防衛一方になってしまう。

『難しいね。送られてくるデータじゃ後手になっちゃうよ』

由佳里が悔しげに齒軋りした。向こうでも必死に打開策を考えてくれているのだろう。

手っ取り早い解決法なら無きにしも非ずだ。

相手がこちらよりも数段捷い^{はや}のなら、こちらは相手よりも手数を増やすだけだ。

「由佳里ッ、副兵装を展開する」

『えッ、使用しちゃうの？——おい美鶴、一つ聞きたい。あやつは蛇か？』

「使わせてくれ。あいつは創世^{ボレアース}の蛇の一人、元序列八七番のランカーだ。その頃の異名は《血霧の殺戮人鬼》だった。赤をトレンドカラーにしていた奴だ。昔の愛用の騎士はもっと大人の女性型だったは

ずだけど、趣味が悪化したみたいだ。ちよいと、本気でいかないとヤバそうだ」

『仕方がない。おい由佳里、ロック解除するんだ——了解だよ』

美鶴の視界に施錠解除アンロックの表示が現れ、副兵装の使用が許可される。多くの騎士には主兵装とは別に複数の兵器が常備されている。鎌錐に搭載されているのは、デスサイスとは別に一種類だけ。遠隔思考操作型兵器と呼ばれる小型兵器だ。

「副兵装展開ッ、フアングッ!!」

鎌錐の背部から計八つの小さな漏斗型の金属製飛翔体が射出され、音もなく浮遊し四方八方に展開する。同時に美鶴は陶酔感のような意識が気化する感覚になる。一度に複数の映像や、あらゆる角度から見た敵の状態、位置情報が頭に流れ込んでくる。

思考操作型小型兵器、フアング・ビット。全自動行動ではなく、無線で操者の思考を読み取り、行動をとる。使用には非常に精神面での疲労がある。騎士の擬似脳による脳機能の使用拡張がなければ、思考の処理が追いつかないだろう。尚かつ美鶴の場合は、一度に八機も操作している。その事実は非現実的な数値だろう。

周囲に展開させたフアングが高速で疾駆するブラドを視認する。その位置情報を美鶴に送信する。同時に由佳里側にも情報が送信されている。

『八時の方向、ビル四階だよッ』

由佳里が驚きの色を濃くして声を上げた。当たり前の反応だろう。気付かぬ合間に背後まで回りこまれていた。

「いけッ、フアングッ!!」

ビットの後部にプラズマエンジンを点火させ加速。思考に忠実に飛翔体が滑空していく。その先にはブロンドの髪をなびかせた少女の騎士がいた。

「そんな子供騙しはきかせえーぞッ」

ビットに気付いたブラドが、ハルバードで空間を薙ぎ払う。

それを生き物めいた動きで華麗に回避して、飛翔体は距離を詰める。漏斗型の飛翔体の頭頂部は鋭角な刃が突出している。展開中には高熱を発し、鋼鉄さえ溶断することが可能だ。

「くそッ、思考遠隔操作かよッ。けどなッ」

ブラドは人間では到底不可能な距離を後ろ向きに跳んだ。あれが騎士であると理解していても、少女の形での所業のために美鶴は違和感を拭いきれない。

まるで本物の人間が戦斧を持って、軽々と飛び回るように見える。そのまま危なげなく道路の上に着地をしてみせた。あそこまで自然な動作が出来るには、相当な同調率も必要だ。九〇台前半の数値は叩き出していることだろう。

「シシッ、目障りだよッ!!」

戦猿が上半身を捻り、ハルバードを佩いた。逆巻く風を起こして刃が線を引いた。避けそびれた飛翔体が二つに断割、スパークを撒き散らして撃墜する。

くそ、同時に八つは少し無理があったか。早くも一つを失った。美鶴は悔しそうに呻くも、気を取り直し集中する。動揺すればフアングの動きが雑になり、格好の標的となってしまう。このまま一

一つ一つ破壊される前に、数で勝っているうちに勝負を決めておきたい。

『君ッ、大丈夫なの？　あまり無理に操作すると戻ったときの反動が大きくなるよ』

「ああ、大丈夫だ。これで終わりにさせる」

美鶴は深呼吸した。実際には出来ないが、不思議と気持ちちが落ち着く。

——1、2、3、4、5、6、7、これで終わってくれッ。

美鶴は残りの七つを同時に操作しながら、鎌錐を跳躍させ一気に戦猿に詰め寄った。

デスサイスを最大まで展開し大剣に変え、戦猿に肉薄する。四方からファングを接近させ、回避不可能な攻撃陣を生む。

「終わりだッ、ブラド!!」

『危ないッ、回避行動を取ってッ!!』

少女の形をした騎士の赤い外套から取り出された球体が、鎌錐との間に転がった。爆発音響閃光弾だ、と理解したときには視界が白濁し、炸裂音が空間を満たした。

『後ろに跳んでッ!!』

悲鳴に近い叫喚が頭に響き、考えるより先に動いた。踏み堪えて無理に慣性力を殺して、後ろ向きに跳躍。直後、右腕に電流が走るような疼痛が発せられた。美鶴は錆び付いた車両の横腹に突っ込み、鎌錐は停止した。

次第に光が消え、世界が灰色に戻る。

ジジッ、と不快な音が上がり、右腕を見れば二の腕から先が見事に消失していた。鋭利な刃で切断された断面は放電を繰り返した。視界に右腕部破損の図示が点滅している。

顔を上げれば、五〇メートル前方にアスファルトに突き刺さる形で、デスサイズが存在していた。その周囲には複数の残骸が乱雑される。

「くそッ、やられた。ファングも全機破壊されたッ」

美鶴は悪態をついて、立ち上がった。状況はかなり切迫していた。鎌錐の主兵装も副兵装も破壊された。

「顎^{アギト}、やっぱし脆弱になったなッ!! カカカツ」

哄笑が響き渡る。閑散とした廃墟の交差点の中央で、真っ赤な少女は踊るように舞う。

『大丈夫? 君ッ』

由佳里の心配そうな声が響くが、美鶴は大丈夫だと言った。強がったわけじゃない。ここで負けることは許されていない。

「まだ、まだだ。俺は守らなければいけないんだ。それが償いだろ」
『……………お前さんは莫迦だ』

文蔵が寂しく呟いた。

血塗れた少女と蠅のワルツ（後書き）

そろそろ物語は後半、終盤ですね、きっと。
あんまし伏線を回収出来てないんですけどね。

蠟の翼じゃ羽ばたけない

状況は切羽詰っているが、絶体絶命じゃない。まだ、まだ可能性は残されている。

美鶴は軋む鎌錐の機体の体勢を建て直した。幸い加速機は破損せず、熱暴走も起こしていない。視線の先、距離計が戦猿との距離を五〇メートルと示す。

戦猿はデスサイスの周囲を軽やかなステップで舞っていた。ハルバードがアスファルトを切削し、舗装路に円を刻む。

「もう勝負あったろ？ 美鶴、おめえじゃ無理だ。今のお前じゃ俺には勝てねえーよ。もう少し歯ごたえがあると思ったんだがな。やつぱし牙は抜かれたんだな」

ブラドが遊びに飽きたように肩をすくめた。

「まだ鎌錐は死んじやいねえよッ。勝手に勝敗を決めんなよブラドッ」

美鶴は吼えた。残された手段は一つだけだ。主兵装が残されていれば、まだ他にも手札があったのだが。この失敗は許されないだろう。

「由佳里、あとで鎌錐の整備頼むッ」

美鶴は少女に猛進した。少女は眦を大きく開いたが、すぐに嘲笑を浮かべた。すぐさまハルバードを振りかざそうと身構える。

『君は馬鹿なの！？ 無謀だッ』

由佳里の警告に従わずに、加速機ブースターを起動させた。空気を震わす羽音が唸り、冷却機ラジエーターの稼働音が大きくなる。美鶴は力強く踏み込んだ。

「うらあああああッ!!」

ブースターによる超加速。瞬時に世界の輪郭がぼやける。不鮮明な世界が後ろに流れていく。

それでも目の前にある少女の顔だけは、はっきりと映った。憐れだとも言いたげな表情をしていた。ふざけるな、自虐になったわけじゃない。

「血迷ったかッ、アギトッ!!」

憫笑を向けてくる少女に美鶴は止まらずに跳躍した。斜め左から戦斧の刃が振り下ろされるのが視界の隅に映った。避ける動作は採らずに距離を詰める。ハルバードの一撃を受ければ、鎌錐は高確率で大破させられるだろう。だがそれでも。

「――終わりだな、アギトッ。キシッ、ジ・エンドだ」

美鶴は、振り下ろされたハルバードを故意に鎌錐の身体で受け止めた。絶叫のような金属音が響く。金属片と共に火花とスパークが散り、左脇腹に深々と刃が食い込んだ。全身に激甚の衝撃が走る。騎士の身体での出来事であるにもかかわらず、美鶴は自身の身が挟まれたような痛みを感じた。今現在の同調率はきつと限りなく100%に近づいている。より鮮明な世界の認識は、より正確な痛覚の認識も生んだ。

「かはあッ。お……: 終わりはお前の方だ、ブラドッ。……: 流石にゼ

口距離は回避できねえよな」

美鶴は背部から二つの飛翔体を射出した。副兵装、遠隔思考操作^{フアング・ビット}型兵器。これが最後だ。

「くそッ、まだ残してたのかッ」

ブラドが憎々しげに表情を強ばらせた。ハルバードを片手に回避動作を採ったが虚しく、フアングの刃は少女の身体を貫通した。戦猿の手からハルバードが離れ、身体は宙を舞ってビルコンクリの柱に叩きつけられる。柱に亀裂が走り、少女はフアングの刃によって、地上六メートルの地点に串刺し状態で静止した。

「キャキャキャ、こいつは一本取られた」

奇声あげてけたたましく笑う少女。

この闘いの勝敗は両者共に戦闘不能の相子^{ドロイ}であろう。美鶴は現状の確認を急いだ。

戦猿^{いざり}はあの状態を見る限り、身動きは取れなさそうだ。鎌錐に至っては全武装を失い、戦う術からない。それに腹部に受けた斬撃による損傷で下半身の動きが不可能だ。

頭上には雲ひとつない晴天が広がっている。同調率が低下しているのか、感覚が鈍くなる。ほとんど痛みを感じることはなくなっている。

とりあえず依頼は終了したことで構わないだろう。さて、どうやって帰還するか。

「牢獄から逃げ出し、太陽を目指したイカロスの話を知っているよな」

突然にブラドが話し始めた。何が言いたいのだろうか。その話なら知っている。蠟で固めた羽で空を飛んだイカロスが太陽の熱で蠟が溶け出し、落下するという話だった。

「イカロスが空を飛んだこと自体、不可能なとき。人間の胸筋では羽ばたくことは出来ねえだろうが。シシッ、それにな、蠟が溶け出す温度だったらイカロスが先に火傷しちまうだろ。イカロスって奴は莫迦か、超人だな」

「あんたは何が言いたいんだよ」

「——イカロスが飛ぶことを出来たとして、結局は死んだ。じゃあその原因は準備不足か？ 違うだろ。奴の死因は己の慢心だ。愉悦に浸り、空高く飛んだ時点でイカロスは死んだんだよ。つまりだ美鶴。お前は俺を倒せると思っていたんだろうが、残念ながらこの場所に来た時点でお前の負けだ。決闘なんてな、お前を連れ出すための方便さ。まあ楽しかったけどな」

『君ッ……助け……騎士が突然………竹ちゃんが……きやあッ………』

ノイズの音が大きくなった通信越しに、由佳里の悲鳴や切羽詰まった声が漏れた。ガラスが碎ける澄んだ破碎音も混じる。やられた。美鶴の頭の中が一瞬で真っ白になった。

「おい由佳里ッ！！ どうしたんだよ、おいッ」

「そろそろ時間だからな。通信妨碍ジャミング がかかったか」

ブラドがさも愉快そうに笑い、戦猿の口元が歪められる。

「じゃあな、アギト。いや美鶴だったな。カカカツ、これはお前が招いた災厄さ——」

ふいに糸が切れたように戦猿が力無くうなだれた。由佳里との通信が全く繋がらず、痛いほどの静寂が残される。

「強制送還シャットアウトかつ、くそ命知らずの快樂犯がッ」

強制送還の機能は精神帰還よりも危険性が高く使用は禁止されている。現在のほとんどの騎士には使用できない規制がかけられている。美鶴はもはや動かない脚を何とか動かそうと躍起になった。微動だにしない脚部。

焦る気持ちが募っていく。

日が暮れるまでにはまだ時間が残されている。天辺を越えた太陽がじれったく美鶴を照らした。この事態を打開する方法はないのか。

——由佳里ッ。

狼は少女を喰らう

美鶴がブラドとの戦闘を終えた丁度その頃。ジャミングがかかる数分前。

遠く離れたボロアパート《白夢荘》で由佳里は、ぐっと伸びをした。

「竹ちゃん、彼を迎えに行かないと駄目みたい。鎌錐が大破しちゃって身動きが取れないみたいだよ」

通信端末に表示された情報が、騎士の破損状況を伝えていた。画面を見ただけで頭痛がする状態だ。修理するには、柴川重工の研究棟に持ち込まないと駄目そうだ。

「やれやれ、厄介だな。もしこのタイミングを狙われたらお仕舞いだろうに」

げんなりした文蔵が重い腰を上げた。文蔵と由佳里と機械は揃って、美鶴の部屋で待機していた。転送装置を挟んで窓際に由佳里が座り、文蔵は卓袱台の傍に腰掛けている。このまま何事もなく終わって欲しい。由佳里はそう願った。

「それじゃあ、どうするか。心配じゃから、組合の連中にも連絡して代わりに行ってもらうか」

「そうだね。そのほうがいいと思うよ。それじゃあその旨を伝えておこ——」

「由佳里ッ、伏せるんだッ!!」

文蔵の怒声が響き突然、由佳里の背後で部屋の窓が粉碎した。細

かなガラスの欠片が飛ぶ。頭上からガラス片が降りかかった。由佳里は悲鳴を上げて、しゃがみ込んだ。由佳里の横を駆け抜けて、アレキサンダーが窓辺に突進した。

由佳里が振り向いた先には一体の騎士がいた。両腕の先から伸びる長剣が目をついた。あれは知っている。あれは命を奪う怪物だ。過去の記憶が蘇る。

由佳里は恐怖に唇を震わせた。身体が固まってしまい動けない。まるで石像にでもなったかのようなだ。

視線の先ではアレキサンダーと侵入者が取っ組み合っている。ふいに腕を強い力で引っ張られた。

「由佳里ッ、お前さんは離れているッ」

文蔵が片手に操作作用携帯ゲーム機を持ち、その背後に由佳里を隠した。

『まーたく、あんた誰？ 俺はさあ、その子に用があるわけだよ。アギトにも言いたいことあるんだけどさ。とりあえず時間がないんだなこれが。というわけでその子、博士の娘である羽城由佳里の身柄を渡してもらおうか』

目の前の騎士がアレキサンダーを振り払い、迫ってきた。どうして目的が美鶴の本体ではないのだろうか。由佳里はずるずると後ずさった。

「由佳里、逃げるんだッ。こやつが目的をおぬしといったんだ。早く逃げろッ」

文蔵がロボットを再起動させ、敵の動きを封じようとした。

『目ざわりだつてッ』

それを軽くあしらい、騎士は距離を縮めてくる。由佳里は懷にあったスパナを力任せに投げつけ、出口に走った。逃げながら美鶴へ通信を入れた。

「君ッ、聞こえる？ 助けてッ騎士が突然やって来たの。竹ちゃんが今、きゃあッ……………」

『おい……里ッ！！ どう……んだよ、……ッ』

由佳里の目の前に、もぎ取られた機械の腕が飛翔した。アレキサンダーの右腕部だ。

「由佳里、待てッ。止まるんだッ！！」

由佳里はドアを開け放った。途端、目の前に騎士がいた。両腕から伸びる長剣が首筋に突きつけられる。

『はい、残念でしたッ』

「美鶴助けて……」

いづぶりだろうか、この口からこの名前が出たのは。同時にある感情が大きくなった。いつしかこの胸の大半を彼が占めていた。今までの日常に甘えて、先延ばしにしていた感情。今更に後悔した。

非情な現実には情け容赦なく、少女の日常を奪う。

少年は少女を守るために騎士となった

「どうすればいいんだッ。何か、何か方法は……」

美鶴は闇雲に鎌錐を動かし、ひび割れた舗装路の上でもがいていた。パニックに陥っていたとも言える。事態の解決方法がいつこうに思い浮かばない。今こうしている間にも、由佳里や文蔵は死地に立たされているのかもしれないのだ、早急に駆けつけたいという気持ち之急ぐ。脚部さえ動いてくれたなら、今すぐにも向かうことが出来ただろう。

周囲を廃墟で囲まれた空間。修理の道具など望める筈はなく、美鶴自信その手の技能を身につけてはいなかった。たとえそれらがあっても、直すには相応の時間が必要だろう。ほんの数分では到底修理出来はしない。そして、一つ重大な事実が美鶴をさらに切迫させていた。

『活動限界Ⅱ燃料残量低下Ⅱ9”45』

鎌錐が受けた損傷部より電力の漏洩が生じ、騎士の活動限界が近づいていた。視界の隅でカウントダウンが進んでいる。数値がゼロに達した時、騎士に設けられた生命維持機能が発動し、騎士の活動停止が起こる。言うなれば冬眠状態だ。それが長期に及べば、精神^{リベ}回帰^{イベル}によって肉体に精神は戻る。だが、それではあまりに遅すぎた。

「どうすればいい、どうすれば。何もないのか、何も……。——いや、あったッ」

そうだ、あるじゃないか。今この場において可能な方法があった。美鶴は残された左腕でアスファルトの上を這った。金切り声を上げる機体、もはや飾りと化した脚部を引きずって数十メートルを進む。その間にも、活動限界タイムミリットが近づいている。

何とか目的に到達すれば、残り5”^{デスサイズ}12。

十分だ。美鶴は目の前で蒼天を指す大剣を見つめ、その周囲に散らばったファングの残骸に視線を落とした。その中から適したものを見繕う。生命維持機能が作動する前に精神を戻せばいい、それが最も最良の方法ではないか。副作用など気にしない。美鶴は鎌錐の左手を操り、しかとその手にファングを握った。

そして、ままよと切り開かれた左脇腹に突き立てた。それで終わらず、引き抜いては突き刺し、引き抜いては突き刺す動作を連続的に繰り返す。

——残り時間、1”25。

突き刺したファングの基底を何度も叩いた。お願いだ、美鶴は渾身の一撃を加えた。ドンツと全身に衝撃が走り、けたたましくアラートが叫喚した。警報はバッテリーの破損を知らせていた。著しい電力の漏洩が発生し、騎士は緊急機能を作動させる。美鶴は自身の身体が一気に引き伸ばされ、螺旋を描くような不快感に投げ出された。目の前の景色が灰色一色の不鮮明な存在になり、自分自身の認識が曖昧になる。グチャグチャに混ぜ合わさる世界。

少年は虚無の中をもがいた。高速で回転する世界は、転じて真っ暗闇に染まった。

——ここはどこだ。俺は誰だ？

同時刻、込み上げてくる吐き気で一人の少年は飛び起きた。頭部をカプセルの蓋に強打し、痛みに呻吟しながら何とか中から這い出る。世界が歪んでいた。その場に直立出来ず、壁に倒れ込む。まるで酷く泥酔したかのようだ。視界に映る情景は常に揺れ、蠢いていた。少年はその場にうずくまり、吐き気を嘔下しようとして身悶えた。頭痛が酷い、頭が割れそうだ。

そこで少年は気づいた。部屋に散乱するこれは何だ。細かい硝子ガラス片が畳を覆っていた。口元を押さえ、喉の奥の酸味を堪えて部屋を見渡せば、眸に映った惨状。

想像するに此処の住人は死んだか、連れ去られたのだろう。窓枠は内側にひしゃげ、何者かの侵入を示していた。散らばる機械の部品が戦闘を物語っていた。

……ッ。

少年は突如、強烈な既視感デジャヴを覚えた。知っている。この部屋を自分
分は知っている。

何故、何故何故何故何故、——ああそうだ。

「ここは……俺の部屋だ」

美鶴は思い出した。よろめき、足がもつれながらもドアを目指した。そうだ、こんなところにいるべきじゃない。酔っ払いのようにおぼつかない足取りで急いだ。途中、たたらを踏んで転ぶ。それでも痛みを堪え、すぐに立ち上がり壁伝いに進んだ。ドアの前までたどり着き、転がされている機械の腕を跨いだ。

——俺は誰だ？ 俺は三ノ瀬美鶴だ。1＋1＝2。高校二年。一七歳。何をしようとしていた？ 幼なじみを、由佳里を助けるんだろ。

だから此処にいるんだろッ。

恐ろしかった。危うく、目的を忘れるところだった。由佳里を忘れるところだった。

美鶴は勢い良くドアを開け放ち、外に飛び出した。視界いっぱいには広がった街並み。頬を撫でる冷気を含んだ風。休日のアパートには他の住人は戻っておらず、周辺にも人通りがない。それが幸いしてか怪我人はいなそうだ。でも二人はどうなったのか。

——どこに行っただよ。由佳里、オヤっさんッ。

外気に触れて次第に意識が鮮明になり、美鶴は周囲を見渡した。どこにいるんだよ、どこに。部屋の惨状を思い返せば、血が引いてしまう。最悪の場合を考えてしまう。

アパート二階から見下ろした通りには、幸いにも舗装路の上に点在する金属片がその行方を示していた。

「向こうかッ。二人とも無事でいてくれッ」

美鶴は階段を転げるように降り、その方向へと走った。

相変わらず人通りのない、路が続いていた。いつもと変らない街並みで、美鶴の視線はある一点に釘付けにされた。

一〇〇メートル近く離れた場所に何かがいた。住宅街の通りで太陽に照らされて濃くなるシルエット。美鶴は戦慄し、鳥肌が立った。遠目からでも分かる。あれは奴だ、——銀狼。

右腕部が根刮ぎもがれ、腹部に貫通した穴があいたアレキサンダーが決死の攻防をみせていた。銀狼に掴みかかり、その動きを抑えようとしている。そして文蔵の背後に守られるように由佳里がアスファルトの上に座り込んでいた。良かった、無事だったのか。どう

かこのまま間に合ってくれ、と祈った。

美鶴は走りながら右腕の主兵装ソニックブレードを展開させる。空気を震わす金属音が響き始める。

由佳里が音に気づき、振り返った。その顔が酷く怯えた色に染まっていた。かつて薄紅色であったろう唇は青紫に変わり、双眸が恐怖に見開かれている。

——やっぱり、由佳里はまだ忘れられてないんだな。

美鶴は腹の底が急に冷たくなった気がした。それでも足は一層速めた。自分がしなければならぬことは、由佳里を守ることだ。だから止まるな、怖れるなと自分自身を無理やり鼓舞した。

美鶴の姿を視認した由佳里は安堵したように、表情を和らげた。くしゃつと顔を歪め、殆ど泣いている顔になる。文蔵が驚愕に目を瞠った。美鶴は一息で一〇〇メートル近くを疾走した。

「消えろッ、銀狼ッ!!」

美鶴は一気に跳躍して、アレキサンダーの脇から潜り込む形で乱入し、右腕を水平に薙ぎ払った。銀狼はそれを後ろに跳んでかわした。手応えなくヒュオンと風切り音が鳴る。銀狼の顔造りは言うなれば犬。鋭く長大な犬歯が刃の如く剥き出され、両腕は手の代わり長剣が生えている。身に纏う衣類はなく、晒された金属フォームが鋭利な刃物のようである。全長は一八〇センチ程度だろう。

あれが銀狼、美鶴の怨敵であり、過去の柵しがらみだ。

『んだよ、ひっでー面だなアギト。一度死んだみてえじゃん。そんなにでないしように考えてんの?』

銀狼から嘲りの言葉が漏れる。この操者はやはり蛇か。

「守り通すだけだ。まさか骨が操者^{オステオ}なんてな。何でここにいる。何故、アパートに来たんだよ」

『ここが廃墟になる前に博士を攫って行く計画何だけどな。あの人は地下に潜ってるだろ？ 手っ取り早く娘を人質にすればいいかな、なんてな。てかその爺さんといい、お前といい、いい加減目障りだから消えろよ。邪魔すんなよ』

「……なるほどな。残念だけどな、お前らの思惑通りに運ばせない。由佳里は連れて行かせない」

美鶴は刃先を銀狼に向けて構えた。リーチの長さは劣るが、切断力は上回っている筈だ。両者の間を風が吹き抜ける。この場に役者は揃った。

美鶴は鼓動が早鐘を打ち、ドツと脂汗が溢れていた。

『これだから最近の子供はゆとりだって言われんだよ。学校で習わなかったか？ 命は無駄にするなって。なあ、アギト』

オステオがクックツと押し殺した笑いを零した。銀狼の口端がつまり上がり、不吉な形相を作った。

「オヤっさん、由佳里を連れて離れろ。こいつは、俺が破壊する」

「無茶しおって、莫迦が。だが助かった。おぬしがあと僅かでも遅ければ、守りきれなかった。由佳里のことは任せろ」

文造が由佳里を立ち上がらせた。由佳里は見るからに崩れそうだが、どうか無事に逃げ果せてほしい。美鶴は視線を銀狼に戻した。どう銀狼に攻めれば効果的だろうか。失敗は許されない、失敗は死に直結する。

突如、逡巡する美鶴の横を風を纏って、アレキサンダーが果敢に

銀狼に猛進した。よくもまあ動けるものだ、空回り気味のモーター音が後に残される。振り向けば文造が時間片手でコントローラーを操っていた。

「アレキササンダーの最期は勝利で飾らせろッ、美鶴」

文造の声に背を押され、美鶴も死にかけのアンドロイドの広い背中を追う。

『雑魚がいくら集まっても……意味がないってッ』

銀狼が両腕を交差して振り上げ、一気に振り下ろした。交叉した斬撃が線を描き、アンドロイドの体を碎いて火花を飛び散らせた。その光に一瞬目が眩む。

美鶴は前のめりに倒れたアレキササンダーの背後から飛び出した。絶好の死角から右腕を前に突き出した。銀狼は咄嗟に身を捻り、刃を避けた。驚異の反射神経だ。美鶴はさあーと頭の血が引く感覚がした。

世界が酷く遅く流れる。

銀狼が醜く顔を歪めた。狂気に満ちた表情、破壊の快楽に溺れた顔。

袈裟の一撃が迫る。美鶴は咄嗟に右腕を身体との間に割り込んだ。スパークが飛び、火花が跳ねる。バキッと破碎音が響き、視線の先で右腕がひしゃげる。関節がありえない方向に曲がった。ソニックブレイドの振動が止まり、美鶴の右腕はグロテスクなアートのような状態になった。衝撃に耐え切れず、美鶴はその場に倒れ伏す。万事休すだ、そう思って疑わないう状況だった。銀狼の容赦ない一撃が美鶴へと繰り出されようとした。

『せんぱいから、離れてくださいッ!!』

聞き覚えある少女の声が大音響で空気を震わした。オステオもふいを突かれたのか、銀狼の動きが止まる。その隙に美鶴は地面を転がって、距離を採った。丁度入れ替わるように、美鶴のいた場所に一体の騎士が降り立った。両手に抜き放った太刀を握り、銀狼に振りかざす二刀流の騎士。銀狼はそれを剣で受け止め、鏢迫り合いになる。

銀狼と対峙する騎士。その頭部は爬虫類のようであり、軀は中世の甲冑を纏っているような気品ある形状だ。相反するように背中に龍の一字が豪然と描かれていた。

「龍王ということは、おのぎきか。ナイスタイミングだな」

『全く、とんだ拾いもんね。ちよつと文蔵さんに挨拶して行こうかと立ち寄ったら、何この状況？』

どこかで聞いた覚えのある声であった。おのぎきとはまさか、小埜崎か。

『先輩ッ、大丈夫ですか!?!』

外部スピーカーより突如流れた声で氷解した。確かに瑠璃の声だった。

つまりこの騎士が小埜崎叶望おのぎき かのんの専用騎か。そして名を龍王。

「小埜崎さん、助かりました」

美鶴は立ち上がり、右腕を肉体との連結部から切り離した。落下して金属音が響く。もはや使い物にならないため、あっても邪魔にしかない。多少、平衡感覚にズレが生じるが時間の問題だろう。

『この状況だと、知らなそうだね』

小埜崎が銀狼と凌ぎ合いを続けながら、話し出した。

『今現在、首都圏《エリア2》全ランカーに緊急事態宣言が出されてる。エリア2にプレデターが大量に侵入し、外周区は壊滅的被害。既に侵入したのは一〇〇機以上。第一門扉方式通路は常に開門された状態で、常になだれ込んでいるみたい。ジャミングによって他のエリアとの通信が途絶されて救援は望めず、首都圏内のランカーに要請がかかり、あたしにも呼びがあった訳だけど、既に到達したランカーは多くが大破したみたい』

「なんじゃと!？」 プレデターが侵入？ だが奴らには満足な武器が残っておるのか。まさか騎士が十年近くの遺物に負けているのかッ」

文蔵の驚きはもっともだ。この一〇年近くを無事に生き残っているプレデターは、多くが人にとっては依然脅威を誇るが、騎士の機動性は遥かにそれを凌駕したはずだ。何故、先遣したランカーが壊滅させられたのか。

『んなの、決まってんじゃん。どこぞの骨かも知れないランカーが、ウルに敵うはずがないだろ。依頼が完了するまで、ゲートは封鎖させないって』

銀狼が龍王の軀体^{くたい}を弾いた。ザザアアアッ、と足裏を路面に擦過させて龍王は踏みとどまった。すぐさま太刀を構え直し、臨戦態勢をとる。

——ウルといったのか。では神鳴がゲートを守っているのか。どおりで先遣したランカーがやられたわけだ。

『邪魔くせーから。全員ぶっ壊すしかねえよな。あんま時間がないんだわ、こっちには』

『なんつうーか莫迦力だね。まさか龍王が単純に力負けするなんてね』

おのざきが驚愕の声を上げ、オステオは猛々しく剣を掲げた。

戦局はオステオに有利に動いている。誰の顔にも敗色が濃く見える。それでも負けることは許されていない。

「オステオッ、銀狼の兵装には手を加えてないのか？」

美鶴の問いかけに氣勢を削がれて舌打ちするオステオ。銀狼が忌々しげに睨みを利かせる。

『そうだなあ。ロック解除は出来ねえから、使いもんにならねえし、取り外すのも一筋縄じゃいかねえからな』

「つまり、昔のままか」

由佳里を守ろうと誓ったのは二年前だった。このままでは銀狼を倒せず、首都圏はプレデターによって壊滅し、由佳里を守れはしないだろう。ゲート封鎖を妨害しているのが神鳴ならば、接近出来はしない。ゲートに近づけない訳がある。必要なのは強力な遠距離用武器だ。大切な人を守りたいと思う。たとえ相手に恐れられていても、それでもなお守りたい。

——だから。

『何が言いたんだよアギトッ。延命措置のつもりか？ 俺の気を逸らすつもりか？』

「オステオ——」

「ッ！？」 美鶴よせッ。やめろッ！！」

文造が慌てふためく。美鶴は一心に銀狼を凝視した。陶醉感が忍び寄る。ちりちりと肌が焼けていく感覚。きつと今の眸の色は漆黒から琥珀に変わっているだろう。

『まさか、まさか、お前ッ』

「——その場所を俺に譲れッ」

オーバーダイフンシステム
精神直接転送機構。

美鶴を含めた数名、世界中でも一〇人に満たないだろう能力。転送装置なしで騎士に精神を移す方法だ。脳に埋め込まれたニューロチップを媒介としてやり取りを行う技術である。

美鶴はまるで肉体ごと銀狼に吸い込まれるような恐怖を感じた。秒速で近づく銀狼の頭部の擬似脳に飛び込んだ。二つの相反する精神が絢い交ぜになる。

『馬鹿だろお前ッ。首輪無しでどうやって奪うつもりだよ』

『オステオ、調子に乗るなよ。俺とあんたじゃ出来が違うだろ。首輪はあくまで安全装置だ。個々の能力には関係ない』

『あははははッ、死ぬ気かよ。ほんっと莫迦だよアギトッ。みすみす命を散らすなんて——』

美鶴の中から、オステオの存在が消える。強制的に相手の精神をリバースさせたのだ。今頃、先ほど美鶴が味わったような吐き気を味わっていることだろう。

美鶴は完全に銀狼を支配下においた。

『懐かしい感じだ。久しぶりだな』

目の前には由佳里に抱き止められている自分がいた。気を失って

いるようにぐったりしている。由佳里は何が起きたか理解出来ずに目を白黒させていた。おのざきも判断に困ったようで、太刀の剣先を泳がせている。文造は苦虫を噛んだ苦渋に歪めた表情をしていた。

『中の人は美鶴君なのかな？——先輩なんですか！？』

おどろおどろしくおのざきが、度肝を抜かれたように瑠璃が尋ねた。

『三ノ瀬美鶴です。俺が完全に銀狼を支配下に置きました』

『君はいったい何者なんだい？ さっきまでの操者は？』

美鶴は少し時間をおいた。これを言えば、終わりがもしれないな。

『先ほどもでの操者だったのは、創世ボレアースの蛇のメンバーの一人です。強制的にリバースさせました。そして、——元創世ボレアースの蛇の執行者アギト。それが俺です』

少年は少女を守るために騎士となった（後書き）

気分転換に始めたこっちに専念しているような……。
まあ、気ままな更新で頑張ります。はい。

グッバイ、ナイト

『それが銀狼で、どうして操者が蛇だったのかな。確か蛇は皆、ライセンスを剥奪された筈じゃなかったかな?』

「違うぞ小埜崎。確かにライセンスを剥奪された者もいたが、全員というわけでもなかった。問題視され、危険だと判断されたランカーの多くが蛇であったというだけで、当時は警察側も国際ランカー管理機構も蛇のメンバーを把握出来てはおらんかった。

過去の殲滅作戦において確認された騎士、捕縛した操者よりメンバーを割り出していったんだ。つまり、その場になかった騎士、居なかった操者については未だに把握出来ていないものもいるんだ。実際、死者、捕縛者、確認出来た者を含めても、全メンバーの過半数程度。ごく少数だが、逃れたのもいるんだ」

文蔵が小埜崎の質問に答えた。

『それが銀狼とその操者ってわけですか』

美鶴は龍王から視線をずらし、座り込んでいる由佳里を見た。だいぶ顔色は良くなっているようだ。しっかりとその腕に美鶴の肉体を抱きかかえていた。言いたいことはたくさんある。もしかすれば、二度と言えなくなる言葉がある。

こんな状況になっても、美鶴はどうしようもなく小心者だった。臆病な自分に負けた。

『オヤっさん、俺の身体は任せた。小埜崎さん、急いでゲートに行こうッ』

『でもいいのかな? 君は彼女と話し合いたそうだけど。あたしとしても、わだかまりがないようにしてほしい——そうですよ先輩』

『いや、いいんです。時間がないのなら、急いでいきましょう』

後ろ髪を引かれつつ、美鶴は踵を返して外周区へと走り出す。銀狼の脚部が路面を切削し、その体軀を前へ前へと運ぶ。その後ろを龍王が追い始める。次第に暮れなずむ空が眼前に広がる街並みから、隔離壁へと向かう。

「由佳里、お前さんは別に美鶴のことを憎んではいないだろ。恐れでもないだろ」

文造が由佳里の傍らに立って見下ろす形で尋ねた。確信めいた口調。由佳里は弱々しく微笑んだ。無意識に髪を耳にかける仕草を繰り返す。

「うん、そうだね。私は美鶴を許してた」

いつの間にか抵抗なく、由佳里は美鶴の名を声に出していた。

「なのに美鶴の奴はいつまでも、由佳里に償おうとして一人抱え込んだんだ。そんな終わりでもいいのか美鶴……」

文造の言葉の最期の方は声が震え、殆ど掠れて消え入りそうになる。

「でも美鶴が戻ったら、私はちゃんと彼を許すよ。直接、告げるから」

「もしかすれば、もう美鶴は——」

文造の表情に翳りが生まれる。

言い難い不安が押し寄せ、由佳里は既に小さくなった機影に手を伸ばした。

端から赤紫が塗り重ねられていく青空が視界いっぱい広がっている。集まり始めた人混みの奥の機影。

届くことのない手は、代わりに彼の姿を隠した。

「帰ってきてよ、美鶴」

生まれ変わった破壊者

隔離壁に近づくほどに周囲に黒煙が立ち込め始める。人々の悲鳴が痛々しい。前方から絶え間なく、人々がエリア2の中央に向かって逃げていく。

外周区に存在した住宅地は火の手が上がり、燻っている様相だった。まさに阿鼻叫喚の図であろう。崩れた石塀や倒れた電柱を飛び越えて、二体の騎士は先を急いだ。

「美鶴君、どうするつもりだい。得た情報だと、先遣したランカーのどれもがゲートまでたどり着けてないらしい。行く手を阻む騎士がいるって話だったね」

「神鳴ですね。俺に打開策があります。ただし、小埜崎さんには少し無理してもらうかもしれないです」

「じゃんじゃん頼ってよ」

『そうですよ先輩。こちらは先輩のファン何ですよ。例えば火の中、水の中、宇宙にだってついていく所存ですよ。先輩に添い寝だって出来ます』

「最後のは何だ。添い寝は火、水、宇宙！？　に並ぶほど大変なものか？」

美鶴はとんでもないことを言い出す後輩に苦笑いした。こんな状況でも瑠璃は相変わらずだった。

『いや、先輩が心を許すなら簡単になります。でも先輩を攻略するのは難易度が高いですね。レベル百ですよ。——ちなみに最高レベルは一万です』

「たっかッ。俺どんだけ簡単だよ。百で考えたらレベル1じゃねーかッ。高く持ち上げて、叩き落とすなよ」

スピーカーから少女の笑い声が上がった。

『にしても、先輩が蛇の一人だったなんて。どおりでうちのセンサーが反応したわけですね』

どんなセンサーだよ、美鶴は苦笑した。にしても蛇であったと聴いて、この後輩には畏怖する感情が芽生えていないのだろうか。それが少し拍子抜けでもあった。

『一つ聴きたいんですけど。当時の先輩ってランカー序列いくつだったんですか？』

——やっぱ、気になるのか。はあ、言っているもんかね。

「当時の俺は序列四八番だったはずだ」

『四八ッ！？ 小埜崎さんでも一五七番ですよッ』

なんと小埜崎は一〇〇番台のランカーだったのか。その事実在美鶴は驚愕した。相当の騎士の使い手だ。どうやって瑠璃はそのサポーターに抜擢されたのだろうか。

「ほら瑠璃。仕事する、仕事。美鶴君も気を引き締めて」

『「了解です」』

そうこうするうちに視界にカーソルが表示される。敵だ。美鶴の目の前に蛇型プレデターが鎌首をもたげていた。

「美鶴君ッ、こっから先はプレデターもわんさか徘徊してるよ。常に周囲に気を配って」

小埜崎が美鶴から離れ、二方向よりプレデターを挟撃する。小埜崎の騎士、龍王が腰の鞘より太刀を抜き去り、二刀流の構えを採る。美鶴は銀狼の剣を突き出して猛進した。龍王の一振りが蜷局とぐろを巻いた体軀を切断し、銀狼の突きが頭部を穿うがいた。蛇型プレデターは抵抗なく、その場に崩れた。

——何かがおかしい。

美鶴は違和感を覚えた。しかしこの場において、その疑問の正体は分からなかった。

「容易いもんだね。騎士の機動性の方が断然勝ってるんだ。いくらプレデターが複雑なプログラムを組まれていようが、簡単に凌駕出来るよ」

小埜崎が足元で沈黙をする蛇型プレデターを太刀の切っ先で小突いた。

「それでも数がいると厄介ですよ。早くゲートを封鎖しないとまずいですね」

美鶴は視界に現れた複数のカーソルの対象を視認して悪態をついた。大きさがまばら、モデルタイプの異なるプレデターがいた。その数は一二体に及ぶ。向こうは既にこちらを敵として認識しているようだった。大型が機械であるにもかかわらず唸り声を上げ、先陣を切ってくる。

「仕方ない、プレデターの群れを突っ切っていこうか。瑠璃、最短ルートを割り出して」

『了解ですッ』

「それじゃあ美鶴君。とりあえず、目の前にいる奴らは一掃しよう。」

これ以上、侵攻を許す訳にはいかないからね」

「分かりました」

美鶴は跳躍して小埜崎よりも前に飛び出し、まず一体。果敢に迫ってきた大型の胴体に銀狼の右手長剣を衝き立てた。その状態のまま前方に右腕を振る。百キロ近くはあるだろう躯体くたいを投げ飛ばした。後方で様子を伺っていたプレデターのうち、二体を巻き込んで石堀に激突して粉塵を上げる。この時点でカーソルの表示が六箇所減る。いつの間にか、美鶴を追い越した龍王が両手の刀で複数のプレデターの頭部を切り落としていた。その足元に転がる残骸は既に沈黙している。

「残り、六ッ」

『小埜崎さんッ、住民がいます。近くに三人、逃げ遅れた人がいます』

切迫した様子で瑠璃からの通信が入った。龍王の外部スピーカーからより瑠璃の声が響く。

「美鶴君、まだ非難出来てない人がいる。あたしが救助に向かうから、残りは任せていい？」

「いいですよ。こいつらは任せてくださいッ」

美鶴は小埜崎と入れ違うようにプレデターに接近した。横目で龍王が黒煙の奥に消えるのを確認する。

美鶴は上半身を捻り、両腕を斜め左下に向かって振り抜いた。長剣が捉えた大型プレデターを切断せず、破碎する。

銀狼の主兵装の両腕の剣は、切れ味に優れていない。ほとんど刃は潰された形になっている。元来、銀狼は斬るではなく、穿つことを目的に造られた。

そのコンセプトは『立ち塞がる障壁を突き破り、突破する』こと。

美鶴は両腕を前に突き出し、同時に二体のプレデターを串刺しにした。人型の機械兵がその胸を貫かれて痙攣する。美鶴は両腕を左右に振って剣を引き抜いた。そして、瞬時に後ろ向きに跳んだ。さきほどまで銀狼がいた路面に弾痕が複数生まれる。残った人型一体、蛇型二体からの集中砲火だった。ドラム式弾倉の自動小銃が火を噴く。

——やっぱり、おかしい。こいつらは……最近造られた兵器だ。

美鶴はここに来て、先ほど感じた疑問の正体を知った。思えば当然の疑問だった。

プレデターは一〇年近くも昔に造られたシロモノだ。弾薬などとうの昔に使い果たしているだろう。それに破壊した奴らはどれも、見た目は汚れているが、中身はやけに真新しかった。

外側はそのままに、中身だけが入れ替えられていた。

「つまり、ボレアースに協力する莫迦な企業がいるわけだ」

どうしようもなく救われない世界だ。今回の事件を起こすために、再び大崩壊を起こすつもりなのか。美鶴は高々と飛び上がり、三角形に展開するプレデターの間に着地。すかさずその場で右回りに回転し、敵を薙ぎ払った。左からの衝撃にフレームが歪み、擦過音を上げて吹き飛ぶプレデター。路面を転がってその表面を削り、線を描いた。それで機能を停止させない機械兵は、軋む躯体を動かしてこちらに照準を合わせようとした。

「無意味だよ」

屈折した銃身で銃弾が爆ぜる。美鶴の周囲で三体のプレデターは、銃が暴発して自滅した。爆発で原型を失った残骸が散らばる。周囲を硝煙が包み、視界が霞んだ。

「さて、小埜崎さんに合流しよう」

美鶴は小埜崎が消えていった方角に向かって、銀狼を急がせた。幸い小埜崎の騎士である龍王の姿はすぐに発見した。ちょうど住民の避難に一段落がついたらしく、手を振って離れていく子供達を見送っていた。

「あの子達の命は奪わせないよ」

小埜崎の声には静かな焰が燃え上がっていた。それは怒りであった。

「急ぎましょう。小埜崎さん」

「そうだね、美鶴君。最優先は、これ以上の侵入を防ぐことだね」

『第一門扉方式通路への最短ルートは、そのまま正面に見える隔離壁へ向かったほうがいいですね。情報だと、ゲートを中心に半径2百メートル地点で多くの騎士が破壊されています。ゲートが見えたら、細心の注意をお願いします』

「了解ッ」

「そろそろ、別のランカーが来る頃か。オステオの方の首尾はどうなったもんか」

「くそッ、化モンがッ——」

グシャッ、金髪の男が片足で、悪態をついていた騎士の頭部を踏み潰した。その周囲には既に騎士の残骸が折り重なっている。数は五〇近くになるだろうか。四肢を失ったものや、腹部に穴が開いたもの。焦げ付いたものなど、さまざまであるが、不可解なことに破損していない騎士でさえ^{たお}斃れていた。

男からは常にジジッ、ジジッ、という雑音が響いている。男の背後からは絶え間なく、完全自律型兵器が圏内に侵入を続けていた。この時点で、二〇〇近くが侵入していた。

「エリア1の企業さんらは、えらく気前が良かったな。前払い金とプレデター五〇〇機を用意してくれるなんてな。まあ、彼らとしてはプレデターの危険性を再認識させるための必要悪らしいが、こいつは既に極悪行為だ」

五〇〇機のプレデターが侵入完了すれば、首都圏^{エリア2}は文字通り消えるだろう。プレデターの装備は最新式に一新されていた。機動性に劣っても、数がいれば敵はいない。立ち塞がるものを鉛の雨が洗い流すのだろう。

「タイムミリットは近づいているぞ。どうするエリア2の諸君」

暴食の怪人と少女の涙

周囲に全壊した住宅が続く景色。舗装路はいたるところで亀裂が走り、電柱は根元から折れていた。全壊した建物が連なり、周囲で立ち昇る煙が棚引いている。時折、目にする石塀や瓦礫に飛散した血は生々しかった。動かない人影が影を濃くし、血溜まりは赤々と怪しげに映る。一言に悲惨な状況だった。

『反応ありッ、二人とも止まってください』

瑠璃の警告に急停止した、美鶴と小埜崎は緊張して周囲を見渡した。すでに隔離壁の入り口が前方に視認出来ていた。ゲートに到達して、門を下ろせば作戦成功になる。だが、そうするためには半径二〇〇メートル地点での難題が待っていた。

「瑠璃、敵と思しき騎士は視認できてる。こっちには気が付いていなそうだよ。騎士との距離は二三〇ってとこだね。龍王ならこれぐらいの距離は無いに等しいでしょ」

「いや、小埜崎さん。一旦、止まったほうがいいですよ」

美鶴は、構わず前に進もうとした小埜崎の龍王を右腕で制した。

銀狼のカメラアイが、筒状の金属体を捉えていた。あれは、誘雷針だ。ほかにもゲートを囲むように点在している。

まるで地雷原のような危険地帯が形成されていた。

そのほぼ中央で佇む、金髪を風になびかせる騎士。身に纏う裾の長い漆黒のコートがはためいている。ふと徐にこちらに顔を向けた。顔全体を覆う金属製の仮面が表情を隠していた。その仮面の奥で敵が笑ったように美鶴は思った。悪寒が走り、不安な気持ちが膨れ上がる。奴に勝てるのか、そう弱腰になる自分を心の中で叱責した。

勝たなければいけないのだ、絶対。

「気付かれたね。どうする美鶴君ッ。君はアレを知ってるんだよね」
「はい。小埜崎さん、アレが神鳴です。操者はボレアースの一人。
元ランカー序列四六番の人間です。あれの兵装は雷です。誘雷針に
注意してください」

「四六番!? はあ、次元の違う人間だね。そんな超超高序列ラン
カーと戦闘行為をしたことがないけど、あたしらには負けが許され
てないんだよね。全く、にしても誘雷針か。全然気付かなかったよ」

やっと、瑠璃の警告の意味を理解した小埜崎は首肯して止まった。
美鶴の視線の先、視界に映る全壊した住宅の瓦屋根に黒い影が降
り立つ。神鳴、かつてボレアースが誇った最凶の騎士の一体。蛇の
一員であった頃的美鶴ですら、足元に及ばなかった存在だ。

——そんな敵と戦わなきゃいけないなんてな。それも絶対に負けら
れないときてる。

美鶴は恨めしく思いながら、目の前の騎士を睨んだ。神鳴の周囲
を時折、青白い線が走っている。既に敵は臨戦態勢だ。

「どうして銀狼がこの場所にいるんだい? もしかすれば、今の銀
狼の操者は美鶴クンかい?」

仮面の下から、多少くぐもった声が発せられた。

「ああそうだ。オステオにはどいてもらった。ウル、あんたにも去
ってもらおう」

美鶴は銀狼の両腕剣を構えた。小埜崎も同じように龍王を臨戦状
態にする。

「なら、君の本気を見せてくれ。俺を退かしたければ力を示してみろ。にしても、君が銀狼を使う日がまた来るなんてな。暴食の怪人の復活だ」

美鶴のすぐ後ろで小埜崎が驚きの声を洩らした。

「竹ちゃん、美鶴が戻らないってどういうこと？」

プレデターの侵入の非常事態宣言が一般市民にも知れ渡り、人々が混乱する居住区で由佳里と文蔵は未だに銀狼との戦闘の現場にいた。

美鶴の肉体に膝枕する状態で由佳里は文蔵に問いを発した。

「あくまで騎士が大破してリバースが起きた時、精神が肉体に戻れないということだ。美鶴が使った力は特殊なんだ。由佳里、お前さんは美鶴の首の後ろにある傷痕を見たことがあるだろ。本来、あの場所には安全装置があったんだ」

文蔵は腕を組み、低く唸った。

「それがないと、戻れないってこと？」

「目を覚ます確率は酷く低下するだろう。1%にも満たないかもしれない」

由佳里は目を睜り、その事実に戦慄した。それが本当なら、ここにある美鶴の身体はどうなるのか。二度と彼の声を聞くことが出来なくなるのだろうか。怖い、怖い、怖い。

当たり前前の日常が失われる恐怖が由佳里の心臓を鷲掴みにした。

「竹ちゃんッ、私、美鶴に言わなきゃならないことがあるんだよ。今すぐ美鶴の後を追おうよッ」

「待て由佳里。プレデターが大量になだれ込んでいるなら、外周に近づけないだろ。それにまだ、由佳里に話しておかなければいけないことがある。これを聞いてまだ、美鶴と話したいのなら、考えよう」

「こうしている間にも、美鶴が——」

「しっかりせいッ、由佳里。お前さんは美鶴の補助者じゃったろう。あいつの実力を誰よりも理解しとるだろう。あいつは易々と死にはせんだろ？ 心配する気持ちは分かるが、信じてやれ」

一喝した文蔵の顔にも翳りは相変わらず浮かんでいた。文蔵も不安なのだろう。不安で、心配でしかたないのだろう。それでも勇気づけるために、虚勢を張っているのだ。

「ごめんなさい。そうだね。美鶴は戻ってくるよね」

「ああ戻ってくるさ。さて時間が惜しい。——まず、最初に話しておくことは誠さんのことからだな。前から話そうと思っていたらしいんだが、言い出せなかったようだ。由佳里、同調率が90%を越えようとした研究は知っているな？」

「聞いたことはあるけど、それがお父さんに関係が？ そのプロジェクトは凍結されて、成功していないんじゃないかなかった？」

「全く違う。実験は成功していた。誠さんはプロジェクトの関係者で研究の立案者の一人だったんだ。そしてその後、プロジェクトが凍結された後は創世の蛇の研究員になった」

「そんな、じゃあ美鶴とは——」

「美鶴は小学生時代をとある施設で過ごした。幼児期に両親を亡く

した美鶴を誠さんが連れて行ったんだ。そのおかげで由佳里との交流は絶えなかったのだが。施設での美鶴の日々は辛くもあっただろう。施設では、騎士を用いた戦闘訓練や投薬実験、人体改造などが行われていたらしい。誠さんは美鶴の人体実験に立ち会いもした。

だが、彼を憎むな由佳里。誠さんも生きるためだったんだ。闇に葬られた事実だが、プロジェクトの凍結時に多くの関係者は殺害された。企業間の抗争に巻き込まれたんだ。当然、プロジェクトは失敗と報道され、関係者についても情報に規制がかけられた。どこを調べても事実抹消されている」

「……………」

由佳里は押し黙って、文蔵の話を聴いていた。確かに一概に誠が悪いとは言いがたい。かといって、全く被害者でもない。美鶴に対して、彼は完全な加害者だ。

由佳里はかつての出来事を思い返し、胸が締め付けられた。由佳里はその日を契機に美鶴を『君』と、名前で呼ばなくなった。いや、呼べなくなった。その真相を知って、激しい後悔が押し寄せた。

「そして、美鶴の話になるんだが。由佳里は『暴食の怪人』を知っているか？」

ここからが美鶴の話だというのか。先ほどの話で、多くの事実を知った。

由佳里は更なる悔恨の情に駆られる覚悟を決めた。

「……知ってるよ。一時期、世間を騒がせていたよね。たった一体の騎士が企業間の抗争の真っ只中に現れ、騎士総勢八〇騎を大破させたって」

『創世の蛇』 ボレアース 『嘲笑する虐殺者』 ニーズヘッグ 『終焉の大蛇』 ヨルムガンド の存在が世界を

震え上がらせていた頃の話だ。七年近く前になるだろう。エリア2における過去最大級の事件の一つだ。エリア2トップのクロヅカがその抗争に参加したことが、より大きな話題とした。

暴食の怪人の名は、その一体の騎士の戦闘行為をどこかの批評家が、『まるで癒えない飢えを満たそうとするかのようだ』と言ったことからついた。

「そうだ。そしてその字あざなを持つ操者の正体が、美鶴だ。あやつは自分自身の力を破壊のためでなく、抑止力のために使おうとした。自分の存在を世界の平穏を保つためのものに仕立てようとしたんだ。だが結局は叶わず、美鶴がいた施設が、警察と有志のランカーによって構成された大規模な討伐隊の攻撃を受けた。後は由佳里が知るように、美鶴は誠を連れて施設を離脱。蛇を脱退した。その後は美鶴は世界の平穏を守れない代わりに、幼馴染の平和を守ろうとしていた。相手に憎まれている、怖れられていると心の底では怯えながらもだ」

由佳里の頬を雫が伝い、線を描いた。手で触れれば、涙だった。無意識に泣いていた。拭っても拭っても、拭いきれない涙が道路にシミを作った。横たわる少年の顔を濡らした。

「馬鹿だったのは私の方だよ。……竹ちゃん、私は美鶴と話したい。この思いを告げたい」

「……分かった。ここで待っておれッ。すぐに小型ロボットを取ってくる」

駆け足で離れていく文蔵の背中が次第に小さくなる。人々が慌ただしく、駆け回る通り。

一人の少女は死んだように眠る少年の頭を優しく撫でた。

暴食の怪人と少女の涙（後書き）

あと少しで終わりになりますね。この話。

こうしたほうがいいなど、助言をしてもらえるとありがたかった
ります。

ここまで読んでいて、面白かったですか？

退屈だったなら、すみません。それしかいえません。はい。

暴風を切り裂く雷光（前書き）

いろいろ、直しました。はい。
主に文の構成や、フリガナなどです。

暴風を切り裂く雷光

「美鶴君！！ 打開策があるんだったねッ」

小埜崎が瓦礫の合間を縫って声を張った。その背後を三体のプレデターが追尾している。その背中に誘雷針が設置されているのが目を引いた。

美鶴は肉薄するモデル・ライオンのプレデターを剣で突き上げた。瞬時に掃って、後ろに飛びずさる。電光が走り、機械兵が暴発した。轟く大地、震える大気。神鳴からの後方攻撃だ。

「はいッ。ただ、三分程度の準備時間が必要で、その間、掩護えんごしてほしいです。その時間、銀狼は行動が出来ないんでッ」

鳴動する大地の轟音に負けぬよう、声を限りに美鶴は叫んだ。どうやら小埜崎に声は届いたようだ、龍王が右手を上げて答える。美鶴が用意した打開策には、使用までに時間の曲折があった。そして行動に制限が生まれる。その間の無防備さを守ってもらう必要がある。ただしそれを考慮しなくともその策が完全無欠、十全な方法とはいえない。

神鳴との戦闘を開始して、既に五分が経過。美鶴にはとうに二分は経過したように感じられた。ほとんど攻めに転じられず、防衛一方の戦い。じりじりと精神が磨り減り、焦りが募る。しかし接近戦は不粹ふさいであった。というよりも『自ら死に行く』に同義である。

神鳴の周囲はあけすけに誘雷針がばら撒かれていた。

あの一帯は完全に向こうの土俵だ。踏み込めば容赦なく電撃に打たれるだろう。

『小埜崎さん、使用許可しましたよ。全力でいきましょうッ！！』

瑠璃の声が荒ましき爆音が響く中、よく通った。その言葉を待っていたかのように、小埜崎の龍王が美鶴の銀狼のすぐ隣りに、足元の瓦礫を粉碎して跳躍した。

「美鶴君ッ。あたしに掩護は任せて。君は準備を整えて」

龍王の曲麗な背部が、美鶴の視界に立ち塞がった。二本の太刀をしかとその手に握り締め、周囲のプレデターとその奥の神鳴に顔を向けた。——そして口火を切った。

「最終兵装展開、素戔鳴尊^{スサノオ}」

途端に、龍王が持つ太刀が朱く輝きを発しだす。刀身の周りで空気が揺らめく。龍王の背部がまるで両翼のように展開し、排熱していく。龍王全身が熱を吐いて、揺らめく陽炎と化す。美鶴は、灼熱の焦土に君臨する竜、存在すれば間違はなく生物の頂点にいたであろう生命体の王者を幻視した。

周囲で様子を伺っていたプレデターが堪えきれずに銃撃を始めた。乾いた発砲音が響く。落ち着いた様子で、龍王は両腕で空を薙ぎ払った。空間に引かれる線、飛翔する鉛の雨を宙で弾き、朱い剣閃が周囲のプレデターに喰らいついた。斬撃が飛んだ、というより刀身が伸びたように見えた。瞬く間に、プレデター達の金属の軀^{からだ}が二つに分離した。切断面は真紅に変わり、それが溶断されたことを示した。

これが序列一〇〇台の騎士なのか。美鶴は想像を遥かに凌駕した結果に瞠目した。

怖ろしく強いではないか、龍王。その操者である小埜崎叶望もまた然り。

「時間は稼ぐよ、美鶴君」

「感謝します。小埜崎さん」

美鶴は左腕の長剣を地面に深々と突き立てた。銀狼の躯体をその場に固定する。今度はこちらの番である。失敗は許されない。神鳴はこちらの奮闘を愉しむかのように、安全地帯に留まっている。時折、走らせる電光がその脅威を誇示した。

インプット
オープンラストウェポン
「入力開始、最終兵装展開」

美鶴の視界にパスワード入力欄が出現する。自嘲気味になりつつも、すぐさま美鶴はその解除キーである言葉が続けた。

——あの頃の自分はこうして、こんな長いパスワードを作ったかな……。

「破壊の忠実なる僕として立ちふさがる全てを砕くもの。生きとし生きるものを刈り取るものとして、その存在を知らしめよ」

アンロック
視界に施錠解除の表示が現れる。最終兵装——展開。

銀狼の右腕が上下に展開し、その間を紫電が行き交い始める。長剣を伝導体として撃ち出す超電磁投射砲だ。亜光速で射出される弾丸を回避することは皆無であろう。神鳴に近付かず、倒すにはこれしかない。今頃、由佳里は何を思い、何をしている頃だろうか。唐突にそんな疑問が湧いた。ああ、会ってきちんと話し合いたい。美鶴は怯えに勝り始めたこの感情に、強い当惑を感じた。やっぱり自分彼女のことを——。

『エネルギー装填率、38%』

視界に新たに表示される数字が知らせた。これが90%を越えれば発射可能だ。美鶴は雑念を捨てて、敵に集中を向けた。

「レールガンかッ。ついに解禁したか、最終兵装。だが撃たせん」

美鶴に向かって投擲^{とうてき}される誘雷針。すかさず龍王が太刀を振って、宙で破壊する。優れた操作技術だ。美鶴はその動きに目を奪われた。

「ちッ、厄介な騎士だ。まずはキミから消さなければならぬようだ」

神鳴が再度、誘雷針を投擲する。空を滑空して、迫る金属飛翔^{いせり}体。神鳴も戦猿^{いせり}と同様に優れた臂力^{りよりよく}を持ち合わせていた。高度を下げずに、水平移動する誘雷針が接近する。

「学習しないねッ」

小埜崎が勇んで、太刀を佩いた。

「――詰みだ」

神鳴が指を鳴らした。その周囲にスパークが飛び散る。

同時に誘雷針が龍王を巻き込んで炸裂した。衝撃波が地面を削り、瓦礫を吹き飛ばす。神鳴が戦い方を変え、飛翔させた誘雷針をミサイルの如く使用してきた。龍王のものであったろう折れた太刀の刀身が飛翔し、美鶴のすぐ脇で地面を穿いた。

「小埜崎さんッ」

濃煙が薄れて、龍王の姿が現れる。その場に膝をついていたが、

精神は無事であるようだった。それに引き換え、雷撃を受けたらしい右腕部は蒸気が立ち昇っていた。中の回線は焼き切れていることだろう。装飾と化した右腕は力なくぶら下がっていた。

『先輩ッ！！ 急いで下さいッ』

瑠璃の悲痛の叫び声。美鶴はこの状況になっても冷静沈着だった。エネルギー装填率100%、フルチャージ完了。

右腕のレールガンの発射口を神鳴に向けた。カーソルが神鳴を離さず捉えている。

「消えろッ、ウルッ」

美鶴の視界が青白く染まる。酷く耳鳴りがした。

——これで終わってくれッ！！

轟然たる爆音を響かせ、銀狼を中心に粉塵が舞った。プラズマの尾を引いて、長剣が射出される。刹那、空間に紫電の線を描いて、神鳴の足元に着弾。一帯のアスファルトを砕き、地割れを起こし、盛大に砂塵が舞い上がる。激甚の一撃。吹き荒む突風^{すさ}。波打つ大地。これで終わった。勝敗は決したと、美鶴は思った。

しかし、そう簡単に事が運ばないのが現実か。

次第に薄れていった砂埃の中、凝然として立つ人影があった。未だカーソルは健在。敵は斃^{たお}れていない。

「嘘だろッ。外したのか……、今の一撃を」

美鶴は絶望した。銀狼には、これ以上の兵装がない。最終兵装も一発限り。美鶴はこの戦いの敗北を確信した。静まる戦場に、重々

しい空気が蔓延^{はびこ}った。

「――俺の負けだよ、美鶴クン。俺の負けだ。こちらの切り札^{カード}を切る前に、決着をつけられるなんてな。……ほら、先に行け。まだ戦いは残ってるだろ」

ウルが沈黙を破った。神鳴が指を鳴らしたのに端を発して、一帯の誘雷針が誘爆するように爆ぜていく。

美鶴は神鳴の腹部を貫く金属片を確認した。銀狼の長剣が碎けてなお、敵に喰らいついていた。上半身を不規則に揺らして神鳴が仰向けに転がる。最凶の戦士は崩潰^{ほうかい}した大地に崩れた。

「……周辺のプレデターも一掃した。あとはゲートを閉じるだけだ。君に幸あることを祈ろう」

「敵に塩を送るなよ。んでも、感謝するよ、ウル。小埜崎さん、急ぎましょうッ」

神鳴の横を通過して、美鶴と小埜崎は先を急いだ。あとはゲート封鎖のみ。ウルが言ったとおり、周囲のプレデターはどれも蒸気を揚げて、稼動停止していた。

「本当に勝ったのかな？ ああ腹部の損傷具合じゃ、まだ致命には至らないんじゃない」

ゲートを目前にして、小埜崎が不安げな声を出した。

「きっと、燃料部が破損してます。だから、アレは終わりです――」

ドッオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！

美鶴が答えると同時に、背後で地響きのような、重い爆音が鳴った。周囲の瓦礫が盛大に崩れて、視界が烟る。美鶴の隣りで龍王が勢いよく振り返った。

「なッ、何!？」

『急に、巨大な熱源反応が出現!？　な、何があったんですかッ』

泡を食ったように、小埜崎が慌てた。瑠璃も龍王のセンサーから送られた情報に対して、愕然としたように声を荒げた。

「小埜崎さん、慌てなくて平気ですよ。単に神鳴が自爆しただけです」

視線の先で巨大なクレーターが出現していた。直径五〇メートルほどの、奇麗にくり貫かれたようにして開いた穴。その中央に倒れていたはずの騎士の姿はもう見られない。跡形も失くなった。

「自爆って、どうして」

「ボレアースでは、使用した騎士の技術を奪われないように、扱う騎士に自爆装置が備えられていたんです。それ一体で世界の企業が喉から手を出してまで欲するような、最先端技術の塊ですから。騎士の破損が一定に達した場合や奪取された場合に作動するように、プログラムされた爆弾が仕掛けられてるんです」

「それじゃ、君の銀狼にもアレと同じようなのが？」

「はい。常備されてますね。でも、あくまで破損が酷い場合です。例えば燃料電池が損傷して、電力の漏洩が著しい、といったみたい。さて、ゲートはすぐそこです。急ぎましょう」

だが幸福の女神とやらは、最後の最後に人々を見捨てたようだ。

「バッドエンドだね」

小埜崎が力無く言い放つ。美鶴もただただ空虚に天を見上げた。映る光景が変えられない現実を提示した。幅二〇〇、高さ一〇〇の通路。勇んで突入した第一門扉ローラーゲート方式通路内で、両者は絶望に打ちひしがれていた。

「ゲートが破壊されてる」

完全自律型兵器は例外なく、自らが歩んだ一帯を破壊し尽くしていた。ゲートの可動部であるローラーの片側が無残に破壊され、その役割を放棄していた。片側だけが吊り上げられた門は、急な傾斜となっている。無理な力が加わったせいか、横二〇〇メートルある金属製の門の途中が歪んで曲線を描いていた。

『どうするんですか、このままじゃ封鎖出来ませんよ』

切迫した様子の後輩の声が通路に反響した。

その通りだ。ゲートは上下に開閉する仕組みを採っていた。そのせいで、片側が破壊されたゲートは傾いて歪んでしまった。だが、上下の開閉ならまだ、解決策があった。つまり、片側が未だ吊り上げられているのなら、そちらを破壊すればいいのではないか。そのためには、相当量の爆薬が必要になるだろう。しかし、今現在の状況下で集まるか、美鶴は心配になった。

——こうしている間にも、プレデターの侵入を許してるんだ。一刻

の猶予もない。

「小埜崎さん、もう片側を爆破してゲートを落としましょう。そうすれば封鎖できます」

「でも、爆破って言っても、爆薬を用意するのは困難でしょ。集まるまでに時間もかかれば、更にプレデターが圏内に侵入するよ」

「何か、手っ取り早く解決する方法がないのかよ。くそッ、せめてゲートを破壊できるものがあれば………破壊？ 爆発？」

「どうしたの美鶴君？」

「小埜崎さん、ありましたッ。この場にもう、破壊するに事足りる爆発物がありますよ。これを使いましょう。——銀狼の自爆装置を」

死にゆく騎士に手向ける告白（前書き）

時間的齟齬が発生したので、多少変更あり。

主に由佳里が美鶴を『君』と呼ぶようになった事件の時に、由佳里は小学生だった。みたいな変更。

死にゆく騎士に手向ける告白

美鶴の言葉に暫し、肅然とした通路。美鶴は落ち着かない気分になった。自分が今言った言葉を二人はどう捉えたか。彼らは素直に言葉を受け取っただろうか。そうであって欲しい。そうでなければ決意が揺らいでしまいそうだった。最初に声を出したのは瑠璃だった。

『そっか、それがありましたね。さすが先輩です。それじゃあ、今すぐにでも——』

美鶴は胸を撫で下ろして、悲愴感を大きくした。

「待って」

『どうしたんですか、小埜崎さん？ 今のところプレデターの反応は遠いですよ。今のうちにゲートを封鎖しましょうよ』

「少し美鶴君に聞きたいことがあるの。ねえ、美鶴君。気になっていたんだけど、君が使って見せたその力は何？ その力の代償はなの？ 騎士が大破した場合、転送装置を使用しないで無事に肉体に精神が戻れるの？」

龍王が正面から美鶴を見据える。美鶴はそのカメラアイの奥に、艶やかな黒髪の女性、小埜崎叶望の心配そうな顔が見えたように思った。それでもまだ、この決意は揺らぎはしない。

「この力は、俺がボレアースの入って受けた人体改造によるもので、転送装置なしに騎士との精神のやり取りをする技術です。この力の代償は無いですよ。転送装置がなくても肉体に戻れるようになります。だから心配は無用です」

「——嘘ね。あたしには君が今、どんな表情カオをしているか分かるよ。すごく哀しい顔をしてる。正直に話して欲しい。もし、仮にその技術が精神を戻すことまで可能だったとして、今の君にもそれが可能なの？ 君の肉体側にあった首の傷は何か関係がないの？」

鋭い観察眼だ、美鶴は騙すのを諦めた。正直に言おう。後腐れのないようにしよう、と思いなおした。

「分かりました……正直に言います。精神が肉体に戻る可能性は極めて低いです。小笠崎さんが気になった通り、首の傷は本来あった安全装置の取り除いた傷跡です。リバー스를起こした場合、安全装置がなければ、転送装置なしに精神を戻すのは不可能に近いですね」
「……………」

『そんな、先輩。もしかしたら死んじゃうんですかッ!? うちに愛の告白をしないで、墓場に埋まる気ですかッ。そんなの、そんなのってありえないですよッ!!』

「俺がお前に告白するほうがありえねえーよッ」

美鶴は吼えて、銀狼の残った左手の長剣で石畳の床を叩いた。酷く硬く、冷涼な金属音が鳴る。何というか、折角のしんみりとした情感が尽く破壊された気がした。瑠璃は言葉を続けた。

『それじゃ分かりました。先輩の告白は由佳里先輩に譲ります。代わりにうちは先輩のキスをもらいます。これで手を打ちましょう』
「遠慮する。なんだよキスをもらうって、絶対にやんねえからな。いつから交渉の話になったんだよ」

『うわ、由佳里先輩への告白は否定しないんですか!? この浮気者ッ』

「だから何だよッ。誰とも付き合っていない時点で、浮気じゃないだろ」

美鶴は呻いて、嘆息した。この後輩は、やはり補助者^{サポーター}として異質だ。

——てか、瑠璃と会話する場合は必然的に龍王に向かって話さなきゃなんだよな。つまり、小埜崎さんに対しても話をしているようなもので。

「なるほど。美鶴君は由佳里ちゃんに惚れてるわけだ。どおりで何か言いたそうな雰囲気だったわけだね。あたしは君の要求は呑めないよ。そんな未練を残して、死なせるわけにはいかないよ」

さきほどまで、押し黙っていた小埜崎が口を開いた。

やはりそうなるのか。美鶴は必死に、この場から逃げようとする気持ちを押さえつけた。死の恐怖が追い^{すが}縋^{すが}ってくるのに堪えた。

「絶対に死ぬわけじゃないですよ。最悪、死亡するだろうって話だけで、肉体に戻る可能性はゼロじゃないです。もう余り時間は残されてないですよ。彼我の戦力を考慮すれば、悩む時間も惜しいですよ。それに、エリア2の全人命、数千万人の命とたった一人の人間の命を同じ天秤で較べるまでもない……でしょ、う」

言葉の最後の方は震えてしまった。恐怖が美鶴の首を締め上げる。一度、揺らぎかけた決意を固めなおす。つかの間の静寂のあと、小埜崎が答えた。

「そうだね。あたし達には命を選択する権利はないよね。美鶴君、ゴメン。どうかあたしを怨んでほしい。あたしは最後の最後で無力だ」

龍王が左手で腰の鞘から、太刀を抜いた。冷気を発する、冷酷な刀身が露になる。小埜崎は迷いを断ち切るように、その刀身を凝視した。

『小埜崎さん……。うちのことも怨んでください先輩。もし、もし戻れたら――』

「キスはいらねえーぞ」

『なんでですかー！？ 女の子とキスしたくないんですか？』

「いや、したいけどさ……。なんていうか……」

美鶴はたまらず言いよどむ。

『なんていうか？』

「お前じゃ嫌だ」

『うわひつどッ』

美鶴は腹をよじって笑った。精神体である故に、いつまで笑っても腹が痛くはならなかった。こんなやり取りが出来なくなるかもしれない、そんな恐怖を一時忘れられた。

「美鶴君、それじゃ行こう。破壊すべきはゲートの片側だよ。急ごうッ」

小埜崎の龍王が先導して、通路を進む。美鶴はその後ろを追って、銀狼を走らせた。

第一門扉方式通路は首都圏で最大規模のゲートの一つであろう。高さ一〇〇メートルの入り口は、横二〇〇メートルに渡って長々と

続いている。かつてこのゲートは重工業機械の搬入、搬出、または工業用アンドロイドの移動のために使用されていた。しかし大崩壊後、居住可能地域が形成されるにつれ、開門する機会がめっきり減った。人々はもう二度と使用されることは無いと信じて疑わなかっただろう。まさかこんな形で、ゲートが開門することになるなど、誰が想像したか。目の前にある、生き残ったゲートの可動部を見ながら美鶴は思った。これを破壊すれば皆を、由佳里を守れるのだ。

「主兵装展開、素戔鳴尊」
スサノオ

龍王の左手の中で太刀の刀身が紅く輝き、美鶴の目の前に顕現する絶対強者。

美鶴は通路の壁に背を向けて、龍王に向き直った。

『先輩、絶対に死なないでください。目を覚ましてくださいよ。キスは諦めます。だから、代わりに由佳里先輩を悲しませないでください。由佳里先輩に告白してください。絶対戻ってください先輩。ぜ、ぜったい……いやで……すから。もどって、きて……ください』

途中から言葉に少女の嗚咽が織り交ざる。

——戻って告白かよ。もし玉碎されたら、立ち直れねえよ。……でも、そうだな。目を覚ませたら、想いを告げよう。由佳里に拒否されたらそれまでだ。諦めようか。

美鶴は無言で少女の泣声を聴き、どこかの部屋で目を赤く腫らしている後輩の姿を想い、胸を痛めた。わるい、ごめん。

「安心しろよ。俺はぜってー戻ってくるからさ。代わらない日常に戻ってくるから。首を長くして待ってろ」

美鶴は銀狼の腕を広げた。

「小埜崎さん、お願いします」

「ほんとにゴメン。美鶴君」

微かな声音で小埜崎が呟くように言った。そして、龍王はその手に握る灼熱の刀を銀狼の胸に突き立てた。火花を散らして、刀身が背中に生える。全身を駆ける疼痛、美鶴の視界に激しくノイズが走る。乱れる世界。目の前にいる龍王でさえ、形が定かでなくなる。

二たび盛大に火花を散らし、刀身が引き抜かれる。

「離れてください。爆発に巻き込まれないうちに」

美鶴の言葉に首肯して、小埜崎が離れていく。後ろ髪を引かれるように、何度も何度も後ろを顧みながら離れていった。^{かえり}

「——あと、数分ってとこかな」

一人寂しく美鶴は呟く。イギリスの学者、ロバート・バートンの言葉を思い出していた。『死の恐怖は死よりも恐ろしい』その通りだと思った。次第に迫るカウントダウン。迫りくる恐怖が美鶴を掴まえて離そうとしない。

「嫌だ、死にたくないッ。死にたくないッ、死にたくないッ、死にたくない。怖い、怖いコワイコワイコワイッ」

唐突に誰かの咽び声がした。少年の声だった。美鶴が振り向けば、通路の薄汚れた壁の代わりに映る光景。白衣を真っ赤に染めた男数名、その前に佇む騎士。そうだ、これは。

過去の出来事がフラッシュバックしていく。走馬燈のように思い出が去来する。

「美鶴君、どうか娘の顔を一目で構わない。見させてくれ。そして僕は殺されて構わないから。お願いだ、由佳里の顔を見させてくれッ」

目の前で土下座する男がいた。白衣を纏った長躯が二つに折られ、顔は床に擦り付けられている。美鶴はその様子を見下ろしていた。自分には研究員の始末が命じられている。とある研究プロジェクト関係者の抹殺だ。つい先日、蛇狩が決行され、美鶴がいる施設にも警察やランカーが迫っていた。

そのために施設を引き払い、避難することとなった。

研究員は一人残さず排除しろとお達しだった。その命に逆らえば、美鶴自身が反逆者扱いにされて処罰を受ける。残念ながら彼らは美鶴を含めた数人をモルモットにしていた連中だ、殺すことに躊躇する理由がない。しかし美鶴は行動に移れなかった。ここに来るまでに何人を手にかけただろうか。両手の剣は血に濡れ、妖しく光を放っている。しかし美鶴は動くことが出来なかった。どの研究員も自分の命を奪うなど、その尊さ、価値を訴えた。自己中心的利己主義者だった。

だから何故、此処まで自分の命より娘の事を優先するのか不可解だった。だから美鶴は返事の代わりに振り上げた手を下げていた。腕の先に存在した剣が研究室の床を穿つ。

男は安堵した表情をした。眼鏡の奥の人懐こい眸が細められる。果たして、この男が願いを叶えた時、自分はその命を奪えるだろうか。この男は大人しく死を受け入れるだろうか。

「じゃあさ、先生。俺の身体を運んでくれない？」

「ああ、いいよ。僕に任せてくれ」

男はぐったりした少年の身体を背負った。二人の逃走劇が始まった。

時間は巡り、鬱蒼とした森に場面は変わる。樹冠が空を隠し、陰鬱な雰囲気を作っていた。美鶴の後を追って、男は走る。息を絶え絶えにしながらも、弱音を吐かず疾駆していた。

「急げ先生ッ。奴らは血眼になって俺達を捜してる。止まると殺されるぞッ。娘に会うんだろ、あんたを由佳里は待ってるぞッ」

「はあ、そうだね……。僕は足を止めちゃ駄目だ。はあ、はあ……」

数百メートル後方では、天を焦がす焰が上がっていた。美鶴が施設を破壊し尽くした結果だ。創世の蛇の本拠地『アンダーヘル』、地獄の下の地獄だ。

『顎ッ、止まれ。お前は処罰を受けなければならない。今すぐ止まり、博士と共に投降しろ』

——くそッ、追いつかれた。

「先生、先に行けッ。こいつらは俺が足留めする」

目の前に臨戦態勢をとる騎士、総勢三体。どれもこれも厄介極まらないランカーだ。創世の蛇の執行者。

「キシシッ、おおそれたことをしでかしたなアギト。こりゃ、死んで詫びるしかねえーんじゃね」

「ブラド、あんたはどうしてそう野蛮な思考なのかな？　こちらは生きて連れ戻せて命を受けたっしょッ」

「うっせーよ頬^{チーク}。んなの分かってんだよ。何本気にしてんだよ」

頬^{チーク}と呼ばれた、鳥類に近似した顔立ちの細身の騎士は腰に手を当て、隣の赤マントが目を引く女性型騎士を指差した。

「うっさいッ、さっさと反抗期少年を連れ戻すよ。そうだ涙^{ウル}、骨^{オステオ}はどうしたの？ 他のメンバーは？」

「オステオは騎士が大破し、出撃不可。あとの奴らは重傷または死亡。随分と暴れてくれたもんだよアギト」

金髪の男がサングラスを外した。出現した幾何学模様。何度見ても驚かされる。

外見が他のどの騎士よりも人に近似された騎士、神鳴だ。

「悪いね。俺は捕まるつもりはないから。あんたらを薙ぎ倒して先に行かせてもらう」

「調子に乗んなよッ、アギト」

肉薄する深紅な騎士を冷たく見据え、銀狼は剣を佩いた。

——世界は駆け足に進む。

「どうして僕を庇ったんだい……。ごほお、君の肉体の方が大切だろうに。どうして……。ごほ、ごほ」

黒煙に気管を詰まらせる男は、眸に涙を溜めて言った。彼の言うとおりだ。

視線をズラせば、右上半身が赤黒く染まった少年が倒れていた。一目で致死の傷だと知れる。何故、自分は彼を守った？

周囲は警察やランカーが取り囲み、包囲網を造りつつあった。無

慈悲な爆撃が一带を呑み込んでいた。

これは七年近く前の記憶だ。

美鶴がアギトの名を捨て、右腕を無くした記憶。

——世界は収束に向かう。これはおよそ二年前の出来事の布石だ。

「ありがとう美鶴君。君のおかげで僕は由佳里の顔が見れた。感謝してもしたりないよ。妻を亡くした僕には由佳里しかいなかったんだ。もう思い残すことはないよ」

「駄目ッ、美鶴やめてッ!!」

可憐な少女が白衣の男と機械の間に割り込んだ。両腕を命一杯広げていた。両目に溢れんばかりの涙を溜めて、口を固く噤^{つぐ}んでいる。

「莫迦だな俺は。ただ単に温かな家庭に憧れを抱いていたんだな。自分みたいな子供を増やしたくなかったんだな」

銀狼はその心臓目掛け、剣を突き立てなかった。力無くその場に膝をつく、美鶴の精神が肉体に帰還する。

激甚な痛みが走る。嗚咽が漏れ、視界が滲む。どうしようもなく吐き気が込み上げた。鉄の味が味蕾^{した}に刺さる。濃い血臭が鼻腔に満ちる。止血処置がなされ、美鶴の出血死はなんとか免れていた。

「先生ッ、俺を置いて……いけッ」

痛みに意識が途切れる。次に目を開けた時、美鶴の目の前に見知らぬ天井があった。ここはどこだ。

真っ白い部屋の扉が前触れ無くスライドされて開いた。

仏頂面の少女が現れた。美鶴の幼馴染の羽城由佳里だった。真っ赤なランドセルを背負っていた。可愛いワンピース姿。水色の服は、背中の鞆の赤と相反した。この時、由佳里は小学四年であった。

「私は『君』のサポーターになるから。お父さんを傷つけさせないからッ。いい？」

こうして由佳里はサポーターを目指した。

目の前に汚れた壁の様子が戻った。足元に崩れ落ちたコンクリ片が散らばっている。

未だ貫かれた銀狼の胸は真っ赤に染まり、熱を発していた。そろそろ時間だろう。最期まで守り抜くと決意したのに、結局は途中退場か。美鶴は壁にもたれて、ずり落ちる様に座り込んだ。

後悔が募った。次第に視界が白光に染まる。耳鳴りがして、視界が酷く歪んだ。

「ごめんみんな。ごめん由佳里。さよなら」

本当にごめんなさい。

美鶴は状況が許せば泣いただろう。この場にあるのが生身の肉体であつたなら、顔はすでに涙で濡れていただろう。断腸の思いだ。力なく、その場に座り込んだまま、最後の時を待った。突然、羽音が聞こえた。視界に一匹の蜻蛉とんぼがゲートの圈内側から滑空して映りこむ。珍しいな、隔離壁で囲まれたエリア2ではほとんど見ないのに。

美鶴はその蜻蛉の姿を追った。蜻蛉は不可解にも、銀狼の傍に近

寄り、宙で静止した。しきりに羽を振動させていた。

『美鶴、戻って来てよッ。君が居なきゃだよッ。私は美鶴のことが好きだからッ!! 愛してるからッ』

懐かしい声が、好きな人の声が響いた。声の発信源は目の前の蜻蛉だった。美鶴は瞬時に理解した。これは文蔵の小型ロボットだ。では、さっきの声はやはり由佳里のものか。美鶴は先ほどの言葉を反芻した。我が耳を、銀狼の集音機能を疑った。

——好きだって言ったのか。俺のことを愛してると……。

ああ、なんだ。怯えることはなかったじゃないか。そう簡単に壊れる日常じゃなかったじゃないか。俺は莫迦だ。美鶴は銀狼の左腕を蜻蛉に伸ばした。

「俺も由佳里のことが好きでした」

普段であれば面と向かっていえないだろう台詞。このときばかりは、臆せず言えた。

完全に美鶴の視界が白く塗りつぶされた。蜻蛉の姿が消え、何も見えなくなる、何も聞こえなくなる。

——ブツリッ……。

ここで美鶴の世界は閉じた。何も感じない、何もない。

銀狼の自爆装置が起動、爆ぜて周囲を呑み込んだ。ゲートが急落下し、その下のプレデターを襲う。大地が揺れて、粉塵がゲート周囲を覆い隠した。

『先輩ッ、先輩ッ』

一人の少女が嗚咽を漏らした。

一体の騎士は放心したように、塞がったゲートを見つめていた。

首都圏はその存在の消滅を回避した。

人々は歓喜に満ち溢れ、涙を流した。

しかし、一人の少年の勇姿を知るものは少ない。

寒空の下の灯火（前書き）

誤字など訂正。

他になれば、教えてください。

寒空の下の灯火

この世界における死は酷く色褪せ、現実味を失くした。騎士を介した殺戮は罪の意識を鈍らせ、操者は自らの死を恐れることを忘れ、己を過信する。隔離壁に囲まれた結果、外の世界での悲惨さを人々は忘れた。思い出と化した過去に鮮明さはない。薄れ、霞み、褪せた。

プレデターの強襲から一週間が経過した。世間は未だに慌ただしく巡り、休まるところを知らない。今回の事件を起こした蛇に援助行為をしたとして、エリア1の複数の企業の経営責任者が身柄を拘束された。別の話題としては、日本国内のプレデターに対して、半年以内の殲滅作戦決行が決まったことだろう。文造は酷く驚いて腰を抜かしていた。

由佳里はブレザーの下にカーディガンを着込んで、慣れた通学路で自転車を漕いでいた。もうすっかり冬だ。由佳里が通り過ぎた後に白い吐息が棚引く。目の前に登校中の学生の姿が大きくなる。同じ西徳大学付属高等学校の生徒達だ。

「ゆかりっち、おはよー」「先輩おはようございます」「一緒に登校しょッ」

明るい声が寒空の下に光を灯した。由佳里は片手を離して、彼らに手を振った。「おはよう、みんな」負けないぐらいの明るい声を出した。

辿り着いた学校、予鈴にはまだ時間に余裕がある。見慣れた校門を抜け、駐輪場に自転車を置いて教室に向かった。生徒が各々の教室へと向かう流れに紛れて歩く。

由佳里は2－1の教室の扉に辿り着き、開けようとドアに手を掛けた。ふと視界の隅で、見覚えある姿が映った。隣のクラスの前の廊下に二つ結いの少女が立っていた。可愛い顔立ちをしている少女だった。身長は由佳里よりも幾分か小さい。一五〇センチ後半辺りだろう。いつもその表情を占めていた明るい笑顔は消え、重苦しげにくすんでいた。窓際に背を預け、思い詰めた表情をしている。

「瑠璃ちゃん、おはよ」

由佳里は近寄って、その横に肩を並べた。隣の少女は一瞬、驚いたような表情を浮かべ、すぐに申し訳なさそうに俯いた。ここ最近はいつもこの調子だった。そうなるのも無理はないだろう。だが、彼女が萎しおれていると学校全体も暗く沈んでいるように感じられた。

「元気だしてよ瑠璃ちゃん。別に瑠璃ちゃんのせいじゃないんだよ。もちろん小埜崎さんのせいでもない。……美鶴が自分勝手に、残された人の気持ちを考えずに決心したことだから、気に病まないでよ。瑠璃ちゃんが暗いと学校全体も暗くなっちゃうよ」

「……そうですね。美鶴先輩の分まで明るさを供給しないとですよ。由佳里先輩、ありがとうございます。少し気がラクになりました」

瑠璃は笑顔を取り繕って、階段に向かう。彼女が見せたのは無理に笑おうとした、固い笑みだった。由佳里はその小さく萎縮した背中を目で追った。やはり引きずっているようだ。由佳里は瑠璃の後姿から視線を外し、すぐ前の教室を見た。

開いた扉から見えた机の列。奥の前から三番目の無人の机。

一週間前からその主は戻らない。

咽喉のどの奥から込み上げてくる感情。咽喉が渴くような情動。由佳里は踵を返して、自身の教室に向かった。逃げるようにして、足早

に自分のクラスに滑り込む。失った日常を目の当たりにすれば、胸に穴が開いたような喪失感で息が詰まりそうになる。

自分の机に辿り着いて、手に持っていた鞆をその上に置いた。時計が午前八時二五分を指した教室には、未だ三分の二近くのクラスメイトがいなかった。

由佳里は椅子に腰を下ろし、何とはなしに窓側に顔を向けた。窓の外、硝子越しに見た景色には透き通った空の蒼が一面に広がっている。何故か無性に甘いものが食べたかった。

「あ、そうだ」

ふと思いついた。放課後に彼が好きなモンブランを買って帰ろう。彼は食べてはくれない。笑顔を向けてもくれなければ、話もしてくれない。

それでも地球は巡り、現在を過去にしていく。

由佳里は両腕を天に伸ばし、背筋をぐっと伸ばした。今日もまた変らない一日だ。

寒空の下の灯火（後書き）

モンブランが無性に食べたくなったので、モンブラン起用。
はい。

あいるびーばっく

『人は先人に学び、同じ後悔を繰り返す』

「莫迦な人間だったから、弱い人間だったから。人は恐怖心が皮を被った生き物だ。その性質が火を生み、村を形成し、国を創った。武器を造り、他人を恐れ、争いを絶やさなかった。人の勇氣はこれっぽっちも美徳な感情ではない。恐怖心を隠すための虚勢だ」

真っ白な世界に少年は一人、茫然自失な状態で立ち尽くしていた。周囲には白骨化した死体が無造作に積み重ねられていた。

ああ、この白さは白骨化した色か。

どの頭蓋も空っぽの眼窩で、無い双眸で睨んでいるような、息苦しいほどの圧迫感に少年は手に汗をかいた。

ここにいる白骨化死体は、皆自分が手にかけて人間か。見覚えある白衣が屍の山よりはみ出している。

『『『カカカツ、やつとここまで来たか。お前も俺達の仲間入りだな』『』』

不意に複数の骸骨が歯を鳴らして喋り出した。カラカラと乾いた音が響き渡り、木霊する。

彼らは何を言い出すのだ。既に人としての形質を骨だけにした者達を、少年は睨みつけた。

そして少年は自分は生きていると叫び、腕を広げた。そこで恐怖に悲鳴を上げた。

少年のパーカーから覗く手は、肉が削げ落ち、真っ白な骨を晒していた。周囲と同じ、日に晒されたような、漂白されたような白、目を背けたくなる色。

慌てて自分の顔を触る少年は絶句した。二の句を告げることが出来なかった。

頬の無い口、目玉も存在せず眼窩が広がっていた。少年はその場に崩れ落ち、流せぬ涙の代わりに嗚咽を漏らした。無常な世界に少年であつた骸骨はうずくまる。

『人の価値は死んで墓に眠った時に決まる』

『人の死はどこまでも不鮮明だ』

けれども自分自身の命の尊さを何よりも信じたいのが人間だ。その価値を誰よりも信じたいのが人間だ。もしその価値を、尊さを他人が理解してくれたならその時、人はどう思うのか。

やはりそうだろうと愉悦に浸るだろうか、それとも他人の価値を理解するのだろうか。

『……戻って来てよッ。君が居なきやだよッ……』

少女の声が閑散とした世界に響き渡った。積み重なった骸骨が崩れ、己の骨の行方を見失う。少年は面を上げて、振り返った。眸のない眼窩が捉えたのは、ぼやけた少女の姿だった。

ああ、知っている。彼女を知っている。

どうかこの場所から連れ出して欲しい。少年は骨しかない細い手を伸ばした。途端に視界が歪み、振れ、不鮮明になった。

——見知らぬ天井が目の前にあつた。

酷く真っ白な空間だった。鼻の粘膜を刺す薬品の臭いがする。窓から差し込む日差しが柔らかく、室内を照らした。

じっとしていられず少年は身体を動かした。まるで鉛のようだ。重たく、動くのが辛い。それでも身体を起こそうとして右腕を動かした。……何も起こらない。いや、右腕がある感覚がしない。慌てて顔を向ければ、あるべき腕が存在していなかった。

少年は悲鳴を上げそうになるのをグツと堪えた。ああそうだ、右腕は無くしたのだ。男の平和を守るために、犠牲にしたのだ。

枕元には各種バイタルが表示された機器が置かれ、電極や針で少年は繋がれていた。

何が起きたのだったか、確か自分は死んだ筈ではないか。だがあまりに現実味ある世界が目の前に広がっていた。

少年は悲鳴を上げる身体を無視して、体を起こした。かすかな衣擦れの音を立てて、左手で顔を撫でれば確かな頬の感触があった。ほっと安堵する。

扉の向こうでは不特定多数の人間の声がしていた。扉の前を通り過ぎる足音がしきりに聞こえる。少年は扉から目を外して、今の時刻を確かめようと時計を探した。正方形の時計が壁に掛けられているのを見つければ、時刻は午後四時四二分であった。では日付はいくつだろうか。いったい自分はどれほどの間、眠っていたのだろうか。

「……会いたいな」

唐突にそう呟いていた。久しぶりの声は、枯れたようなしわがれたものだった。言葉にしてみれば、止め処なく感情が溢れてきた。咽喉の奥から上がってきた情感を飲み込んで、少年は眸を閉じた。目蓋の裏に映る少女の姿が色褪せている。不鮮明な顔で笑っていた。

——会いたい。会って話をしたい。笑いあいたい。

少年は持て余した感情のやり場を探し、窓の外に視線を向けた。二階に位置するらしい病室からの景色は、樹の枝と暮れなずみ始めた空だった。寂しい景色だ、と少年は思った。終わりゆく一日の、季節の景色だ。

コン、コン、と病室の扉が前触れなくノックされた。どうも来訪者が来たらしい。少年は身体を強張らせ、扉の向こうにいる人間に對して考えをめぐらした。

少年が考えをまとめる前にドアがスライドされて、閉鎖的空間が開け放たれる。姿を現したのは、見覚えある制服姿の女子高生。その手に包装された箱を吊るし、その顔に驚愕に似た表情を浮かべていた。扉の向こうにいたのは、少年が会いたかったその人。

『——美鶴ッ!!』

由佳里が片手に持った袋をその場に落とし、美鶴に駆け寄った。その目に涙が浮かぶのを美鶴は見た。由佳里が美鶴に抱きつき、その^{まなじり}の眦から滴を零した。

美鶴は戸惑いながらも、少女の背中に残った腕を回して抱き止めた。優しい香りが肺を満たす。本当に生きて戻ってこれたのだと理解した。

「ただいま、由佳里」

かけがえのない日常は、近すぎるが故にその性格を見失わせる。失くして初めて気付かされることが多い。美鶴は取り戻せた日常を、代える事の出来ない日常を守ろうと決意を固めた。

不安だらけの世界も、由佳里が傍にいてくれるなら、そんなに悪いもんじゃないと思い直した。



「うわッ、グッチャグチャ……」

美鶴の目の前に差し出された、原型を止めていないモンブラン。目元を赤くした由佳里は、申し訳なさそうに顔を曇らせた。

「いやいや、形が悪くたって味は変わんねえよ」

由佳里の手からモンブランを取り、スプーンで一口分を掬って口に運んだ。啗内に広がった甘味はまるで身体中に染み渡るようだった。

了

あいるびーばっく（後書き）

自分よく頑張った。何とか話に一つ区切りをつけました。

どうでしたか？ 面白かったですか？

誤字やら脱字やらが沢山あると思います。すみません。

自分、まだ一生懸命、学生やってるんで、いろいろ至らない点があると思います。ご指摘してもらえるとありがたいです。

とりあえず、この話の続きは未定で。最初、書き始めたときは続編は無しのつもりで始めたので……。とりあえず、一ヶ月考えます。面白かったと思ってくれた人は、評価してください。はい。

それじゃあ最後に一言。

「童顔だって、いいことあるッ」
ありがとうございました。

少女と少年と冬の蟬螂（前書き）

一ヶ月経ってないですね。とりあえず、続きを書いてしまいました。

色々と設定を細かくもざっぱに決めました。

とりあえず、この物語のキャラで夏祭りの出来事的なモノを書き
たくなったので、頑張ります。ちなみにこの物語では季節は冬です。
夏は遠いーなあ。

※嘘と獣は手が進まないの、結構放置になっているんですがス
ミマセン。（たまに覗いてくれる人に言いました）

つたない文章ですが、すみません。はい。

誤字脱字は目を瞑ってスルーで。

少女と少年と冬の蟬螂

薄暗い通路が延々と続いていた。

カビ臭い、濁ったような空気が漂う。淀んだ空気は器官に絡まり、息苦しさを感じさせる。

天井を這うダクトを辿るように、一人分の人影が早足に進んでいた。人影が足を動かすたびにカッン、カッン、と硬質な音が響いた。人影が止まったのは通路の途中に存在した非常口の前。深緑の照明が周囲を気味悪く照らしていた。人影は暫し逡巡する素振りを見せ、扉を開け放った。同時に通路に風が吹き込み、淀んだ空気を彼方へ運ぶ。光が入り込み、人影を白日の下に晒した。

『うつわ、まッぶし……』

発せられたのは少年のような明るい声。声を発した人物は、一目でその性別が女だと知れた。エアリーカールの明るい茶髪は肩までかかり、吹き抜ける風に揺れている。どこか育ちのよいお嬢様のようであった。見た目から判断すれば、彼女はまだ学生を続けているような少女でもあった。

しかし不可解であるのは、彼女の服装であろう。

はためく裾の長い黒のローブを纏い、その下にはタイトなブレスト。肩と腹部が剥き出しにされた格好は、異性であれば赤面して直視出来ないほどであった。およそ、この時代には彼女と同じ格好の同性はいないのではと思われる。

少女はそのことに気を止める様子もなく、吹き抜ける風の冷たさに身を震わすことなく、非常口の先に続いた階段に足をかけた。彼女が履くのは、漆黒のブーツ。再びカッン、カッン、と硬質な音を鳴らして少女は下り始める。

階段の途中、未だ眼下には小さな景色が広がる高さで、少女の身

体から音楽が流れ出した。オルゴールの音のような、静かであって
優美なメロディーであった。

少女がローブの裾に手を伸ばし、取り出したのは白に塗装された
スマートフォン。おもむろに耳に当てて、少女は口を開いた。

「もしもーし、何の用？ ん？ うちが今どこにいるのかって？
ご想像にお任せします。ってうっさいよッ。耳元で大声出さないで
よ、ウル。——じゃあね」

少女は電話を切り、乱暴に携帯をしまった。そして今更ながらに
気付いたように身震いした。「もう冬じゃん。さっむ」と独り言ち
て、歩みを再開させる。

「さてと、うちもさっさと仕事を終わらせないとだね。エリア2か
あ、アギトに会えるかなー」

少女は、ふと眼下を見下ろして言った。ああ、アギトの名を持っ
ていた者は確か……。

少女は微笑を浮かべた。遠くに見える隔離壁を見て、思いを馳せ
た。

高層ビルの非常階段で、少女は一人、降^{くだ}っていく。その後ろ姿を
見たものは、疑問に首を傾けただろうか。少女の首には、例えるな
らば首輪のような金属物が張り付いていた。



「くはあ、はあ……。はあ、はあ……。はあ。ふあ、くふあッ。はあ
……はあ……」

激しい運動の後のような、荒い呼吸音が響く。瓦礫を踏みつける

不愉快な音がそれに伴った。走り続ける人は年端も行かぬ少年だった。額に流す汗を飛ばし、必死に肺に酸素を供給しようと空気を吸い込む。

少年は生きること**に**必死であった。何故、どうしてこうなったのか。後悔が募り、自然と目頭が熱くなる。母の顔や父の顔、妹の顔が代わる代わる浮かぶ。

少年の名は、榎原稔えのらはら みのるといった。

稔はたった一人、外部居住区の廃墟を疾走していた。たった一人。この場所にいるのは自分一人である状況は、一言に最悪の事態であった。助けが望める余地は限りなくゼロであろう。

稔の背後、ほんの二〇メートル後方で白煙が上がった。コンクリ片を巻き上げ、粉塵が盛大に立ち昇る。間を開けずに、その煙の中から飛び出してきたのは錆びた金属物。まるで意思をもっているような、生き物めいた動きで迫ってくる。狼のような鋭さをもつ見た目。しかし、酷く金属質な躯体である。

——プレデター
完全自立型兵器だ。まさか、こんなところにいるなんて。

稔は悪態をついて、脇目もふらずに走った。意味もなく先を急いだ。どうにかプレデターを撒けばいい。少年は吹き曝しにされた住宅の瓦礫を通り抜け、ひび割れた舗装路の路を走った。

稔が現在の事態に陥った理由は、ほんの数時間前に遡る。稔の両親が隔離壁の内側への移住を決意したことに起因する。

首都圏エリア2と近畿圏エリア4の両総裁が同意した結果、残った二つのエリアの企業総裁も続いて同意を表明。日本完全解放に向けて領内のプレデター掃討に先駆け、各エリアにおいて外部居住区デッドゾーンの人々の受け入れが開始された。掃討作戦で想定される戦闘における人的被害を最小限に抑えるために、各エリアへの移住、エリア周辺での安全圏の形成が急がれていた。

しかし、それに対する外部圏の人々の反応は賛否に割れた。

それは仕方のないことであっただろう。これまでまともな救援策がなかったのだ、疑心暗鬼になり、素直にその決定を呑み込む人間は少ないだろう。稔もまた同様だった。

両親が決定したにもかかわらず、その意思に反発し、単身で外部居住区の奥へと出奔した。嫌だったのではない、恐かったのだ。本当に圏内の人間が自分たちを受け入れてくれるのか、信じることが出来なかったのだ。だから、気付けば逃げていた。頭の片隅でかすかに、両親が呼び止めようとして上げた怒声が余韻として残っていた。あの時、足を止めていれば。そう悔やむも時既に遅く、プレデターに追い立てられている。

「かはあッ……はあ。はあ、はあ……」

目に付いた崩れかけのビル、五階建てであつたろうソレは既に四階分の高さしかない。その入り口部分は崩れ落ちた壁で大半が塞がり、人一人分、それも子供が何とか潜^{くぐ}れるほどの広さしか穴が開いていなかった。

稔は藁にも縋る思いで走った。すぐ背後に迫る気配を背中を感じ、恐怖で早鐘をうつ鼓動が耳元で聞こえるようであつた。

無事に辿り着けた半壊したビルを前に稔は四つん這いになり、小さな穴を潜った。通り抜けると同時に背後で瓦礫が軋み、砂埃が舞う。プレデターが崩れた壁の、厚さ数一〇センチのコンクリの向こうで、悔しげに引つかきまわす騒然たる音が続いた。

どうにか間に合った。稔はほっと胸を撫で下ろし、乱れた呼吸を整えようと深呼吸をした。

次第に落ち着きを取り戻した稔は、これからどうするべきか辺りを見渡した。

「「ここも酷い。みんな壊されてる……」

稔の眸に映ったのは、脚の折れた椅子や二つに割れた作業台らしき机。切削された壁は壁紙が無惨に引き裂かれ、所々に亀裂が走っていた。天井の一部が落下して、床に散乱していた。

他にも黄ばんだ書類が束で転がり、ページがバラけた書籍が散見される。

外部居住区では日常的な光景であった。プレデターが行ったのは、無差別な破壊活動であった。何故、大崩壊が起ることになったのだったか。その話を昔、父親に聞いた記憶があったが忘れてしまった。それよりも今は現状を打開しなければならぬ。いつまでもここに籠城するわけにもいかない。第一、稔には食料がなかった。

「どうすればいいのかな。帰りたいよ……。父さん、母さん。由愛……」

稔は妹である由愛の屈託のない笑顔を思い返し、胸が痛くなった。もっと兄らしいことをしておけばよかったと、心苦しく思った。ふと気付いた。

——音が止んでいる？

あの狼のようなプレデターは諦めてくれたのだろうか。機械にも諦めという思考は備わっているのだろうか。そうであってほしいと稔は強く願った。

が。やはり相手は機械であった。融通の利かない、機械仕掛けの破壊者であった。

ドンッ、という衝撃がビル全体に走り、稔の頭上から砂埃が降りかかり、新たに床に落下した天井が増えた。白濁する視界に、入り口とは別の方角から眩い光が差し込んでいた。

「壁に穴を開ける気だッ」

稔は血の気が失せ、蒼白する顔でうろたえた。このままでは本当にまずい。自分は死ぬかもしれないという恐怖に、足の震えが止まらなくなる。二たび走る衝撃にたたらを踏み、意を決して稔は入り口の隙間から飛び出して、太陽の下に影を濃くした。

ドンッ、三度目の衝撃がビル全体を振動させ、コンクリが砕ける破碎音が鳴り響いた。ビルの入り口から白煙が噴出し、ビルが一階部分の壁を残して倒壊する。あのまま居たら死んでいただろう。逃げ出しておいて正解だった。しかし、現状は未だ最悪である。死を先延ばしにただけであった。

「誰かッ、誰かッ。助けてッ」

助けは望めないだろうと分かっているながらも、助けを求めてしまうのが人間の弱さか。

稔はひび割れたアスファルトに足をとられた。体勢を崩して、両手について転んだ。擦り剥いた掌が熱を^{てのひら}発し、血が線状に滲む。しかし痛みを気にしている場合ではなかった。

稔のすぐ背後で重量ある物質が跳躍して、地面を揺らした。ドスンッ、と重い落下音を響かせ、プレデターが稔の目と鼻の先に着地した。

終わった、短い人生だった。良いことない、誇れることのない人生だった。稔は自分自身の一三年という人生の終わりを確信した。目の前でプレデターが今にも跳びかかろうと身構える。

「ごめんなさい……」

稔の呟きを掻き消すように、プレデターが地面を削って跳んだ。稔は両目を固く閉じ、最期を待った。

『ギイイイイイイインッ!!』

凄まじい金属音が絶叫して、空気を震わした。稔はたまらず両耳を塞ぎ、目を開いた。跳びかかって来たプレデターが、宙で躯体を二つに裁断され、あらぬ方向へと吹き飛ばされるのが眸に映った。何が起こったのか、判断がつかなかった。慌てて周囲を見渡した稔は悲鳴を上げそうになった。

数メートル離れた全壊した住宅の屋根の上に浮かび上がる機影。その右腕部分が巨大な鎌の形状を採っている。遠目から見ても、それはまるで蠅螂のような姿であった。戦闘用アンドロイド、騎士。

遠くでプレデターが地面に激突した衝撃が此処まで伝わった。稔は心を蝕み始めた恐怖から、再び逃走しようとした。腰が抜けたのか、足に力が入らずアスファルトの上でもがくことしか出来なかった。

そうこうする間に、騎士が跳躍して稔の目の前に着地する。

近くで見た騎士は、遠目で見たとおり、蠅螂を連想させた。逆関節の二本の脚部を持ち、白が基調の躯体に、ライトグリーンの塗装が線を描いていた。右腕の鎌がまるで死神の大鎌のように見えてしまう。言い難い恐怖を植えつける得物であった。

稔は自分自身の身を案じた。騎士は人間が操っているものだ。プレデターであれば、ただ『殺す』という動作を実行するのみであろうが、騎士の場合は人間の意志が加えられるのだ。その動作にも『いたぶる』など、多様な過程が加わる可能性があった。稔にとって騎士の存在は、プレデターと同義であった。殺戮者、破壊者。

企業が労働力の蒐集にランカーを用いた結果、外部居住区の間人は騎士に対しても恐怖と憎しみを募らせていた。

「殺さないでください……」

懇願するように稔は言い、額をアスファルトに擦り付けるように土下座した。騎士を人間が操っているのなら、もしかすれば自分の言葉を聞き分けてくれるのではと、思っている行動だった。

『えーっと……。いや、殺す気ないけど』

騎士から発せられたのは、少し高めの少年の声だった。どうも困惑しているようだった。思いついたように右腕の刃を収納して、再び声が発せられた。

『お前の名前は？』

「僕の……名前は、榎原、稔です……」

『えのはら、みのる……。ね。よっし、見つけたなッ』

見つけた、という言葉に稔は過剰に反応してビクッとして身体を痙攣させた。身を守るように縮こまり、自分の肩を抱いて騎士を見上げた。

『何で怯えんのッ！？ 俺、何かしたか？——ってうるせえよ由佳里ッ！！ 頭にガンガン響いてるからッ』

挙動不審に、目の前の蠅螂に似た騎士が左手で頭を押さえる仕草をした。暫し苦悶した様子を見せた後、再び騎士から声が発せられた。今度は耳に心地よい女の子の声であった。

『あーあー。聞こえますかー』

『うるさいから由佳里』

どうも少年の声と少女の声は別の場所から発せられているようだ

った。少年の声が頭部辺りから聞こえ、少女の声は腹部辺りから聞こえた。

『これぐらい耐えなよ美鶴。……んで君が稔君だね。君のお父さんとお母さんと、妹さんが依頼してきたんだよ。君を搜索して欲しいってね。だから安心してよ。私達は怪しい人間、君に危害を加えるような人じゃないから』

少女の言葉に稔は安堵した。彼らを信じる理由が出来たことに、安堵していた。心のどこかでは、助けてもらいたいと願っていたのだ。その気持ちを素直に受け入れる理由を探していたのだ。

「良かった……。本当にありがとうございます」

稔はよろめきながらも立ち上がり、感謝を口にした。

ランカーの中にも、心優しき者はいるのだろうと、考えを改めた瞬間でもあった。こんな辺鄙な場所まで搜索しに来てくれたのだ。いくら依頼と言っても、どれほどの労力があつたのだろうか、稔は申し訳なく思った。

これからは親孝行、由愛に何かしてあげようと決心した。

『んじゃ、戻ろっか。ほら美鶴、急がないと日が暮れちゃうよ』

『了解。んじゃ、どうする？ 鎌錐で抱えて運ぶか？』

『君は馬鹿なのッ?!』

『うっせーよッ!! 夕飯作ってやんねえーぞ』

『奪わないで、私のポトフとポテトサラダと——』

『ポトフだけだろッ』

ぐうううううう、っと腹の音が響いた。稔は赤面してお腹を抱えるようにした。外部居住区では、人権団体が週に一度ほどに配布

する食料以外に食べ物なかった。まして、この一帯はかつて都市であったために、農作が難航していた。最近まともな食事をしていなかった稔は、常に空腹であった。

『美鶴、稔君もお腹が空いてるんだって。彼の分も作ってあげなきゃ。これはもう、ポテトサラダとドリアと——』

『ポトフだけな。んじゃ、稔君だっけか、どうする？ 歩いて戻るか、騎士に運ばれたいか』

早く会いたい。家族に会いたい。その思いが強く、稔の胸を焦がした。

「すぐに家族に会いたいです。出来れば、運んでもらいたいです」
『了解』

『途中で落っことしちゃ駄目だからね』
『しないからなッ。怖いこと言うなよ。稔君が怯えるだろッ』

稔は、伸ばされた騎士の左腕に抱きかかえられるようにされた。意外にも安定した。

『うんじゃ、行くぞッ』

蟪蛄に似た騎士が姿勢を屈んで、踏み込んだ。ふいに稔の全身にかかるG。景色が高速で後方に流されていく。

騎士に運ばれる行為を例えるならば、そう。ジャットコースターであった。

騎士が飛び去った後に、声変わりがすんでいない少年の悲鳴が残された。

少女と少年と冬の蝋蝋（後書き）

うーん。

これから物語をどうしようか……。

ポトフが食べたい（前書き）

ポトフとは言わずとも、冬には暖かいものが食べたいですね。
目指せッ、夏！！ で頑張ってます。きっと。

ポトフが食べたい

『うーみーはーひろいーなー、おおーきーいーなー。わーたーしーかなづーちー、およげーなーいー♪』

「いきなり哀しくなったなッ。てか今の季節に入るのは自殺行為だかな」

一体の騎士が、砂浜で暮れなずみ始めて茜に染まる海原を、果てしなく遠い水平線を見つめていた。右腕の武装が目を引くフォルム。

「てゆうか、由佳里はカナヅチだったのか？」

『文句ありますか？』

微妙に喧嘩腰なのは気のせいだろうか。何故か敬語で話された。はぁ、と美鶴は溜息をついた。ちなみに騎士である鎌錐には、溜息をつく機能はない。すべて美鶴の精神体上の動作である。

「いや別に。由佳里が勉強が出来て、スポーツも出来る万能さんってわけじゃなくて、出来ないこともあるんだなって知れて得した」

ついでに言えば、容姿も優れているのが由佳里だろう。最近、肩にまで伸びた赤茶がかった髪を鬱陶しそうにしているのを思い出す。しかし、美鶴としては今の髪型も捨て難い。

『何か馬鹿にされた気がするけど』

不服そうな由佳里の声を無視して、美鶴は砂浜に鎌錐の足跡を残して歩いた。つい先ほど、依頼を達成してきたところだった。外部居住区の人々の人間不信は根強いのが現状だ。あの少年は少しばか

りは圈内の人間を信じれるようになっただろうか。そうであっても
らいたい。

押し寄せるさざ波が砂浜を絶えず濡らす。

久しぶりの海だった。かつて、大崩壊が起こる以前に海に行った
記憶があるが、その後の隔離壁に囲まれた後には海水浴をすること
は出来なくなった。圈内の海岸沿いは工業地帯が広がり、砂浜は姿
を消しているのだ。圏外は圏外で、未だに安全が確保されておらず、
海水浴を楽しむ人間はいないだろう。プレデター、その存在が全て
を破壊した。

しかし、日本は恵まれている。降水量の多い国であり、周囲を海
に囲まれているのだ。機械兵器であるプレデターの躯体の侵食は早
く、だいぶその危険性は薄まっていると言えた。あいかわらず、人
間に対しては脅威の存在であるが、ランカーによる掃討作戦は無事
に成功するだろう。

日本がもし、内陸国であったなら、降水量の乏しい国であったな
らば作業の難航が続いたかもしれない。実際、一部外国では難航し
ているらしい。日本国土解放に向けた動きに同調して、外国の可住
地域でもプレデター掃討作戦が計画された。しかし、想像を上回り、
活発な活動が続けるプレデターの抵抗を受けているらしい。

「日本での掃討作戦は再来週だよな」

『そうだね。それが成功すれば、外部居住区の整備も大幅に進めら
れるよね。美鶴も参加するんだから、がんばってね』

「りょーかい」

近い未来に、この美しく輝く海が人で賑わう日が来るだろう。人
間がない環境は、名状し難い感動を与えるが、やはり寂しさが漂
った。人間の社会で生きる者は、耳が痛くなるほどの喧騒を恋しが
る。

『さてと、そろそろ散歩も終わりにしてさ。料理だよー、夕食の準備だよー。ポトフだよー』

「はいはい」

美鶴は苦笑して、小さな子供をあやすように言ってて、鎌錐のカメラアイを海岸線の先に現れる巨大な壁に向けた。ディヴィディングライン隔離壁だ。いつかあの姿を拝むことが出来なくなる日もくるのだろうか。来て欲しいとは思う。そして騎士という存在もまた、いつかは消えなくてはならない。今でこそ、プレデターの排除、各エリアの防衛といった大義名分を掲げていられるが、その必要がなくなる日は遠くない。

柔らかな浜辺の砂を蹴り上げて、鎌錐を跳躍させる。右手に見える海の景観を横目で見やりつつ、美鶴はボロいアパートの一室でポトフを待ち侘びる幼馴染、もとい恋人のために急いだ。

「てか、何でポトフなんだよ」

『食べたくなったから。美鶴の料理のレパートリーが増えるから、お腹も満たせて一石二鳥でしょ♪』

「さようですか……」

食材があったかな、今月食費が足りるかなと思いつつも、美鶴は自分の帰りを待っていてくれる存在を嬉しく思った。自分は恵まれていると信じた。

外部居住区の住人の受け入れのために、多くの人々に許可証パスポートが発行され、通過料なしでゲートを通り抜けることが出来るようになった。その代わり、増加すると想定された強盗などの犯罪行為防止のための対策は数多となった。しかし、法だけが整備されるのではなく、外部の人々に対する救援として仮設住宅が建設され、給付金や

風呂場、衣類に食料なども提供された。

外周区での開発地域では、今もなお仮設住宅の建設が続き、多くの人々がいた。かつて出迎えた景色の寂しさを微塵も感じさせない活気に溢れていた。少なくとも、移住を決意した人々は幸せそうな表情をしていた。屈託のない笑顔を浮かべる子供達の姿に、美鶴はほっと安堵した。計画当初から懸念された圈内住人との衝突もなく、円滑に計画は進んでいるようだ。

その人々の中に見覚えある少年の姿を見つけ、美鶴は微笑んだ。鎌錐のカメラアイが捉えたのは、複数の人々と談笑をかわし笑顔を浮かべる稔の姿だった。心配は杞憂だったようだ。彼は無事に幸福の中にいた。

美鶴は踵を返して、アパートに向かった。さて、これから料理か。稔の家族構成は四人だったかと、考えながら市街地を進んだ。しばらく舗装路を走ると、途中で脇道に折れ、入り組んだ路地を急ぐ。

『食料は確保出来たから、安心してね』

唐突に由佳里から通信が入る。仕事中にどこかに買出しに行ってきたのかと思った。が、違った。

『はあ、はあ……。人使いが荒いぞ……。何故、儂の自腹なんだ』

由佳里の声の後に、息が荒い、しわがれた声が続いた。どうやら由佳里が文蔵に買出しを頼んだらしい。

「オヤっさん、どんまい」

『家賃を上げててもよいか？』

「やめてくれッ!!」

白のペンキが剥離したオンボロアパート、《白夢荘》の姿が視界

に映る。美鶴は大腿で近寄り、踏み込んで二階に飛び上がった。改装も修繕もされていないこのアパートの階段は、未だに赤錆に覆われている。近い将来に崩壊しないか、不安である。

美鶴は急いで、鎌錐の左手で部屋のドアを開けた。玄関に並べられた二人分の靴。一足は女性モノらしい褐色のブーツ、もう片方は下駄。かなり寒そうだ。

美鶴は鎌錐の脚の土を落として、奥の居間へと上がった。

「ただいまッ」

美鶴を出迎えたのは、微笑を浮かべる恋人と、しかめ面のおっさんだった。



「鍋に収まりきってないけど。ちゃんと蓋が出来てないよ」

「煮てるうちに、野菜の嵩かさが減るから大丈夫」

「感心感心。ちゃんと勉強してるね」

「おかげさまでな……」

美鶴はスマートフォンを片手に、ポトフ作りに励んでいた。しかも七人前。一つの鍋では駄目だったために、二つ鍋を並べて並行して料理をしている。既に料理はほぼ仕上がりを迎え、中火弱でじつくりと煮込んでいる段階だった。熱気が押し寄せ、暑さに美鶴はパーカーを脱いで腕捲うでまぐりをしていた。

「あと何分ぐらいで完成？」

由佳里が待ちきれないといった様子で訊ねてくる。

「だいたい、三五分煮て完成だってさ」

美鶴は時計を見ながら答えた。現在午後六時一五分。七時までに完成するだろう。

「あと三五分！？ うっわー、時間がかかるね」

由佳里が大袈裟に呻いた。頭に手を当て、天を仰ぎ見る。

「んじゃ、由佳里はオヤっさんの部屋を整理整頓しといてくれ。さすがにこの部屋に七人は無理だろ」

「そうだね、こっちじゃ狭いもんねー。んじゃ、私は片付けに派遣されてきます」

ビシッと敬礼して、美鶴の脇を通って由佳里が部屋を出て行く。間をあげず、すぐ隣の部屋のドアが開く音が聞こえた。

——にしても。

ふいに抱いた疑問。美鶴は思わず苦笑した。

——恋人の関係になっても、恋人になる以前と大差ないっていうか。全く変り映えしないっていうか。

別に以前から恋人みたいな関係だった、のだと自慢する気はない。拍子抜けしていたとでも言うべきか。単に二人の関係が『幼馴染』から『恋人』という名前に変わったただけな日常。

だからといって、落胆してはいない。他に代えることは出来ない日常、愛おしく、守りたい生活だ。

美鶴は身体を左右に捻り、筋肉を伸ばす動作をした。長い息を吐

き出して、目の前で白い湯気を噴出している鍋を眺めた。

ガチャリッ、と美鶴の部屋のドアが開けられる音が鳴った。「そろそろ、稔とやらの家族を呼んでこい」としわがれた野太い声が玄関から響いた。文蔵が来たらしい。

「んでも、まだポトフが完成してないんだよな。あと三〇分ってとこなんだけど」

「ポトフとはまた、洒落たもんじゃないな」

「つつても、ポトフはフランスの家庭料理だけだな」

文蔵が美鶴の隣りに肩を並べた。二人の身長は大体互角。僅差で文蔵に軍配が上がった。

「もうほとんど完成しとるじゃないか」

「あと三〇分、煮込んでいれば完成な」と美鶴が答えれば、文蔵が任せろと厚い胸板を叩いた。どうやら、吹き零れのないように見張り番をしてくれるらしい。美鶴はその厚意に感謝して、台所を文蔵に譲った。

「んじゃ、呼んでくるから」

美鶴は部屋を出る前に、炊飯器の予約をセットして、自室をあとにする。部屋を出たところで丁度、右隣りの部屋のドアも開く。そして、中から由佳里が姿を現した。クリーム色をした、裏地が赤のチェック柄のコートを着ている。

「あれ？ どっかに行くの？」

首を傾げる由佳里に美鶴は「稔君の家族を呼んでくる」と告げて、背を向けた。すっかり日の落ちて、暗く染まった街並みに明かりが

灯っているのが見受けられる。今日は風がなく、冷たくも辛くはない冬の夜だった。軋む階段に足をかけ、降り^{くだ}終えて暫く歩くと、背後から近づく足音。「待ってよー」と呼び止める声がした。立ち止まって、首を捻って後ろをみれば、由佳里が走って近づいてくるどころだった。

「どうしたんだよ。由佳里も来るのか？」

「そうそう。美鶴一人だと稔君がまた怯えかねないからね」

「この顔で怯えられたら、救われないって……」

美鶴は自分の童顔を思い浮かべ、短く息を吐いた。

「童顔だって言いことあるよ」

「そうだな。いいこと、あるよな」

——あって欲しいな。

美鶴の左手が唐突に握られる。柔らかく、暖かい少女の手の感触が伝わる。美鶴の心臓が早鐘を打って暴れた。

「あったでしょ。私は美鶴のカノジョさんになったんだよ。これがいいことじゃなければ、なんなの？」

そうだ。自分は十分すぎるほど、幸福の中にいる。美鶴は少女の手を軽く握り返した。

——こんな幸福なことは他にないだろう。

美鶴は赤面して火照った顔を反対に背けて、「そうだな」と呟いた。

「おッ、照れたね」

上機嫌である様子の由佳里に手を引かれるようにして、路を進む。目指すは外周区の仮設住宅だ。頭上には透明な空が広がっている。星が見えない夜の空だ。

目の前に広がる街の照明が、代わりに光ってやっているのだと威張っているような夜の情景だった。

ポトフが食べたい（後書き）

気ままに更新していきます。
目指せ夏！！ 夏祭り！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1713y/>

イロナキシ-Discolored death-

2011年11月26日23時00分発行